

---

# コナン対組織

菜花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コナン対組織

### 【Nコード】

N4258C

### 【作者名】

菜花

### 【あらすじ】

これはコナン達と組織の話し。ある日、組織がコナンを誘拐。組織との対決はこの日から始まった。そしてジンから告げられた残酷な言葉。コナンが灰原と交わした約束。守れる日はくるのか！？そして、コナンは無事新一に戻り蘭に思いを伝えられるのか！？

## 前回の話（前書き）

短編小説「組織への一歩」をお読みになった後、読まれるほうがわかると思います。

## 前回の話

〈前回までの話〉

ある日、コナンの携帯に灰原からの電話をうけ

博士の家へ行ったコナンは、何者かによって拳銃で撃たれてしまった。

そして、それから1日たってから組織と対決しおえるまでの話である。

## 前回の話（後書き）

読んでくださいありがとうございます  
これからも頑張ります

## 第一話 二人 (前書き)

灰原とコナンの会話です

## 第一話　二人

　　次の日

　　博士の家

「……あ……そうか昨日オレ……あのまま寝ちまつたんだ……」

「あら、やっと起きたの？　もうお昼よ？　まあそんな体だったから起こさなかったけど、もしも何もなかったら今ごろ半殺しよ？」

コナンが目を覚ましたのに気付き、灰原はクスクス笑いながら言った。

「え……もうお昼なのか？」

コナンは時計をみると針は11時をさしていた。

「あ、ほんとだ……」

コナンは苦笑しながら想像以上に寝ていた自分に呆れた。

「わかったんなら、さっさとお昼にするわよ？」

「えー？　ちょっと早くねえか？」

「ハアー何言ってるの……貴方のためでしょ？」

「俺のため？」

「ええ、だつて貴方昨日から何も食べてないでしょ？」

「あ……昨日の……」

コナンは自分自身傷の方に目をやった。

「大丈夫よ。ちゃんと傷の手当てはしてあるから。」

「ありがとな……灰原。それに、あの時、灰原が来てくれてなかったら、今の傷より、遥かに重い傷を作っていたと思う。」

「そう思うなら無茶なんてしないで!!」

半ば叫びながら灰原は寂しい顔をした。そんな彼女を見て、コナンは昨日から疑問に思っていたことを灰原に言つた。

「なあ……なんであの時地下室から現れたんだ？」

コナンは追求するような目で灰原をみた。灰原は少し顔をせらしてからコナンを見た。

「……それは……食事中に話すわ。それより歩けるの？ その体で？」

「だいじょう……」

……ぶだ!……つと言つ前にコナンがよろけた。

「何が大丈夫なのよ!? 無茶しないでつて、さっきも言ったじゃない! 何かっこつけてるのよ? ほら私に捕まりなさい」

灰原は少ししゃがんで肩を示した。

「悪い灰原」

その後、灰原につかまりながら食卓へと向かった。

## 第二話　昼食

コナンも席に着き、博士・灰原と共に昼食を摂り始めた。

「んで、昨日何があつたんだよ？」

「え、ああ……その話しね。昨日……夕方貴方がここにきたのよ」

「え？　俺が！？」

「ええ、私も貴方だと思って中に入れてしまった……其が間違いだつたの。馬鹿よね私、あの時少しでも組織の匂いに感じていたら……工藤君をこんな目に合わせずに済んだのに……」

「良いよ俺の事は。大した怪我じゃねーし」

うつ向いてしまった灰原に悪戯鬼のような顔で灰原に言った。

「でも……」

「んな事は今はいいから、話し進めろよ」

灰原の言葉を遮りコナンは次の話を言うように言った。自分の事でせめつづける灰原に、耐えきれなくなったのだ。

“灰原が悪い分けじゃないのに、逆に助けてもらった命なのに”　コナンは痛いほど胸がしめつけられた。

そして、灰原の話は進み始めた。

「昨日、成り済ましていた人物はベルモットと同じくらの変装術をつかう人物なの。私が工藤君だっと思うくらいにね」

「え？　じゃあまさか俺の正体を奴等はもう知っているって事か？」

「ええ多分そうかもね…話し続けるわよ？」

「あ、ああ」

「私、工藤君が本人だと思ってリビングまで誘導して、私はコーヒ―を入れるために台所に行ったの。そして博士の叫ぶ声がして、リビングにいくとー」

「博士が捕まってしまっていたって分けた」

灰原の詰まった言葉をコナンが受け継いだ。そう言った後舌打ちをして、一気に顔つきが変わっていった。

「ええそうよ。私はその後、何が何だか分からなくなって無我夢中で、博士を助けようとした……でも、逆に捕まって、手足を縛られ地下室に閉じ込められたの。その後、私の携帯を奪いどこかに電話をしていた。まさかそれが、貴方だったなんてね…正直びっくりしたわ。貴方が6時くらいにきた時は、私は地下室で一生懸命縄を解こうとしてた。したら銃声が聞こえて……殺されたと思ったわ。だから余計に縄を解くのに必死になった。そして自由になった私は地下室を飛び出してあそこに、居たと言うわけよ」

「俺が来る前にそんな事があったのか……ごめんな灰原…」

「工藤君が謝る必要ないわ」

「でもどうして哀くんを殺さず新一を殺そうとしたんじゃない？」

博士が横から疑問になっていた事を言った。その言葉に二人は考え込んだ。そして灰原が先に声をだした。

「多分私を精神的に追い詰めたかったからじゃない？」

「……ああ、だろうな。アイツ俺を撃ったけど殺そうとは思ひなかつた。あの時、俺は丸腰だったし、灰原の事で頭一杯だったからいつでも殺せただけ。でもそうはせずに灰原に邪魔をされた。大方、灰原の心に穴を空けたかったんだろう」

「そうじゃったのか……」

と博士が言った後、無言で昼食を摂り始めた。

### 第三話く相談く（前書き）

前回はそうですが誤字があれば申し訳ございません。少しづつ直していきます

### 第三話　相談

（昼食後）

「ねえ、発信器の事、気を失う前に言ってたわね？」

「ああ、その事なんだけど、鳥屋町二丁目で止まってるんだよ…」

「え？」

「じゃあ…すぐ其処じゃない!？」

「そうなんだけど、明日行ってみるか？」

「ダメよ！そんなの危険過ぎるわ!!」

灰原は険しい顔をしながらコナンを睨み付けた。

「でもな灰原？」

このままじゃあ一歩も前に進むこと出来ねーぜ？

自らが攻めなくてどうするんだよ!？」

「でも!」

コナンの言葉に否定し続ける

「大丈夫だ!」

ヤバくなったら俺が命かけてでも、お前を守りきるよ!」

「なんで？なんでそんなに！そんなに私を守ろうとするの??」

どうして、自分を優先しないのよ??？」

今まで溜めていた灰原の気持ちが一気に込み上がっていった。

「放っておけねーんだ!」

お前を…

何かと《自分が悪い》みたいな事思ってるお前を放っておいたら、

殻にとじこもって出てこなくなる。

世の中もつと楽しい事あるのに…暗闇に居るお前をどうしても光にあてたい。光に当てるにはそれ相応の事が必要…だから、俺は命をかけてお前を守りきる。」

コナンは今まで思っていた事を言葉にした。その言葉で灰原が折れた。

「工藤君…わかった。着いて行くわ…でも明日は駄目よ！足の怪我が治ってからにしないさ」

「えー早めのほうがいいんじゃないか…」

「駄目よ。その体でよくそんな事いえるわね」

灰原は呆れたたような声でコナンを睨み付けた。

「わあったよ！足が治ったら行くよ。」

博士？

運転たのむぜ？」

「わかっておる。くれぐれも無茶のないように！」

「そうよ工藤君？無茶しないでよ」

「何だよ二人して…」

二人の会話にコナンが拗ねたのを見て、灰原はクスクス笑った。

#### 第四話　完治・決意

（数週間後）

「もういいわよ。傷治ったわ」

「おう。サンキュー灰原。」

「後、肩と腕は大丈夫なの？」

「ああ、腕がちよつとだけ痛いかな。まあ、そんな心配するほど痛くないから大丈夫だよ」

「ホントに？」

ほんとに大丈夫なんでしょうね？」

コナンの言葉を信用しきれずに疑いの目をむける。

「大丈夫だって」

「ならいいけど…そう言えば蘭さんにはその怪我なんて言っているの？」

「ああ…サッカーしててシュート失敗で転んだって」

「どんくさいわね（笑）」

「良いだろ！幸い怪我は足以外気付かれてないんだから！！」

ムキになるコナンに灰原が今もわらいつづけていた。

「ね…それより鳥矢町にいつ行くの？」

「ああ、明日行くよ。」

それに発信器の反応が消えたのも気になるし」

楽しい一時が灰原の言葉で真剣な話しに変わっていった。

「え？じゃあ気付かれたの？」

「恐らくな。まあ明日行ったらわかるよ」

「…」

コナンの言葉に灰原は無言で睨んだ。灰原は不安でたまらなかった。この先何かが起きる…大好きなお姉ちゃんを失ったように。大好きな彼が失ってしまいそう…そんな嫌な予感を灰原は感じながらコナン小さく

「絶対死なないで」

ど、つぶやいて立ち去った。コナンはキョトンとした顔で

「ああ」

と、答え、事務所に帰って行った。灰原は地下室で泣いていた。

一通り泣き決意した。絶対犠牲者など出さず闇から彼らを引きずり出し、私も罪を償う為、工藤君を救い、光の下を堂々と歩く事を今日深く誓った。

## 第五話　誘拐・コナン編（前書き）

厄介な事になりました！その内容は次のページから。お楽しみに！

## 第五話　誘拐・コナン編

「帰り道」

コナンは考え事をしながら夜の道をおもひにいた。後ろから怪しい人物が居るとも知らず……。

「アイツじゃねえか？」

「ああ！最近テレビや新聞でちやほやされてるガキだろ？」

「アイツの親なら一杯金持つてるかもな」

そこには不適に笑う強盗団がいた。その事に気付いたコナンはベルトに手をやり周りを見渡した。

「誰だ！？」

コナンの目がきりつと睨む形で振り返った。

すると、振り向いた先に二人の男性がいた。

「ホー大したガキだな。よくわかつたな！」

男は笑いながらコナンに話しかけた

「ああ。殺気がしたからだよ」

そしてベルトに手をやりボールを出そうとした。しかし、コナンは気付いてなかった。もう一人が背後に居ることを

……そして背後からクロロホルムをかがされた。

(何?? あ、アイツは罔だった……の……か)

そのままコナンは気絶した。

「フツ、馬鹿なヤツだ。気付いたのは凄いが三人居ることまではわからなかったようだ」

「さあ！ さつさと運ぶぞ！ 精々いい夢でも見な！..」

その後車でどこかへ連れて行った。

（数時間後）

「う……ここは？」

コナンは朦朧とする、頭は少しふった。

「よお！ 気が付いたか？」

コナンの思考は一気に呼び覚まされた。まだくらくらする頭で口を開いた。

「だ、誰だ……おまえ？」

「俺か？ 俺は強盗さんだよ。ボウヤ」

「て……ことは身代金誘拐？」

「ああ、そうさ。まあ動きたくても、動けないんだ。さっさと電話番号いいな!」

そうコナンは身体中をグルグルに縄で巻かれていたのだ。

「言っでどうする気だよ」

「そりゃ、金奪ってお前を殺し、トンズラするに決まってるだろ？  
ヒッヒッヒ」

強盗団は高笑いをした。

「さあ！ 言え」

「…」

「いわねえなら殺すぞ?」

「…」

尚も口を開かないコナンに対して強盗団の一人が銃を一発コナンの近くに打ち付けた。

それでも口を開こうとしないコナンに遂に強盗団の一人がキレコナンに向かって銃を打ち付けコナンの肩に当たった。  
当たった場所を強盗団の一人が掴んだ。

「くっ」

コナンは痛みと悲鳴をこらえた。

「おら！　早く言えよ！　死にてーのか？」

コナンの肩をきつく握る。

そしてようやくコナンは口をあけた。

「早くいわねえからこんなことになるだけ。反抗したってどうせは無理なんだよ！！」

そう吐き捨てた男は睨むコナンの頬をぶん殴って立ち去った。  
その後、コナンは気を失った。

「このまま、殺せば俺ら有名人だな」

「ああ。裏では表彰してくれるかもよ？」

「そうだな。厄介者が消えるんだもん。まだ殺れねえけどな」

ある一室で高笑いがひびきわたった。

## 第六話　誘拐・毛利家

コナンが博士の家を出て三十分

ブルルルル  
ブルルルル

博士の家に電話が鳴り響いた

「はい。阿笠ですけど」

鳴り響く電話に食事をしていた灰原が受話器をとり応答した。

「毛利ですけど！　あいちゃん？」

「ええ」

「コナン君まだそっちに居る？」

「いえ。三十分程前にそちらに向かったと思いますが……それがどうしたの？」

「それが……コナン君が全然帰って来ないの……」

蘭は泣きそうな声でそうはいた。

「え？　江戸川君が帰ってないの？」

「そうなの……私居てもたってもいられなくて……少し探したけど

見当たらなくて……まだ哀ちゃんところにお邪魔してるかと思って電話したの。ごめんなさい」

「いえ。いいのよ。其より携帯とかに何も連絡入ってないの？」

「

「何もないわ」

「わかったわ。今からそっちにいくから」

「うん。よろしくね」

「ええ」

ガチャ

受話器を下ろし即ち博士に内容を話し準備をして探偵事務所に向かった。

コンコン

事務所のドアが数回叩かれ博士達が入ってきた。

「それで……なにか連絡はないの？」

灰原が鋭い目付きで質問した。

「ええ……無いのよ。どうしよう……もしもコナン君に何かあったら……」

「……」

灰原はなにもいえないままだった…

（もし組織だったらホントにやばいわね）

そんな事を思いながら一時間近く過ぎていった。

プルルルル

プルルルル

蘭は、電話に走り寄った。

「はい！ 毛利です！      コナン君？      ね！？      コナン君なら返事して！！」

「へっへっへ

毛利小五郎を出せ！」 受話器の向こうから低い男の声が聞こえてきた。

「誰…ですか？」

「いいから出せ！！！」

蘭は少し驚きながら小五郎にかわった。

「はいお電話かわりました」

「江戸川コナンと言うガキ殺されなくなったら、今から二時間以内に一億を用意しろ！      場所は、後で電話する。用意出来ない場合、ガキの命はないと思え！」

激しく電話の切れる音がした。

「なんなんだアイツ！ 急にかけてきてコナンを殺すって。しかも身代金で一億だどー!!」

小五郎は怒りながら受話器をおいた。

「え！ じゃあコナン君誘拐されたの？」

蘭は涙をこらえてこに聞いた。

「ああ、多分そうだろ。一億なんてとてもじゃないが無理だ」

「その前に警察に電話したら？」

灰原がもたもたしている小五郎に鋭く言った。

「あ、ああ」

小五郎は灰原の言動に驚きながら警察に電話をかけた。

## 第七話　誘拐・組織情報（前書き）

この誘拐組織が絡んでいます。コナンをたくさん撃つてごめんなさい…

## 第七話　誘拐・組織情報

「う…痛っ」

コナンが目を覚まし痛みには耐えられなく声をだした。

「よお？　起きたのか？」

今ごろ毛利小五郎が身代金を用意しているところだぜ」

強盗団の一人がコナンの見張りをしていた。

（え？　そうか無意識におっちゃんの事務所の電話番号いったんだ）

コナンは犯人に見つからないように縄を外そうとしていた。

「でも、お前ごときに金用意してくれるかな。まあ金が目的じゃないからいいけど！」

高笑いする犯人をコナンは睨み付け

「お前ら強盗する為に俺を誘拐したんじゃないかねえのか？　他に何か理由が？　まさか、強盗は表だけなんじゃ…」

「ああ？」

お前は黙つとけばいいんだよ！！」

コナンの胸元を掴み上げ怒鳴った。

「うう…」

コナンは苦しみながらも睨み続けた。

「そんなに知りてーのか？　知ったところでそんな体で何も出来ねえだろが！」

笑いながらコナンをおろした。

ゲホゲホゲホ…

下ろされ数回咳き込んだコナンに

「其所でじつとしてろ！！」

と、立ち去っていった。

誰も居ないことを確認してから探偵バッチに呼び掛けた。

一生懸命後ろ手で取りだものだ。

（良かった。後ろポケットにいれてて）

コナンは一息ついた。

（同時に）

毛利家には警察がきて小五郎と目暮警部が話し合ってる中、灰原の探偵バッチがなった。

（え…バッチがなってる…もしかして!!）

「江戸川君？今何処にいるの？」

「は、灰原？」

もう少し小声で頼む…」

「え…ええ。で、これ黒の組織関わってるの？」

「いや…わかんねえ…でも組織かも…身代金は表だけの話らしいから…」

「そう…で、今何処に居るの？」

「わからない…でも予備の追跡メガネでわかるとおもうから…それを、めぐれ…う……」

コナンは薬をかがされ気を失った

「洒落たもん持ってるじゃねえか？そんなに死にてーのか？」

眠りについたコナンに質問をする

バン

コナンの頬から微かに血がでている

「此で懲りただろう」

その後バッチを壊し立ち去った。

バッチからの声と銃声に灰原は戸惑いをかくせなかった

（まさか撃たれの？

それにあの声聞き覚えあるきがするわ…やっぱり組織？私を苦しめる為？

今は考えるより博士の家にあるメガネとってこなくっちゃ!!）

と、灰原は事務所を一気に飛び出し博士の家へ向かった…

（監禁場所）

「ほんとに油断も隙もないガキだ。二時間立ったな」

男は事務所に電話をかけた。

「毛利だ！一億用意した」

「ご苦労。では杯戸公園に來い！」

「わかった。その前にコナンの声聞かせてくれ…」

「ああいいぜ。おら！起きろ」

コナンの頬を叩いて無理矢理起こした。意識がもろろつとする中おっちゃんの声が聞こえた

「おい！大丈夫か？」

「おっちゃん？だ…大丈夫だ…よ」

その後

コナンは氣を失った。

「お、おい大丈夫か？」

「ガキなら大丈夫だ。グッスリお寝んねしてもらってるだけだ。」

「コナンに何をした？」

「くつくつく」

大したことはしてませんよ。早くいかなきゃ死にますよ？」

そう言い終わると電話をきって

コナンに向かつて

「もう！終わりだなフッフッフ」

「こんな簡単に捕まえられるなんて！組織は何苦労してんだよ。よし、あの人に連絡だ！」

## 第八話　誘拐・解決

博士の家に着いた灰原はメガネを探した。

数分後メガネを見つけスイッチをいれる。

「え…　米花町をさしてる…　どうしてこんな近くにいろの…　これ早く目暮警部にみせなきゃ…」

そしてまた灰原は走りだした。

（監禁場所）

「うう…」

コナンは目を覚ました。

目の前に犯人が二人いた。

「よお…　お前いまからあの人のところにお招きだ喜びな！」

「あの…　人…　？　だれなんだよ…」

「それは行つてからのお楽しみだ！」

そう吐いた後、足の縄を外しコナンの脇を二人で持ち歩きだした。

そして表に出た時、コナンは暴れ二人からすり抜け走った。

「チイ！あのガキまだあんな体力があつたのか！！」

「油断したな！」

二人は拳銃を取りだしコナンに向かって撃った。

コナンの腕に無数の弾があたる。

それでも、痛みを堪えて走り続けた。二人も撃ちながら追いかけて続けた。そして一つの弾がコナンの脇腹にあたり倒れた。

（クソ…　灰原…　早く警察を連れてきてくれ…　でなきゃヤバイ…）

意識がもうろうとするなか二人の声が聞こえてきた

「良く手を縛られてるのに走れるな。そこは誉めてやるよ！

でも、逃げるのは良くないな」

と、その時

「警察だ！！」

という目暮警部の声が頭に響いた。

「な、なぜ此処に警察が？」

二人は戸惑いコナンを抱え頭に銃を押し付け

「コイツがどうなっても良いのか？ お前ら道をさっさとあけ……」

犯人の一人がコナンを抱えたまま倒れた。コナンが時計型麻醉銃を撃ち込んだからだ。

「お、おいどうしたんだよ！」

倒れこんだ一人に目をむけた瞬間警察に捕まれ逃げ場を失った。犯人二人を手錠をかけた

「これで解決だな」

目暮は素晴らしいコナンに駆け寄った。

「警部……まだ……終わってない……こいつらの仲間はまだ一人居る筈……だから……」

コナンの周りは大量の血が流れていた。

「わかったから。喋るな。傷に響く」

「犯人確保」

遠くから警察の声がしてきた。

そして

「江戸川君……！」

向こうから灰原が駆け寄ってきた。

「あ……ありがとうな……又……借りつくっちゃった……」

そう言いおえるとコナンは気を失った。

次に目が覚めたのはベッドの上だった

「うう……痛っ……ここどこだ？」

起きたコナンは真っ先に灰原の顔が飛び込んできた。

「え……はい……ばら……？」

「ここ病院よ！何考えてるのよ！何沢山傷作ってぶっ倒れてるのよ

「少しは自分の体大事にきなさいよ！もう少しで死んでたわよ」

「わ…悪い」

「何約束破ってるのよ。無茶しないって言ったじゃない」

「べ…別に無茶はしてねえよ！」

「してるじゃない！傷作って死にかけろが無茶なのよ。犯人に勝てないのになんで反抗するのよ！」

「抵抗して、何も教えなかったら誰も危害つけねえじゃねえか！！それに灰原にも連絡付けられなかったら…今頃、あの人のところに連れていかれてたよ！！」

そう言つてコナンは咳き込んだ。

怪我に響いたのだ。まだ治つてもいないのに声を張り上げたコナンを見て、

「早く寝なさい！！」

《あの人》は、多分ジンの事よ！そんな弱りきつた体で何にも出来ないわ。先に回復する事を頭に叩き込んでおきなさい！」

そう言いながら睨み続ける灰原にコナンは力無しげに、

「わかつたよ…」

とだけ答え眠りについた。

## 第九話　病院・訪問者（前書き）

訪問者は蘭と少年探偵団と後一人訪れます

## 第九話　病院・訪問者

「次の日」

朝目を覚すと心配そうに顔を覗き込む蘭の姿が目に見え込んだ。

「蘭…ねえちゃん？」

蘭はハッとしてコナンを見た。

「良かった…コナンくん此処に入院してるって哀ちゃんから聞いたから…走って来ちゃった。ごめんね」

「蘭ねえちゃんが謝ることなんてないよ。僕こそ、心配かけてごめんね…」

弱々しい声で申し訳ないと言った顔をするコナンに蘭はニッコリ笑って、

「そうよ！コナンくん！心配したんだからね！そんなに怪我する程なにかあったの？」

「うん。灰原に連絡とってたから見付かっちゃって…それと…逃げようとして撃たれたの…ただそれだけ…大した怪我じゃないよ！」

コナンは痛みを堪え笑顔で言った

「何抵抗してるのよ！じっとしておいたら無傷だったかもしれないのよ？」

「ごめんなさい…」

怒られるのを承知の上で少しだけ話したけど余り怒られなかった事に少し啞然として誤りの言葉を言った。

「でも！子供に怪我負わせるなんて！

私許せない！もし、現場にいたら回し蹴りと踵落としをやってたわ！」

「蘭ねえちゃん…怖い…」

蘭の後ろに炎のようなオーラが出ている事に少しびくついて布団で顔を隠して怒りが消えるのをまつた。

「ご、ごめんなさい。コナンくん！」

蘭が戻るのを確認してからヒョッコリ顔をだして笑顔で笑った。  
その後、蘭は帰っていった。

（午後四時）

歩美・光彦・元太が病室に入ってきた。

「お…お前ら何で此処に？」

コナンがビツクリする中

「蘭おねえさんにきいたの」

つと歩美が即答した。

「も…。どうして言ってくれなかったんですか？」

「そうだ、そうだ！三人よればなんちゃらって言う諺、有るじゃねえか！俺ら三人いたらコナンも怪我せずに済んだかももしらねえのによ！」

光彦と元太が口々に言う言葉にコナンは睨み怒鳴った。

「バ、バロー！！」

何が助けられただ！！お前らに言った所で、今回の事件は何の解決にもならないんだよ！！逆に参加してたら俺だけじゃなくお前らも怪我するかもしれないかったんだ！！

危険すぎるんだよ！ただの小学生一年生にはな！！」

そう叫び息をきらせてお腹を抱えた。相当激痛が走ったみたいだ。

そんな事もお構い無しに、元太が怒り口調で言い換えした。

「なんだよ！その言い方！お前、俺らの事バカにしてるだろ！！どうなんだよ？！」

「バカ…にはして…ない…ただ…」

「辞めなさい。江戸川君それ以上しゃべらないで！」

灰原が駆け込んできた。それでもコナンは三人に言い聞かせた。

「ただ…お前らを…危険…に…したくない…だけ…だ」

「江戸川君！傷開くわよ！！貴方達今日は帰って！！」

「ま…てよ…灰…」

最後まで言おうとしたコナンに灰原がビンタをした。

「痛っ…」

「さあ…貴方達は帰って。」

二人は心配しながら病室をでていった。ただ一人元太は怒ったまま舌打ちをして二人の後を追った。

「ちよつと工藤くん？何してるの？痛み堪えてまで怒鳴り散らして、バカもいいかなげんにしなさい！」

と、灰原はコナンの手にある時計型麻酔銃をコナンに撃ち込んだ。

「うつ…灰…原…」

コナンは深い眠りについた。

「全く世話が焼けるわ。」

灰原はコナンの布団を綺麗に整え、立ち去って行った。

コナンは夜中に目を覚ました。

（灰原のやつ…なにも麻酔銃撃ち込む事ねえのに…）

と、溜め息を付き静かな部屋をみわたした。

最後に窓際を見てコナンの目が点になった。なぜなら其処には怪盗キッドが立っていたからだ。

「ど、どうして？」

「あゝ見舞いかな。何と無く情報入ったから見舞いに来てやったんだよ！喜べ探偵君？（笑）」

「あのな…何処で情報掴んだのかしらねえが…さっさと帰らねーと警察よぶぞ？」

呆れた顔のコナンにキッドはニヤニヤして置き手紙を置いて立ち去った。

「ハアゝヤレヤレ疲れたぜ…そういや何か置いて行ったな…なんだろう…」

と、手紙に手をやり読んだ

「《君との対決は一時休戦！追っている相手は多分一緒！ここで一  
つ情報交換しませんか？》」

「て、おい…アイツも同じ組織追ってたのか…あゝ、面倒な事にな  
りそうだ…ハア」

と、コナンは眠りについた。

## 第九話　病院・訪問者（後書き）

最後の訪問者は読んで下さった方にはわかりましたね？

次から十話に入っていきます！

楽しみに！

## 第十話　平和な日々（前書き）

第十話にやっとたどり着きました！  
皆様ありがとうございます

## 第十話　平和な日

「一ヶ月後」

「やっと退院ねコナン君」

「うん！」

蘭がとても嬉しそうに話すのを見てコナンもたま満面の笑みで返事をした。

「毛利家」

「よお！やっと退院したか。」

小五郎が新聞を読みながら言った。

（何か久しぶりな感じがするぜ。あの時博士の家から帰ろうとして捕まっちゃったから一ヶ月とちょっとここにいなかったんだよね）

コナンが見渡していたら台所から声がきこえた。

「コナンくん。退院祝いに大好物作ってあげるから待ってね！」

「あ、ありがとう」

コナンは照れくさそうに言った。

（まあ、今日くらいはのんびり暮らすか。また何が起こるかわかんねえし…）

コナンは腕の無数の後傷を見ながらそう思った。

「あ…コナン君まだ傷痛むの？」

台所からヒョッコリ現れた蘭は心配そうに言った

「違うよ！傷はもう治ってるから大丈夫だよ」

「そう？　じゃあ席に着いてご飯出来たから！！」

「うん、ありがとう！」

コナン達はいつも通り楽しくご飯を食べ始めた。

「ねえコナン君明日から学校だけど一日休む？」

「え？いいよ！もうピンピンしてるから明日から学校行くよ」

「そつか。でも気をつけるのよ！まだ体だつて鈍っているんだから」  
「うん！心配してくれてありがとう！！　じゃあもう寝るねお休み。」

「ええ。お休みコナン君！」

コナンは寢室に行き布団に入った。

布団のなかで今までの事を振り返りながら思った。

（俺以外傷つくような事がないようにしっかりとしなきゃ！　灰原と約束したしな！　俺は何がなんでも絶対死なない。待ってくれてる人もいるし、光を見せる役割もあるからな）

もう一度傷を見てコナンは決意を決めた。  
そして眠りについた。

第十話、平和な日々（後書き）

次くらいにあの人が出る予定！

## 第十一話 闇と光 (前書き)

会話がおおいです  
ごめんなさい

## 第十一話　闇と光

夜の道を黒き鳥のような車が走っていた。

「兄貴：失敗したらしいですぜ？」

「ああ、あいつらはヘマをやらかした！江戸川コナンというガキを捕らえて連れてくるはずだった。あのガキに確認したい事があったからな。」

次の作成で捕まえるぞ」

其処にはジンとウォツカが話していた。

「次も何かあるんですかい？」

「ああ、誘拐までは一緒だ。その後、直接本部に連れて帰る！」

「何を聞くんですかい？」

「お前には関係ない黙ってる！」

二人の会話は暗い闇へと消えて行った。

　　朝

「コナンく　　ん朝だよ！！」

「うん！」

（また平和な日が始まりそうだ…まあ時々休まなきゃな！）

コナンはアクビをして蘭の所へいった。

「コナン君？絶対気を付けるのよ！」

「うん！大丈夫！！」

「じゃあ行ってくるね！」

「はい」

蘭と別れ歩いていると大きな声で可愛い女の子が走ってきた。

「コナンく　　ん！！！！おはよう！！」

学校一緒に行こー！

それと、退院おめでとうー！！」

「歩美ちゃんおはよう」

その後に続々と仲間が走ってきた。

「コナンくん！おはよう！」

「おう！光彦」

「元氣そうじゃねえか」

「元太：まあな」

「俺、気にしてねえから！光彦達に散々怒られたよ…ごめんな、コナンまだ完治してねえのに怒鳴らせたりして…」

「気にするなつて！大丈夫だよ！もうピンピンしてっから！」

「そうか良かった」

元太が心配してくれてた事、とても嬉しかった。

「あら、いい友達に会えて良かったわね？ 江戸川君？」

「は、灰原！」

「何驚いてんのよ！」

「嫌：なんもねえよ」

コナンは内心、驚いていた。今までいなかったはずの灰原が急にきたからだ

（アイツは忍者かよ…）

「おはよう哀ちゃん！」

「おはよう吉田さん。」

《後で博士の家にきなさい》

灰原は小声でコナンに囁やき歩美ちゃんの所に行った。

「え？」

「どうしたコナン？」

少し驚いていたコナンに元太が不思議そうにこっちを向いた。

「嫌：なんでもねえよ」

「コナンく～ん元太く～ん！！遅刻するよ～」

歩美が大きな声で叫んだ。

「ああ（おう）」

コナンと元太は走って歩美のもとに行った。

## 第十二話 教室・心配 (前書き)

学校の中の話です！

平和ですよ！

## 第十二話　教室・心配

～学校の教室～

小林先生がHRをしに教室へ入ってきた。

「え～今日は喜びの日です！」

「どんな日ですか？」

子供達は口々に先生に質問していた。歩美達はニコニコしてコナンの空いた席を確認して元太達とアイコンタクトをして前を向いた。

「それはですね～江戸川コナンが帰ってきました！どうぞ～」

～ガラガラ～

コナンは恥ずかしいそうに下を向いてあるいていた。

「ほら、コナン君！何か一言！」

先生はハシヤグのような言い方でコナンをみた。

「あ…皆さん…心配かけてすみません。」

コナンの顔は赤くなっていた。

「じゃあ、コナン君いつもの席に座って！」

「はい…」

「では、授業始めるわよ～」

～放課後～

「ねえ、コナン君…絶対死なないでね」

「え？」

「だってコナン君良く怪我とか誘拐とか多いから…」

「心配してくれてありがとう歩美ちゃん！」

大丈夫だよ」

「ホントに？」

「ああ」

「じゃあ帰ろっか!!」歩美は廊下を走って行った。

彼女には何か察知しているのだろうかとコナンは考えた。

「あら、心配されてるわね。」

「灰原…会話聞いてたのか?」

「ええ…偶然ね」

「彼女を傷つけないためにも無茶はだめよ」

「あ…ああ。でも、お前が危険な目にあってしまうことがあったら俺は…俺は無茶をするから」

コナンは強い眼差しで灰原をみつめた

「え…」

「まあそうならない事を祈るだけだ!」

コナンはニツと笑って歩美の後を追った。

灰原も少し赤くなつた顔を隠しながら後を追った。

第十二話 教室・心配 (後書き)

お盆中は休む場合あります。  
すみません。

### 第十三話　親友

「博士の家の前」

一人の少年が博士の家を訪ねてきた。

「邪魔すんでえ」

「おお服部くん！待ったぞ」

博士は笑いながら服部平次を招きいれた。

「工藤とちっこい姉ちゃんは？」

「まだ学校じやろう」

「アイツも結構たのしんどるやん！」

笑いながら博士と雑談をしていると、

「ただいま博士、もうすぐ工藤君くるからあれだしといて」

「よお、ちっこい姉ちゃん！」

「あら、何しに来たの？」

士に頼まれたんや、《最近新一の周りが危険なんじゃ…きてくれんかの》て言うてな」

「博士は勝手に何してるのよ！」

「すまん、すまん。哀くん…もう、二人じゃ手がおえんと思つてな」

「だからってなんで服部くんなの？」

工藤くんがいたら激怒するわよ！！」

「もう居るんですけど…」

コナンはリビングの入り口で服部を睨んでいた。

「おまえな…博士に言われたからってノコノコくんじゃねえよ！」

「それが、心配してきちよる親友に対する礼儀か？」

「親友だと思つてんならささところから出て大阪かえれ！」

「なんやねん、その言い方！！」

「ちよつと二人とも！」

灰原が喧嘩の間に割って入った。

「私も工藤くんに賛成よ」

「は？ちつこい姉ちゃんまで何ゆうてんねん！！」

「まだ分らないの？」

灰原は服部を睨み付け言う

「工藤くんは貴方が心配なの。自分の事なのに、友達を巻き込みたくないのよ！」「せやけど、ここまで深入りしてもたら、最後まで……」

次をいおうとしたら、コナンの怒鳴り声が聞こえてきた。

「深入りがなんだよ！ほとんど、関わってねえじゃねえか！！お前が居ても役にたたねえし、邪魔なだけなんだよ！！」

「なんやと！！」

服部はコナンの頬を叩いて胸元を掴み持ち上げた。

「お前ならわかるやろ？探偵はやな、関わったら最後までやり遂げるや！」

そんなんもわからんのかボケ！！」「バ、バロー

おかしいだろ！これは、俺らの問題なんだよ！お願いだから関わらないでくれ」

「俺が死ぬとおもとんか？絶対俺は死なん！！」

沈黙が続きコナンがやっと口を開いた

「……わかった。好きにしろよ！ 但し、無茶するな」

話しが纏まりやっと服部はコナンをおろした。

コナンの頬が赤く腫れていた。

「すまん、すまん。おもいつきり叩いてしもたわ」

服部が謝っているうちもずっと睨んでいた。、そこに声がした

「ねえ、工藤君が人に《無茶するな》って言える立場なの？」

「え？」

コナンがポカンとした顔で灰原をみた。

「貴方バカ見たいに無茶してるじゃない！怪我してるじゃないの！良くそれで、無茶するなって言えるわね」

「あれはしょうがねえだろ？ ああでも、しないと怪我どころか死

んでたぞ俺」

「な、なんのはなしやねん」

「ああ、お前知らねーのか…」

「まあその話しは後よ！博士あれもってきた？」

「ああ」

コナンと服部は顔を見合せて、灰原達をみた。

## 第十四話　手がかり

博士と灰原の顔を見ると、とてもやりきれない顔をしていた。

「前に貴方に麻酔針撃ち込んだ日覚えてる？」

「あ、ああ」

「なんや、いつのはなしやねん？」

「そうね、服部君は知らないのよね。いいわ話してあげる…一ヶ月  
前工藤誘拐されたの……………」

灰原は大体のことを話した。

「ハハハ、工藤がやりそうな事やな」

「うるせーよ…それでどうしたんだよ？」

「次の日、鳥矢町にいったの」

「え！な、何危険な事してんだよ！！オメー！！」

「あなたには、言われたくないわ！黙ってききなさい」  
言葉と同時にコナンを睨み付けた。

コナンは黙り込んだ。

「鳥矢町にある小さな倉庫があつてね。もう誰もいなかったけど…  
そこには、私顔の覆面が落ちてた。」

「それってまさか…」

コナンは目を真ん丸に見開いた。

「ええ、あの日貴方を脅した人が居たのよ！それに発信器と盗聴  
器がこわされてたわ」

「盗聴器が壊れてるってことは、気付かれてたのか…」

「やばいんちがうん？」

「ねえ？その話しもつと詳しく話してくれない？」

「え？」

三人はびっくりして、後ろを振り向いた。

「ジヨ、ジヨディ先生どうしてここに??」

三人を代表してコナンが口を開いた。

「ちよつと聞きたい事あつてきたけど…チャームならしても誰も出ないし、鍵開いてたから入ってきたらこの状況ってわけ。さあ聞かせてくれない？」

「ええ、わかつたわ。覆面とか見つけた後、他にも何かあるかもしれないと思つて探したの。」

ここで灰原が言葉をとめて博士の側に行きある物をもって帰つてきた。

「引き出しの底のほうに、グチャグチャにしてあるのを見つけたの」「これって…まさか…」

「ええ私の父よ」

灰原が差し出したあるものというのは古い写真だった。

「少し若いけど間違いないわ…」

「じゃあ、隣で微笑んでいるのって」

「ええ、母よ、後抱かれてるのが私、父と母の間にいるのが姉でしょうね」

「でも、どうして、こんな写真が倉庫にあつたんだよ。」

「多分初めはここで研究やつてたんだと思うわ」

「そうね、そうかんがえたら、写真があつた意味も納得つくわね」と、ジョディ先生も同意した。

「情報はこれだけよ」

「まあ、危ない事したけど、手がかり見つかつて良かったんちゃう？」

服部がコナンをみた。

「ああ…そうだな。」

ジョディ先生のほうは？」

「あ、ええ私ちよつと貴方に聞きたい事あるのよ」

ジョディ先生はコナンを見た。

「え？なんですか？」

「誘拐された時何か言って無かった？」

「その事ですか…」

「いってました。誘拐は表の犯行だって、後、俺をあの人の所に連れていくって」

「そう。ただの誘拐じゃなかったわけね。組織が絡んでるわけ」

「あの人達捕まって何て言ってるんですか？」

コナンの質問に雲った顔を一瞬みせた

「え…それはね、貴方を誘拐したら金がたんまり入るって言うてたらしいわ。」

「やっぱり組織の事はいわねえか…」

コナン達は少し落ち込んだ様子だった。

「じゃあ私、まだ仕事あるから」

「そうですか…では  
気を付けて」

ドアが閉まったのを確認してコナンは二人を睨む感じて見た  
「何？」

灰原がそれに気付いて声をかけた。「ああ…お前らに言っておかなきゃいけないことがあるんだ」

「何や？」

「キッドが協力しようって」

「はい~~~~~？」

服部がビククリしているなか、灰原は平然の顔をしていた。

「いつ、きたの？」

「麻酔針を撃ち込まれた日の夜中に」

「で、どうするんや」

「明後日、米花ホテル屋上に行けばわかるよってさ」

「そっか気いつけや。」

「わかってるって」

そこで一先ず解散となり、コナンは家に帰ってた。

第十五話　キッドからの情報　（前書き）

進展なくすみません

## 第十五話　キッドからの情報

（二日後）

「んじゃ、行ってくるよ！」

「ええ、気を付けなさいよ！」

コナンはキッドとの待ち合わせ場所へ向かった。

コナンがある屋上に堂々とたった

「もう、居るんだろ？」

コナンは当たりを見渡した。

「居ますよ。良く分かりましたね。」

「ちょっと気配感じたからな」

コナンは不適な笑みをキッドに見せつけた。

「へー、さすが名探偵」

キッドは拍手しながら笑いを見せた。

「んで、何の用だよ！」

「アジト情報…かな」

「何！？早く教えろよ！」

「そんなに興奮しなくてもお教えしますから」

「……」

コナンは興奮を押し殺した。

「では、教えましょう。」

名探偵が探しているアジトは多分烏矢町にあると思いますよ。」

「まさか！？　んなわけあるかよ！」

「彼処に元組織の建物あったのでしょうか？」

「ああ」

「彼処以外にもまだあるんですよ！でも、もっと山奥です。信じるか信じないかは、貴方次第ですよ」

「わかった。信じてみよう」

コナンは強い眼差しでキッドを見つめた。

「んじゃ。ありがとうな」

コナンがキッドに背を向け歩いていると、声がした。

「後一つ！彼処のボスは宮野ってやつだ」

キッドは半ば叫び声でコナンにいった。

「えー!？」

コナンが振り向いた時にはキッドは居なかった。

そのまま、屋上から降りながらコナンは心のなかで考えを必死にまとめていた。

（まさか……灰原の父親があの方なのか……？ でもどうして……死んだはずじゃあ無かったのか？ それになぜ父親なのに灰原を殺そうとしてんだ？ 何故姉をジンに殺させたんだよ！！わかんねー！）

コナンは悩みながら博士の家へ向かっていた。教えたくない情報を握りしめて。

そして、前方から慌ただしく走って来る人影が目に入った。

## 第十六話　組織行動開始

「は、灰原！？どうした？」

「工藤くん。は、博士が奴らに捕まったの！はやく…来てほしいの。」

「何だつて？！ホントかそれ！？」

息をきらしながら走ってきた灰原が必死で訴えると、コナンが一瞬のうちに表情を強張らせた。

「で、奴ら何か言つてたのか？」

「ええ。《鳥矢町の北の山奥にある古い倉庫に来い》って」

「わかった。灰原は危険だから一旦、家に帰つてろ」

灰原から伝えられたコナンは、直ぐさま乗り込む事を決めた。そしていざ歩を前に出した時、灰原の口から思いがけない声が零れた。

「嫌よ！私も一緒に行くわ！ほら、急ぐわよ！」

目的地に向かう最中、徐々に人気の無い所へと誘導されている事に気付いたコナンは、灰原の言動そのものに違和感を覚えた。

（灰原？なんか可笑しくねえか？それにこの先は鳥矢町じゃねよ）

思い当たった疑問をコナンは直球で灰原に投げつける。

「なあ、灰原？　おまえ可笑しくねえか？」

「あら、何が？」

「何時もの灰原なら自分から《一緒に行く》なんていわねえよ」

探るような鋭い目を向けられ、灰原は立ち止まってコナンの方に向き直し、不敵な笑みを口許に浮かべた。

「フン、さすがね。」

私は、《灰原哀》じゃないわ。でも、気付くの少し遅いわよ！？」

「どつという意味だ？！」

と、困惑してる瞬間頭に激痛が走り倒れ込んだ。

「お前…だれだ…よ」

「私？スコッチとだけ言っておくわ」

「スコッチ…だと」

薄れゆく意識の中、コナンは少女が語った名前を反芻し、気付かないように探偵バッチのスイッチを入れた。

コナンは完全に意識を手放した。

「やっと、静かになったわ、午後八時少年確保。それじゃあ、ジンの元に送ってあげなさい」

「はっ」

二人の男がコナンを縛り車のトランクに載せ走り去った。

〈同時刻〉

灰原のバッチから話し声が聞こえた。

「え、何で？」

「どうしたん？葵ざめた顔して。なんかあつたんか？」

「工藤くんが 彼らに捕まった…」

「なんやと！？ だれや！工藤さろたんは？」

寝耳に水の大事に、平次があからさまに動揺を見せ、尋問地味た鋭い口調で灰原の返事を急かす。

「スコッチよ…」

「誰やそれ？」

「《千の顔をもつベルモット》の子供バージョンよ」

「なんやて？ せやったら、まさか姉ちゃんに変装したスコッチっちゅう奴が、工藤を拐<sup>かどわ</sup>かしたっちゅう事かいな？」

「恐らく。そうとは知らずに、工藤君は人気を避けて捕らえた。まあそんな処かしらね」

「それで、どないすんねん」

「工藤くんとの連絡を待ちましょ。最も彼が身動き取れた場合だけ……それに、最悪は――」  
言い淀んだ言葉をそのまま飲み込み、灰原は唇を固く結んで力無く肩を沈めた。

「車のトランクの中」

「痛っ……何処どこ？」

頭に走る激痛に眉をしかめコナンは少し考えた。そして、車のトランクの中に押し込まれているのに気付き、その理由も行き当たった。

（また……か。また、誘拐されちゃったのか。バカだよな……直ぐあの女の子を灰原だと思っちまうなんて……）

自嘲の笑いを浮かべると、コナンは必死に身体をよじって何とかバツチを取り出し、声を潜めて話し掛けた。

「灰原？」

『工藤くん？大丈夫？今はどこ？』

「殴られて頭痛でえけど大丈夫だ

とこかわかんねーけど、車のトランクの中に閉じ込められてるみてえだ。」

『そう。今から貴方ジンとご対面らしいわよ。』

「そうか！フン、もう少しか！」

ジンに会えると聞いて、コナンの顔に自然と歡喜の笑みが滲み出た。声色で感じ取った灰原が、それを窘めるように語気を荒くする。

『何喜んでるのよ！貴方自分の立場わかってるの？』

「もうじきだぜ？あいつらとの決着！やつとぶつ潰すことができるんだ！此が喜ばずにいれるかよ」

コナンの心臓は高鳴っていた。今まで追いつけて来たやつらと接触することに、危険とわかっていてもこの好奇心は止められなかった。「それより、お前ジヨディ先生に鳥矢町の奥山にある工場か古い倉庫をしらべて、って伝えてくれ。」

其処がかれらの本拠地だから！じゃあな」

「まって！工藤君？ねえ！」

灰原がとめた頃にはバッチの電源はきられていた。

そして灰原は仕方なくジヨディ先生に連絡をとった。

「ーってわけだから、至急調べて下さい！江戸川くんが危険なんです！！」

「わかった！また連絡するわ」

（誘拐されて一時間後）

一つの車が鳥矢町の工場に止まった。

「よお！起きてたのか。」

「ここは？凄い真つ暗だけど」

「まあ、周りは山で街灯ねえからな。」

一人の男がコナンを持ち上げ工場へと入っていった。

中には凄い沢山の機会や人がいた。

そして、地下に降りて窓一つない部屋へと押し込まれた。

「今日から其処がお前の部屋だ。前みたいににげられんよ！

それと、携帯は…」

コナンのポケットを探り携帯をとり、壊してしまった。そして携帯の弾みでバッチが床におちた。不思議そうに見た後、銃を打ち付けた。その後、ポケットの中身を空にして、

コナンの手を後ろにまわし手錠をかけた。

「足は外しといてやるよ！これから、使うからな。」

それに、窓もないこの部屋で長時間居たら酸欠になって叫ぶ元気さえなくなるだろうしな」

と言に残し、分厚いドアをしめ、鍵を掛けた。

〈午後十時〉

灰原は蘭に心配をかけないように、

『一週間博士の家でお泊まり会をするから帰ってこれない』  
つとコナンの声でつたえた。

電話を切り自室に帰りパソコンを開いた。

灰原はコナンが言っていた言葉を元に鳥矢町の山付近にありそうな古い倉庫や工場を地図で調べた。

一段落終え、時計をみると深夜二時をさしていた。

灰原は明日からの戦いに備えて、寝ることにした。

## 第十六話　組織行動開始（後書き）

遅くなりすみませんでした。

十六話から組織やコナン灰原FBIなどが出てきます。

## 第十七話　組織・コナンへ質問

コナンは監視カメラ以外何もない部屋を見渡した。

（何か、犯罪を犯した人みてーだな。ハハ）

そんな事を思いながら部屋の真ん中で力なしげに笑った。本当なら灰原に言わなきゃいけない大切な話だってあった。そして、連絡手段さえなく連れてこられてから約三時間がたちコナンに限界が近づいて来た。

（あー、まじで気が遠くなりそうだぜ…）

そう思ってから数分後コナンはバランスを崩し床に倒れた。頭の回転が鈍る。

《何もしたくない、ただそこで寝ておきたい》そう思ってしまったのが間違いだった。コナンはそのまま深い眠りについた。

～二日目・午前八時～

体が揺れていることにコナンは気付き目を覚ました。

「うう。え…？」

「起きたか？良く寝るガキだぜ。」

「おじさん？僕を…何処に連れていくの？」

見知らぬ人の背中にコナンはいた。まだ、あの部屋のせいで頭がハッキリしていないコナンは状況を掴むことが出来なかった。というより昨日連れてこられた後の記憶がほとんどなかった。

「ジンって言う人のところさ。」

「ふーん、そっか。」

コナンは頭をフル回転させて今の状況をやっと思い出し理解した。しかし、理解したが暴れる体力も、それ以上考える気力もなかった。其のままの状態で暗い道を進み一階へと続く階段を上り、ジンのところへと連れていかれた。

「ジン様。連れてきました。」

「入れ。」

「はい！」

男の言葉にジンが反応した。

そして、ジンのところへ行き、椅子にコナンを座らせ一礼をして立ち去った。

ジンはコナンに目を向け低い声で質問をした。

「よお。お前が《江戸川コナン》か？」

「ああ」

コナンもジンに目を向け、はっきりした声でジンに答えた。

「じゃあ本題に入るぜ？ お前「工藤新一」か？」

「ちがうよ！」

コナンは即答した。

その言葉がジンに刺激を与えたのか、乾いた銃声と共に、頬に痛みが走った。

そして、頬から一筋の血が流れた。コナンは驚きの顔でジンを見詰めた。

「今はもういい！頭冷やしにいくぞ。」

コナンはその意味がわからなかった。

そして、部下を呼び、コナンの両腕を持ち歩かせジンと共に、『溜め池』

のようなところへ連れていかれた。

コナンはハッとした。何をされるのか池の前に来て気付いた。しかし、抵抗しようとはしなかった。そしてジンはまた同じ質問をする。『工藤新一』か。と。そう問われてもコナンは『違う』と言いつつた瞬間、顔を水に押し込まれた。

抵抗したが手が塞がれた状態でなにも出来ず数十秒程度押さえつけられたまま放置され、引き上げられ、また同じ質問をされた。その繰り返しを三回やっても否定し続けた。

必死に堪え息を切らすコナンにジンは笑った。その後、コナンを睨

み付け肩に向かつて銃を放った。いつもなら身軽に避けれる弾も今のコナンには、そんな体力は残っていなかった。コナンが顔をしかめた時、勢いよく顔を池の中に押し込まれた。この時大量に水を飲んでしまった。そんな事お構いなしに、更に押し込まれ血が出てる肩まで池に浸けられた。

池が少しづつ赤くそまって行く。

傷に当たる水の痛みに徐々に気が遠くなっていき気を失いかけた時、引き上げられた。

引き上げられたコナンは安心して、そのまま気を失った

「処せんガキはガキだな。」

高笑いをしながら部下は、コナンを床へと置いた。

その床に血の道が川のように出来上がった。

「フン、気がつくまで、あの部屋に閉じ込めとけ！まあ、生きてたらの話しだが！」

ジンはコナンを見ながら吐き捨てた。

「はい、しかし本当にガキは工藤新一なんですか？」

「ああ 指紋の承合はもうとってある」

この言葉を聞き部下は驚き疑問を口に出した。

「しかし、分かっているのになぜそのまま生かすのですか？」

「コイツから直々に告白してもらう。後、こいつはシェリーを匿っている俺は思う。」

「其を吐かせるんですね」

「ああ。」

「でもシェリーはあの方の娘。勝手なまねしていいのですか？」

「お前には関係ない！」

あくまで何も話そうとしない、ジン。部下にとってなぜそこまで殺したがるのかわからなかった。もしかしたら《コナンを一発で殺さずジワジワ苦しめるのは、他に意味があるのでは？》と部下は思った。

そんな会話が終わりコナンは部屋へと連れていかれた。

目を覚まして時計を見ると午後八時をさしていた。

「俺、昼からずっと気を失ってたんだな」

体を動かした瞬間肩の痛みに気付き顔を歪め反射的に手を肩に置くとしたが動かせずに痛みに耐えた。

肩は軽い傷だったがそれでも痛みはあった。肩の傷を治療する事も出来ない応急措置すらできない状況はキツイものだった。そして、またあいつらはコナンのところにやってきた。

「出る」

その一言でコナンが動こうとしたが、肩の傷と酸欠の関係で体が思うように動かずその場で倒れた。

「ハアッ自分で立てねえのかよ。」

「うるせえよ」

睨むコナンに高笑いをする彼らにコナン叫んだ。

「何のために俺を招いた！？俺が工藤新一ならなんなんだよ！？」

「関係ねえだろ？」

「大有りだよ！」

そんな言葉がかえってきてコナンは驚きを隠せなかった。両手がふさがった状態でコナンは一生懸命立ち上がった。

「他に聞きたいことは無いのかな？ぼうや？」

子供扱いされた事に怒りが頂点に達してわめいた。

「俺に、質問攻めしてどんな特があるんだよ！！」

息をきらしながらも必死に質問をした。

「さあね、質問に拒否らず答えたら最後にわかるんじゃないか？

何故お前を拉致したのかがな」

そう言い壁を支えにしているコナンの腕を持ちまた何処かへつれていかれた。

コナンは少し考えた。そして自分はシェリーをつる餌だと思った。その後、つれていかれた場所には、ジンやウォッカがいた。

ジンはコナンを真っ直ぐ見て質問をした。

「もう一度聞く！お前は工藤か？」

コナンは遂に肯定した。

「ハン！やっぱりな」

「やっぱりってなんだよ！？」

コナンは息をきらしながら怒鳴った後、自分の前に一枚の紙が置かれた。コナンは無言で見た。

それは指紋を承合された紙だった。

「隠さずとも知っていた。サツさと吐けば怪我なんぞせずにすんだのだ！」

ジンはそう言い注射器をとりだし、コナンに近づいた。コナンは抵抗しようとしたが、ウォツカに肩をもたれ身動きが取れなくなった。ただ痛みに耐えるしかない状態の中、何かを首筋に注射された。

「な、なに……し……」

せつかく言った言葉も、もう言葉ではなかった。そして次第に瞼がしまり床に崩れ落ちた

「部屋に入れとけ」

「はい」そして部屋へと連れていかれた。

## 第十七話、組織・コナンへ質問、（後書き）

こんにちは、

ちよつと遣りすぎかなって思ったのですが、もし組織に捕まってしまつと此くらいされるかなって思います。しかも、まだまだコナンが苦しみますp（、、q）

さて、ジンがコナンを誘拐して殺さず苦しめる理由。実際どんな理由なんでしょうね？  
考えてみて下さいね

## 第十八話　涙

二日目

灰原は四時に目が覚めた。

コナンの事が心配で寝つけず台所に向かった。暗闇の中、水を飲んでいると後ろから声が聞こえた。

「寝れへんのか？」

その声は服部の声だった。彼もまた寝付けずに台所にきていた。

「ええ」

灰原は短めの返事を返した。

その後少しコナンの話をして寝室へ帰った。

朝の七時ごろ博士の家で電話が鳴り響き、灰原は少しの期待を抱き、受話器を持ってやや急ぎ気味に名前を出した。しかしその電話はジョディ先生からであった。

「哀ちゃん？」

ごめんなさいね。期待を裏切って江戸川君だと思ったんでしょ？」  
ジョディ先生の質問に素直に『ええ』と答えた。

「鳥矢町の件で伝えたいことがあるから、昼頃そっちにいくわ」  
「分かりました」

灰原は短く答え震える手で受話器をおろした。そのまま、灰原は力が抜けたように床に座り込んだ。張り裂けそうな想いで自分の心に問いかけた。

（なんで工藤君なの？）

彼が何しなたっていうのよ！！）

灰原の瞳から大粒の涙が溢れ出た。もし、神様がいるのなら彼を救って欲しいとまで願うほどだった。座り込んでる灰原に博士が声を

かけた。

「彼なら大丈夫じゃよ」

と、優しい眼差しを灰原に向けた。

灰原は下を向いたまま心中で反論をしていた。

（あいつらに捕まって大丈夫なわけがない。下手をしたら命などない）

そんな気持ちを押さえ涙を見つめていた目を博士に向け、小さな声で『うん…』と答えた。其処にはもう涙などなかった。

（午後一時）

ジヨディ先生が訪れた。

そして、広間に誘いお茶をだして話は開始された。ジヨディ先生が持ってきた地図に《×印》が四ヶ所ついていた。

「これが怪しい場所よ」

ジヨディ先生は各々に指を指した。

「ちょ！まてや。」

めっちゃあるやん！」服部は大声で立ち上がった。

そんな服部を無言のキツイ灰原の視線を感じ大人しく座った。

「今此处を調べに行ってるわ。」

と、指差したのは山に入る直前の場所だった

「まだ連絡来ないのはハズレでしょうね。」

と、少し暗い顔をみせたあと、

ギッと睨み付け服部に刺のある言葉で静かに話した。

「あなたは、本拠地が見つかったもここにいなさい」

当然の事ながら服部は立ち上がり怒鳴った。しかしジヨディ先生は冷静で一步も譲らず説得した。

「あなたは部外者なのよ。ただのクールキッドの友達。一般人！それに哀ちゃんやクールキッドと違ってあなたは全くといっていいほど関わりがない。そんな貴方に何も出来ないわ。大阪に帰りなさい」

言い切ったジヨディ先生に抵抗出来ず部屋へと行った。

そんな二人の会話がかわると灰原が静かに話しかけた

「で？何か情報は？」

「ええ、ここには誰も居ないらしいわ。」

「そう、後三ヶ所…」

「ええ、今…山の中甸近くの二ヶ所を調べてるわ。」

しかし夕方になってもほとんど情報はなかった。

ただ、山の中甸の建物両方に人が出入りしているのを確認して張り込みを続行した。

山の頂上付近はもう人どころか、建物自体が危ない状況だったので、すぐに違うと気付き除外した。

残り二ヶ所一向に怪しい動きが無いため、

明日から本格的に張り込みするため今日は各二人ずつ残り解散となった。

ジヨディ先生も帰る準備をした。

「じゃあ今日は遅いからまた明日動きがあればまたおしえるわ。」と、言い残し去っていた。

灰原はジヨディ先生を見送った後、地下室に閉じ籠った。ベッドに横になり深呼吸をした。そして、体を万全にしておくためゆっくりと瞼を閉じた。

不安な一日目が幕を閉じようとしていた。そして、この後悪き情報が入るとは誰が予期しただろうか…。いつ見つかるのか、無事助かるのか、いつ奴らは捕まえる事が出来るのか、不安が積もる一方だった。

## 第十八話「涙」(後書き)

《涙》は誰かわかりましたよね！

不安が積もる一方でコナンはどうなっちゃっているのか…

次回コナン編です！

この話、17話から途中までコナン・FBI(灰原)・コナンの感じで続いて行きます！

評価・感想待ってます！

第十九話 意外な助っ人！？（前書き）

コナンはある人によってジンの手から解放されます！！

## 第十九話　意外な助っ人！？

　三日目午前七時

　コナンは目を覚まし体の異変に気付いた。

　そう、コナンの体は動けなかったのだ。

　縛られてる訳ではなかった。

　それは昨日、射たれた注射が原因らしい。

　（麻痺か…あの薬には睡眠薬以外に麻痺させる薬まで投与されていたのか…）

　コナンが納得したと同時に、ドアが開きジンが入ってきた。

　「どうだ？全体を縛られる感想は？」

　ジンはコナンの首を片手で持ちあげ笑みをみせた。

　「フン。話す事も今は出来ないか。後約二時間くらいで薬が切れる」

　そう伝えコナンは壁に叩き付けた。

　そして出ていった。

　コナンは少しの間気を失った。

　意識が戻ってもやはり体は麻痺をしたままだった。

　（あいつ…なんの為に俺を生かすんだよ。何がしたいんだよ！  
　痛めつけて、喜んでるだけじゃねえか！！）

　言葉に出来ない気持ちを押し殺した。

　二時間半後

　ようやく体全体の麻痺はきれた。

　コナンの体はぎこちない動きで少しリハビリした。

　その時ドアが開き部下が入ってきた。

　「どうやらきれたみたいだな。実験成功」

　不適な笑みとともに、またコナンは、ジンの場所につれていかれた。

コナンは少し考えたあと引っ掛かっていた事を口に出した。

「実験ってなんだよ？」

部下は問いかけに答えなかった。

ただ笑っているだけだった。何も教えてくれそうにない事がわかり黙った。

そしてジンの前にある椅子に座らされた。

「おまえ、FBIに連絡とっただろ！？」

ジンの急な言葉にビックリして哑然とした。

そして我に帰ったコナンはジンを睨み付け一言呟いた。

「知らねえよ」

「いい度胸じゃねえか」

ジンは部下に目をむけ何かを持ってこさせたそのあるものをコナンの前に置いた。

それは果物ナイフだった。

そしてジンは同じ質問をした。

コナンは何も答えようとしなかった。

そしてジンに『やれ』の合図とともに、果物ナイフの刃先をコナンの左手に握らせた。

「ぐうつ」

白い床に赤く丸い模様をつけていった。

「まあいい、向こうからは、わからん。表は普通の工場なのだから。だが銃が使えなくなっただけだ」

ジンはコナンを睨み付けた。

その後、ジンの合図でナイフは片付けられた。

しかし、未だ白い床は赤く染まっていた。

コナンは痛みを堪えジンを睨み続けた。

そしてジンと二人つきりになったのを確認した後、コナンは窓に向かって全力で走った。

「チッ！あのガキ！」

ジンはサイレンサーをつけた銃を撃った。

一発目はコナンの横をすり抜けた。

そして、窓ガラスを割って外に出た瞬間、足に銃弾が貫通して、倒れた。

その騒ぎにFBIの数人が気付き幹部に連絡をとった。

その間に、ジンはコナンを捕まえ、お腹を殴り気絶させ部下が、FBIに向かって銃を放っている間に地下室へと走った。

地下にいく途中ある人の声が聞こえた。

「おい！何の騒ぎだ。最近お前は何をやっているんだ！」

後ろからの声は《あの方》だった。ジンは会うはずのないボスに驚きつつも質問に答えた。

「ある男に尋問していたんだ」

「ある男とは今抱えている子供か？」

ボスは睨み付けながらジんに問いかける。ジンは単独でコナンを拐い苦しめていたのだ。

その事を知らないボスはジンから子供も奪い立ち去ろうとした。

「お待ち下さい」

ジンは呼び止めたが無意味だった。

ボスは自室に戻り、コナンの怪我の治療をやり始めた。治療が終わっても未だ魔されているだけでコナンは目を覚ます気配はなかった。

一方ジンは地下に立ち尽くしていた。

そして目の色を変え誰も居ない地下で叫んだ。

「ボスさえ居なければ！もう少しだった！！」

ジンはボスを殺し、自分がボスになろうと心に誓った。

治療から六時間たちやつとコナンの意識が戻った。

起き上がるうとして足の激痛に襲われそのまま寝た状態で手錠が外され、手足、肩が治療されている事に気付いた。

（俺：助かったのか？）

そんな事をまだ回復しきれていない意識の中思っていると、男がコナンに話しかけた。

「悪いね。ジンが全てやらかしたんだろ？」

「え？ここはどこ。」

コナンの意識は一気に戻った。見知らぬ部屋、見知らぬソファーに寝かされてた自分に気が付いた。

「ここは、私の部屋」

男は戸惑っているコナンに教えた。

コナンは警戒した顔つきに一気変わった。殆んど力の入らない体を必死に男のほうに向き声を出した。

「だ、誰なんだ？」

警戒するコナンとは違い男はまんべんな笑みで答えた。

「私は宮野厚司だよ」

「宮野のつて…組織のボス…」

コナンの頭でキッドの言葉が繰り返しながれた。

「ああ、知ってたんだね。ジンは君になにをしてたのかね？」

「それはー」

コナンは今の三日間とジンの事、自分の事を粗方話した。そして、体力は限界となり意識を失った。

「少しの間、寝るといいよ。」

宮野博士はコナンに布団を掛け、自分も椅子に座って眠りについた。

第十九話 意外な助っ人！？（後書き）

ボスこと宮野厚司がコナンを助けてくれましたね！！

企みがあつて助けてた訳じゃありませんので！純粹に助けてくれました！

**第二十話　悪魔の囁き・負けぬ思いと決意の瞳（前書き）**

一回読んだ方へ

少し文が増えていきます。もし良ければもう一度読んで下さい。

## 第二十話　悪魔の囁き・負けぬ思いと決意の瞳

（三日目・午前八時）

服部がいらつきながら朝食を食べていた。

昨日の夕方からずっと不機嫌な服部に博士が心配そうに声をかける。  
「まだ、いらついているのか？ ジョディ先生も悪気があっていつておるわけじゃないんじゃない？ からもう少し気を休めたらどうじゃ？」

博士の心配を他所にブツブツいいながら食器をかたづけていると、睨み付ける灰原と目があった。

「服部くん？ 貴方子供みたいにグググいわないでとっとと出ていってくれる？」

灰原のいらつきもほぼ頂点にたっしており、つい憎まれ口をいってしまった。コナンなら流す事の出来る言葉だが服部は流せず怒鳴った。

「わかった。ささっと帰らせて貰いますわー！！」

「これ」

博士が止めようとしたところ灰原に止められてしまい服部はそのまま帰り支度をして阿笠邸を飛び出した。

（午前十時）

博士はさつきからずっと、うろうろしていた。

「哀君。服部君帰ってこんのじゃが？」

「大丈夫よ。きっと大阪に帰ったのよ」

灰原は博士と違い落ち着いた様子で返事を返した。それを聞いた博士は立ち止まり灰原を覗きこんだ。

「哀君さつきから何やってるんじゃない？」

灰原はずっと地図を見ていた。

「え？ ちよっとね。組織のアジト、ホントにここだけかなって思ってたね」

灰原は真剣に地図を見ていた。  
博士は少し心配そうに灰原を見た。

「十二時ジョディ先生達は」

無線から聞こえた情報に大慌てに働いていた。ジョディ先生も少し気が動転していた。余りにも突然過ぎる出来事だったからである。  
（やばいわ。クールキッドが撃たれるなんて。早く哀ちゃんに知らせないと！）

ジョディ先生はFBIの基地を飛び出し、車で博士の家に向かった。

「午後二時」

ジョディ先生が突然ドアを勢いよく開けた。「大変！アジトを発見したわ！！それと同時にクールキッドが撃たれたって情報が入ったわ」

ジョディ先生の言葉は灰原を混乱させた。そして床にズルズルと座りこんでしまった。今にも泣き出しそうな顔をしながら。

ジョディ先生が灰原の横にいき話しかけた。

「今から作戦会議があるの。貴方どうする？」

「い、今は一人にさせて…？それと、どこ撃たれたの？」

灰原は小さな声を精一杯出してジョディ先生から情報を教えて貰った。

「撃たれた場所は多分足。その後、お腹を殴って気絶させ工場に入ったらしいわ」

ジョディ先生は灰原にわかりやすく、教えた。

灰原は『そう』とだけいい下をむいたままだった。

「じゃあ、また作戦会議がまとまったら、教えるから。」

ジョディ先生はそれだけ言い残し博士の家を出ていった。

灰原は其のまま、腰が抜けたような感じで座りこんでいた。  
博士が玄関にいる灰原をソファアーに寝かせた。

「ねえ、博士。工藤君どうなっちゃうの？」

「ほれ、まだ足にしか、怪我してないらしいから大丈夫じゃよ！それに新一は生命力が人一倍あるやつじゃ！怪我してても、けろっとした顔で笑ってくれるじゃろう！」

灰原の声は掠れたような小さな声だった。そんな声とは反対に博士は明るい声でこたえた。灰原は博士の言葉に賭けた。『絶対帰ってくる！だって私にまだ光をみせてないから。』

蘭さんともハッピーエンドになってない。あの人は約束を守る人。だから私は信じる。』

灰原の目に光が戻った。そして、灰原は地下にいき薬の研究を始めた。

戻ってきたら、元気になったら飲ませるために。蘭さんの幸せ奪った恩返しに完成させる勢いで作り始めた。

データが手に入れば完成するくらいの勢いだった。そしてあつという間に三日目が過ぎていった。灰原は寝付けずにパソコンに没頭した。

## 第二十話　悪魔の囁き・負けぬ思いと決意の瞳（後書き）

遂に二十話いきました！！

哀ちゃん決意を深めましたね。負けそうになっても負けない気持ち。哀ちゃんの側にいる小さな光。その光が哀ちゃんを少しでも救ってくれてる。だから負けずに頑張る事ができる。

（コナンは哀ちゃんにとって太陽！そして哀ちゃんもコナンにとって太陽（　　）！）

光の主わかりますよね？

## 第二十一話　真実

〔四日目朝五時〕

コナンはようやく目を覚ました。

昨日と変わらずソファアの上で変わったと言えばコナンに布団が被せてあったくらいだった。そして、足の包帯が取り替えてあり、見渡すと彼がいた。

コナンはあれが夢じゃない事を確認した。

〔朝六時〕

宮野博士が起きコナンに近づいた。

「具合どうだ？少しは楽になっただろう？」

宮野博士と目が合い小刻みに震えるコナンがいた。

「大丈夫だ。まだ解放出来ないがね。組織の事が終わるまで君は此処にいてもらう。また閉じ込めるかもしれないし、縛るかもしれないがね」

最後の方の言葉をいった宮野博士は凄く申し訳無さそうにしていた。「いいよ…もう慣れたから。其より何で僕を助けてくれたの？」  
体力なんて、三日間何も口にしてないし怪我をした状況で殆んどない。一人で立つ事なんて今のコナンには相当困難な状況である。

呻きながらも座ろうとするコナンに、宮野博士は氣遣って体を其のまま寝かして答えた。

「偶然見つけてね。いつの間にか助けていた。あんな姿を見たら誰だって助けたいって思うよ。それに私は知らなかったんだジンが密かにこんな事してたなんて。君が本当に工藤君ならジンが最も聞き出したかった話しはシェリーの事。そしてジンが君をそこまでした理由は嫉妬。彼はシェリーが好きだった。いや、今も好きなのかもしれない。そう私の娘《志保》がね」

名前を聞いたときやつぱり親子かっと言う顔をコナンは出した。

そして、ジンの本当の理由を聞いて、驚いた。ジンはただ嫉妬のために自分をあんな目に合わされ怒りが込み上がって来たがコナンは柔らかに答えた。

「そう…だったんですか」

その声は怒りを押さえているようだった。宮野博士に怒鳴っても仕方ない。あれはジン独自の犯行だから、命の恩人に怒鳴りつける権利はないと思ったのだ。

「それで、志保は元気なのですか？一緒だったんでしょ？今まで。後、平和ですか？」

「はい、元気です。それに、平和です。友達もいます。安心して下さい」

「そうか元気ならそれでいい。ありがとう。」

コナンは満面の笑みで即答しそれに呼応するかのように宮野博士は柔らかな笑みを浮かべながらコナンに礼をした。

今まで辛い思いをさせた、あの娘に幸せを与えて下さいと心の中で願っているかのように。

そんなムードを壊すかの如く、黒き光沢のある物が静かに開いたドアから口をポツカリ開き宮野博士に向けられている事にコナンが気づき、無意識に体が先に動きそして叫びながら宮野博士を突飛ばし、コナンの脇腹から真っ赤な血が床へと流れた。

「ジン！何をしてる！」

「フツ。コイツを返してもらつ。重大な事を聞いてないからな。その前に…」

怒鳴りつけた宮野博士とは裏腹に笑みをみせジンは宮野博士に銃口を向けた。

しかし、ジンは急にふらついた。そこを宮野博士は逃さずジンを殴り気絶させた。

宮野博士は疑問に思いながらも、コナンに目線を写した。

「大丈夫か！？そんな体で無茶し過ぎだ。一方間違えたらあの世だぞ！」

「助けたかったから。灰原にとって、たった一人の肉親だから。アイツに会って欲しかったから。」

脇腹を押さえながら宮野博士に灰原に会って欲しいことを伝える。自分を犠牲にしてまで救おとしてくれたコナンに感謝の気持ちでいっぱいだった。

（なぜ、こんな子を此処まで！）

つと拳をきつく握り締めた。

「薬のデータは後で渡す。まず此処を離れよう。これから此処はFBIとの戦地となる。その前に離れよう。」

宮野博士はコナンの応急処置をやりながら提案した。

コナンが反抗をしようとした瞬間、コナンの口にハンカチおかれた。そして、次第に意識が朦朧とし始めた。薄れゆく意識のなか宮野博士の声が耳に届いた。

「君は無茶し過ぎだ。もう、体力も限界のはず。少しの間、寝ててくれないか？」

その言葉を聞き、コナンは抵抗せずに瞼を閉じていった。

次に目を覚ました時、薄暗い倉庫のようなところであつた。

手は、ロープで柱に固定されていた。（やっぱりこうなる訳か）

コナンはため息をつきながら周りを見渡した。そして、奥から宮野博士が現れた。

「目を覚ましたか。まず、ごめんよ。一応手首は、手錠で傷が結構あつたからロープで軽く固定しただけにしたよ。後、脇腹は大した傷じゃなかったよ。手当てはしたから大丈夫だよ」

宮野博士はコナンに深々と礼をした。

「良いですよ。逃げられる体じゃないし、怪我の治療有り難うございます」

コナンもまた首だけおろして礼をした。

少しの間沈黙が続いた。

其を破ったのは宮野博士だった。

「ジンがふらついた理由は何か知ってるのか？」

コナンの方を真剣に見つめた。

「それは、此です。」

と、見せたのは時計型麻醉銃だった。とつさに足に撃ち付けたのである。

「この時計から麻醉針が出る仕掛けになっているんです。」

宮野博士はとても興味深そうに話を聴いていた。そしてコナンは探偵の目付きに変わった。それに気付き少し顔を下ろした。

「今度は僕から少し聞いていいですか？」

コナンは宮野博士の目をしっかりと見つめていた。宮野博士も『なんだい』と言う視線をコナンに向けた。

「この組織どうして作ったのですか？」

まずは此れからつと言わんばかりの顔を宮野博士に向けた。少し沈黙がつづき宮野博士は観念したかのように話し始めた。「組織は昔こんなにも大きく無かった。昔はこの小さな倉庫でやっていた。人数は二人。私と阿笠<sup>ひるし</sup>博士という人物」

コナンは驚いた。阿笠博士がこの事件に深く関わっていた事が余りにも悲しかった。コナンの顔が変わった事に気付き知り合いになったと宮野博士は思いながら話しを続けた。

「阿笠と二人でやっていた研究に他の博士も加わって、すこしずつ大きくなった。それに反対して研究を阿笠は放棄した。阿笠が居なくなつた後も研究は続いた。私の妻エレナを助ける為。志保が産まれて間もなく不治の病に襲われた……」

ここで一旦口を塞いだ。まるでコナンの頭の整理を待つて居るかのように。

そして整理がついたとわかり話し始めた。

「エレナを救う薬、それがこの組織への始まりだった。作っていく間に組織が膨らみ世界最悪の組織になっていった。それは私の暴走から始まった。エレナが亡くなつてしまったのだ。もう少し

で出来上がる筈の薬を前にして：その後、私も殆んどおぼえてないんだ。明美があんな事になる数日前まで私は暴走していたのだから。そして、正気に戻ったころには何もかもが黒に染まっていた。それに志保には予め両親は死んだと伝えてあるから父がボスだとは知らない。あの頃の僕は腐りきっていた。」

宮野博士の頬に一筋の涙が流れた。その様子を見ながらコナンは『明美』という人に思い詰めた顔で苦苦しい過去を思い出し次の質問をした。

「十億円強奪事件：あの時どうして、宮野明美さんを殺したのですか？」

コナンにとって忘れられない第二の事件。目の前で死を見届けた悲しい出来事。その為に灰原は泣いた。そのボスが自分の父だと灰原に伝えたらどんな顔をするのか考えながらコナンは強い眼差しを宮野博士に向けた。

「あれがジンの暴走の始まりだった。あの時私は『連れて帰れ』と命令を下した。しかし：しかしジンはその命令に背き明美を射殺した。理由を聞くと『抵抗したあげく揉み合って殺してしまった』と聞いた。」

宮野博士は辛そうな顔をしたままコナンだけを見つめ語った。

コナンは驚いた顔つきに変わっていた。真実の扉が今少しずつ開いていくのを感じた。

「しかし、どうしてジンの嘘が分かったのですか？」

宮野博士はコナンが何質問するのか、分かっていたような口振りで話した。

「ウオツカだよ。『ジンの兄貴達は揉み合っていないかった』とコッソリ教えてくれたんだ。その言葉でわかった。私からの命令を無視した拳げ句、殺したのだと」

「そう：だったのですか」

コナンは真実をうち明かされ言葉を失った。そして、もっと早くにあの場に居合わせていたら明美さんは救えたのだと歯切りをした。

「君は悪くないんだよ？どうか自分を攻めないでくれ」

コナンの見せた行動に宮野博士が気付き弁解をした。それでもコナンはまだ下を向いたまま何も喋らない。

何かをずっと考えているようだった。

その時、倉庫の扉が開いた。

「え！？」

二人は驚いた様子で扉を見た。

## 第二十二話　敵と味方

扉の向こうに怪盗キッドが立っていた。

「こんにちは。お取り込み中失礼しますよ？」

軽やかな言葉でキッドが話しかけてきて二人は驚いた。

「怪盗キッド!？」

コナンの声は倉庫中に響いた。

キッドはニヤッと笑い静かに告げた。

「助けにきたつと言いたいところですけど、まだ取り込み中なのでアジトに行つて、あるデータを回収して来ます。今、行かないと危ないです。では…」

「待て、キッド!」

コナンの声が届いていたか分からぬほど、ただ其だけ言つて怪盗キッドは立ち去った。

静まりかえった倉庫で二人は同じ事を思っていた。

あるデータそれはアポトキシン4869だと。

その後、コナンは意味深き笑いを見せた。

～四日目・朝～

灰原が時計を見ると、朝の六時を指していた。

（やつぱり眠れ無かつたみたいね）

灰原は苦笑しながらもパソコンに集中した。数分たった頃、ドアからノック音が聞こえ後ろを振り向くと博士がコーヒーを持って立っていた。

「すまん哀君。息抜きにコーヒーを持ってきたんじゃないが？」

「ありがとう博士。」灰原は嬉しかった。博士だつて参っているのに私の事まで気にかけてくれる事がとても嬉しく元気が出た。もうあの日から四日も経つのにアジトがわかつただけ。作戦の情報

が入って来ないから不安になる。早く終わってほしくてたまらない  
思いだった。灰原はパソコンを切ってコーヒーに手を伸ばしそのま  
まカップを口元へと運んだ。

「美味しい」

灰原が呟いたと思うと博士が元氣よく無邪氣に教えた。

「此れ、新発売のコーヒーマンじゃよ！甘さ控えめ大人味と書いて  
あったんじゃよ！」

「そう。工藤君にも飲ませてあげたいわ。彼、コーヒーマン好きだしね」  
灰原はフフッと笑いコーヒーマンに目をやった。

「そうじゃな！次は三人で飲もう！コーヒーマンは哀君がつくるんじゃ  
ぞ！新一君、君が作ったコーヒーマンは文句一つ言わずに飲むんじゃか  
ら」

「分かってるわ」

灰原は微笑みながらコーヒーマンを全て飲んだ。空になったカップをみ  
て、少し哀しげな顔になった。

「ホレ、哀君地下ばかり居ないで今日は少し散歩してくるといい！」

「ええ、そうするわ」

博士の氣遣いを見事にしたくない為、今日は少し体を動かしてみる  
ことにした。朝ご飯を片付け支度をして外に出た。今日は少し雲行  
きが怪しかった。

「今日は晴れて天気予報は言ってたのに。」

少し歩くと後ろから声がした。

「あら？哀ちゃん散歩？」

「え？ ええ……」

灰原は驚いて振り向いた。まさかこんな所で蘭に会うとは想像もし  
て無かったからだ。心臓がバクバク動いた。今一番会いたくない人  
に会ってしまった！然り氣無く後退りをした。

「コナン君一緒じゃないの？」

ハッとして少し考え少々怒られるかもしれない理由を蘭に返した。  
「彼朝っぱらから事件に首突っ込んで今は博士の家にいないのよ」

無心な顔をしながらでも目は確り蘭に向いていた。嘘だけど本当に近い理由を伝えた。

「そう。またあの子危ない事に首っ込んでいるのね！」

蘭の頭から湯気が立ち込めた。

後で叱っておかなきゃね！と付け加えバイバイと立ち去ろうとしたとき灰原に呼び止められた。

「待って！おねえちゃん…江戸川君を叱らないでお願い！私が悪いの全て私が…だから叱らないで！」

灰原は蘭に深々とお辞儀をした。蘭は何がなんだかわからない状態で返事を返した。

「あ、哀ちゃん？分かったわ。頭上げて。ね？」

優しい言葉に灰原は思わず涙が出そうになったのを堪え顔をあげた。そして

「ありがとう」

と呟いた。

二人は別れ家に帰ろうとしたときジョディ先生に止められた。

「哀ちゃん！今から私の車に乗って！？」

「え！？」

「いいから！」

引きずり込む形で車に乗せられた。どうしてこんなに急いでいるのか、コナンに何か合ったのかと心配になって聞いてみた。

「先生？江戸川君に何かあったの？」

「何もないわ。ただ、手、腕、足に怪我をしてるくらいよ」

不適な笑みをみせながら話した。灰原は驚きの余り言葉を失った。

そしてこの人はジョディ先生ではなくベルモットだと確信した。

確信して震え上がる体を一生懸命に押さえた。

「大丈夫よ。貴方を殺さないわ。約束したもの」

その言葉に疑問を感じたが震えは止まっていた。

「ね、ねえ本当にその情報正しいの？江戸川君が怪我してるって」

「フフフ。それは行って自分の目で確かめて来なさい」

と、ジョーディ先生の顔からベルモットに戻して、また不適な笑みを見せた。車はほとんど、鳥矢町方面へと進んで行った。そして灰原の覚えがある倉庫前に止まった。

（ここって、前に写真をみつけた倉庫）

灰原は少し戸惑った。本当にこのまま従っていいのかわかると、しかしここまで来て引き返す分けにも行かず其のまま車からおりた。

「ホラ入るわよ？」

「……」

目の前にある倉庫まで来て、本当に帰りたと思った。しかし扉は開いてしまった。

「一方同時刻阿笠邸」

「え？ 哀ちゃんいないの？」

ジョーディ先生が訪ねた。アジトに乗り込む作成が出来たから伝えようと阿笠邸に来ていたのだ。

「そうなんじゃ。八時に家を出たつきりもう四時間。どこ行ってしまったんじやろう。わしがいけなかったんじゃ。お願いじゃ二人を助けてくれ！！」

心配になり、もうジツとしておけない博士はジョーディ先生に助けを求めた。

「分かったわ。我々がアジトに直ぐ行つて二人を取り返すわ。多分哀ちゃんも捕まったと見て間違いないようだしね」

博士は目に涙を浮かべお願いしますとお礼をした。

「一方倉庫の前」

ガラガラガラ：

扉を開け二人の前に二人の影が飛び込んだ。

「え！？」

二人の影の声は見事に揃った。二回目の訪問で二人は啞然とした。ベルモットを省いた三人が目丸くして驚いた顔をした。

「べ、ベルモット!？」

宮野博士が顔を歪めて叫び気味の声を出した。その後ろでコナンも目を丸くして声を出した。

「は、灰原？　なんでお前がここに？」

「私が連れてきたのよ」

ベルモットがコナンの疑問に答えた。四人の周りに嫌な空気が漂った。外では小雨の雨が降り始めた。

「ベルモット!　どうしてお前がここに、いるんだ？」

宮野博士が我にかえり質問をした。

「あら、ボスがボウヤを奪ったってジンから報告あつてね。」

「殺すつもりか？」

コナンが話しの途中を割って入ってきた。

「いえ、ジンからは殺せと命じられたけど殺しはしないわ」

三人の話しに入らず立ち尽くして居た灰原がやっと会話に入った。ただ目はずっとコナンの方に向き哀しげに見つめていた。

「どうして、私達を助けるの？」

「敵でもあり味方でもある。私はただ誰かからの命令に背きたかっただけ。だからジンの命令を無視しただけ」

皆が哑然となるなか一人ベルモットが笑っていた。

「それで、貴方達は何してたのかしら？」

ベルモットは薄笑いをしながら問いかけた。その答えをコナンが答えようとした時、宮野博士が先に答えた。

「何も、ただ向こうから逃げただけだよ。閉じ込めて縛るほうが尋問しやすいからね」

「何言ってるんですか？　閉じ込めて縛る？　違うじゃねえか!　逃げるくらいの緩さで扉も鍵閉めてねえじゃねえか!　何:　嘘ついてるんですか:　素直になつて下さい。目の前に居るのは娘なんですよ?」  
コナンが怒鳴った。悪人ぶってる宮野博士に絶えきれず。その後、咳き込み灰原は張り上げた声を出しコナンのところまで走った。その顔は今にも張り裂けそうな顔をしていた。突拍子に告げられた聞

き間違えでもない、さつき彼は『娘』と呼んだ。その時この人が誰なのか確信した。

「お父さん？」

「ああ、そつだよ……」

「来れて良かったでしょう？ 父親に合わせてあげたのだから。」

ベルモットがコナンを抱き上げ告げた。

「彼を何処に連れて行くの？ また……」

「フフ。違つわよ病院よ！ 貴方たちも早く車に乗りなさい。」

「待てよ」

とても低い声の主が現れた。周りには五、六人の部下が居た。

「お前まで裏切るとわな。ベルモット！」

ベルモットに銃をむけ薄気味悪い笑いで睨んだ。ベルモットはコナンを下ろし少し離れた所に置いた。その横に灰原もいた。

「フン。ガキを護るとはな。この組織も温くなつたもんだ」

語尾を言い終わつた瞬間ベルモットに向かって銃を撃つた。

それを軽く避けジンに向かってベルモットが撃つた。二人が苦戦する中、部下の一人がコナンに向かって銃を放つた。それに気付いた灰原がコナンを庇い腕に当たつた。

「灰原？ 大丈夫か？」

「何、人の心配してるのよ。自分の心配してなさい」

右腕を抑えコナンを睨んだ。コナンは反抗出来ず不機嫌な顔をした。「ちよつと腕貸してごらん？」

突然声が聴こえ振り返つたら宮野博士がいた。灰原は正直戸惑つていた。

「灰原？ 大丈夫だよ。」

コナンの言葉を聞き信じて腕を出した。

「大丈夫だ。かすり傷」

と、言いながらハンカチを腕に巻いた。

先ほど撃つてきた人は宮野博士に両足を撃たれ立てないようにしていた。

「フツ 雑魚どもが！」

ジンが一瞬目を放した瞬間足に激痛が走りバランスを崩した。

「此処までかしら？ ジン……」

額に向かって銃がジンを捕らえた。

ジンに気をとられていた。その時コナンの叫びが聞こえた。

「伏せるー！ー！！」

その合図でベルモットは伏せた。しかし弾はベルモットの肩をかすった。

「チー！ウオツカ？それにキャンティ、コルン！」

ベルモットの先には三人が立っていた。

「兄貴！大丈夫ですかい？」

「何でもない！下がってる」

「あのガキ……！」

キャンティはコナンに向かって銃を撃とうとした瞬間灰原がコナンを突飛ばした。しかし弾はコナンの肩に命中した。

「ウツ」

肩の血がドクドクと地面に流れた。灰原は絶句した。もし突飛ばしさえしなければと思った。

「は、灰原。大丈夫だから……自分を、攻めんなよ。予測出来なかったのは俺なんだからな。」

今にも泣きそうな灰原にコナンは必死で語りかけた。

「キャハハハ。護るつもりで逆にボウヤが撃たれてる。どう？私上手いでしょ？キャハッハッハッ」

大笑いするキャンティを灰原は睨み付けた。何も出来ない自分に腹立たしい気持ちになった。

キャンティは未だ笑っていた。しかしキャンティの肩に弾が、かすった。

## 第二十二話 敵と味方（後書き）

遅れてすみません。

読んで下さってありがとうございます。考えて迷った結果こんな風になりました（ ）

アポトキシンをどうやって手に入れるか迷ったのですがキッドなら取りに行けそうだったので登場しました。少し無理矢理でしたでしょうか。もし無理矢理だったら謝ります。ごめんなさい。

## 第二十三話　残酷な言葉

「其処までよ」

キャンティの肩を撃ったのはジヨデイ先生だった。

他のFBIが周りを囲んだ。

「もう袋のネズミよ！銃を捨てなさい！」

ジヨデイ先生の声は倉庫中に響き渡った。

その間にコナンと灰原そしてボスである宮野博士を車に誘導させた。その時だった。ジンから最悪な言葉をコナンにぶつけた。

「これで終わると思うなよ！！お前は後、三年の命だ。あの薬で前の体はどんどん蝕んでいく。三年苦しみながら生きていくんだな」  
「なっ！？」

コナンもだが灰原を初め全員が驚きの声を上げた。何がなんだか解らない皆がコナンに向く。

「俺一昨日コイツらに薬を投与されたんだ」

「え！？」

灰原が驚いた顔でコナンをみてその後ジンを睨み付けた。

「お前が悪いんだ。組織を裏切ったからな！」

「だったら私を苦しめたらいいじゃない！どうして工藤くんなの？」  
鋭い目付きでジンを見つめて隣に居るFBIの手から拳銃を奪って狙いを定めた。

「止めるー！ー！」

そう叫んだ後、咳と共に大量の血を吐いた。苦しむコナンに高笑いをするジン。灰原の思考はぐちゃぐちゃにされた。そして灰原がコナンを抱き締め優しく声をかけた。

「工藤くん。ごめんなさい。お願い、もういいから安心していいから。もう、殺さないから。だから死なないでお願い。」灰原の瞳から数滴流れる涙。それに対して大丈夫だっと思をかけるコナン。しかし、状態からみても分かるように意識が有るだけでも奇跡だった。

肩からも大量に流れる血。しかし、コナンはニツと笑って灰原にそつと囁いた。

「お前がわるいんじゃないよ。組織を抜けて良かったんだ。絶対自分を責めるな約束だ。俺も『光』の話し絶対守るから。」余りにも優しい顔をして語るから灰原から流れていた涙の顔が優しい顔にかわっていた。

「ええ。」

灰原もコナンに囁いた。安心したコナンはそつと目を閉じた。其を見届けた後、車で病院へ向かった。

「さあ！此で撃つ標的が居なくなつたわ。貴方達も終わりよ。」

ジンはフツと笑い、持っていた拳銃をジョーディ先生に向けて発砲した。その弾はジョーディ先生の頬をかすめた。それが合図になつたかのように銃撃戦がはじまつた。

その隙にジンは工場へと向かった。その工場はFBIと戦つた後の無惨な姿をしていた。

怪我してる足を引き摺りながらも研究室へと向かいフロッピーを調べた。

しかし、薬に関するフロッピーはごっそり抜けていたのである。

「ボスか！？」

盗んだ犯人がボスだと決めつけ舌打ちをしたジンは研究室から出て行き走って階段を上りきつた。息を切らし視線を前に向けるとジョーディ先生と鉢合わせになつた。

振り切るため銃を放つたが、FBIが続々と現れた。

「さあ、観念しなさい」

FBIがジんに近づき一斉に飛び付き身動きを取れないように手に手錠をかけた。工場に居た組織の仲間やジンやキャンティ達は傷いたものの軽傷で逮捕された。

ただ生死をさまよう男の子を一人除いて…

「車の中」

「志保。お前まで小さくなってたんだな。」

ずっとコナンの横で手を握って願っていた灰原が顔だけ宮野博士の方を向いた。

「それに、いい仲間が出来たそうじゃないか。この子から聞いたよ。」

そしてまた灰原がコナンの方を向くいた。

「ええ。たくさん、出来たわ。でも、どうして？どうして工藤君がこんな目に会わなきゃいけないの？私が産まれてこなければ工藤君はずっと高校生だった。」

コナンを握る灰原の手に力が入る。

自分が受けた傷は此だけ。なのにコナンが受けた無数の痛々しい傷その上、余命三年と言われた最悪な言葉。止まっていた涙がコナンの手に落ちる。

「志保が悪いんじゃない。この、組織を作った父だよ。」

真剣な顔で灰原と向かいあった。灰原は涙を拭き取り謎めいた笑いととも答えた。

「知ってたわ。お母さんが言ってた」

その言葉にきよとした宮野博士をみて灰原がクスッと笑い続きを話した。

「前に工藤君がお姉ちゃん部屋の部屋で見つけてくれたの。お母さんから私へのバースデーテープをその十八歳の時に、お母さんにもう日が無いことお父さんが必死に薬を作った事がテープに入ってたわ」「そうだったのか。それと、薬のデータは手に入ったと思う。また『白き人』が渡しにくると思うよ。絶対この子を助けてあげるんだよ？二つの解毒剤を作らなくちゃいけないけど、頑張るんだよ。すまないね……」

灰原は深く頷いた。白き人が誰なのかも、もう分かっていた。その後、沈黙が続く無線から

「ジン確保死亡無し」

つと告げられた。二人はホツとして鳥矢病院へと向かった。

（博士の家）

博士の家の電話がなった。ずっと電話の前に居た博士は息を飲み慎重に受話器をもった。

「もしもし！博士？」

「哀君無事じゃったんじゃな」

博士の顔から嬉し涙が溢れ受話器の向こうまですすり泣きが聞こえた。

「ええ。私は大丈夫。今から鳥矢病院にきて？」

博士の嬉し涙がピタリと止まり不安な気持ちになり恐る恐る聞いてみた。

「ど、どうしたんじゃ？」

「工藤君が重傷なの。脇腹と肩が結構ダメージあるのよ。今はFBIの車の中からかけてる。いいから早めに来て」

「わ、分かった」

焦りながらも支度をてきぱき済ませて家を飛び出した。

（病院）

重傷者と聞いていたので担架などの準備は整っていた。そのまま、『手術中』のランプが付いた。

## 第二十三話　残酷な言葉　（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

鳥矢病院は勝手につくりましたm（――）m

今回はジンから告げられた最も不幸な言葉。

なんか面白くない戦い方ですみません（＜――＞）。

ジンを殺してしまったら、目覚めたコナンがショックをうけると思うので、捕まえました。自殺させるかでまよいましたが捕まえる方にきめました。

次は病院でほぼ灰原と博士が中心かな。後少し、したらキッドが病院にきます。もう少し先になると服部とスコッチも病院を訪れます。

第二十四話　目覚めぬコナン・星（あね）に願いを　神に願いを

手術室前では灰原だけがいた。

宮野博士はFBIと共に警察へと連れていかれた。連れて行かれる前に宮野博士は灰原に何度も何度も謝罪した。組織の事を始め親で有るのに見捨てたことお姉ちゃんのことなど車の中できかされた。

（バカ…）

思ってもいない父親の言葉に少し後悔した。車の中では殆んど話しをし無かった。今に思うと遣りきれない思いだった。

コナンが運ばれてから三十分後、息を切らして無我夢中な博士がやってきた。

「ハアハア、あ、哀君！大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫。」

「そうか」

博士は少し嬉しそうな顔を見せたが『手術中』のランプをみて深刻な顔をした。

「新一君は？」

博士の言葉を聞いて灰原は下を向いて拳に力をいれて教えた。

「あれだけの傷があつて生きてるだけでも凄いつて。怪我の方は出血が多く五分五分。後ショック状況に陥っていたら目が覚めるまで時間がかかるみたい」

博士は何も言えず佇んでいた。

（一時間半後）

赤いランプが消え医者と共に酸素マスクをつけたコナンが出てきた。灰原と博士は直ぐにコナンの側に行き医者に無事かを聞いた。

「手術は成功しました。今は麻酔が効いていますので、もう暫くは目を覚ましません。」

灰原は安心したような不安なような顔を見せた。

「大丈夫ですよ。今日中に目が覚めれば命に別状有りません。しかし、一週間経つても覚めなければ一ヶ月・二ヶ月は覚めない恐れがあります。まあ、彼なら大丈夫でしょう。」

「分かりました」

灰原は一言だけいいただ黙って医者達とコナンの病室へと案内された。

病室に移され医者が出ていった後電子音の音だけがリズムを一定にして動いていた。身体中に包帯が巻かれた状態をみて灰原は悔やんだ。

（私が受けるはずだった死への道。でも彼が今その道をたどっている。私自身が傷つくより私の側に居る彼を狙ったほうがジンにとって楽しい事。わかってたのにそんな事。：お願いお姉ちゃん彼を守って：お願い神様、彼を解放してあげて下さい。この黒ずんだ世界から解放してあげて下さい）

灰原は星に願った。空に居るであろう姉にお願いをした。

「ほれ、哀君寝ないと明日から彼に集中できんぞ？昨日から寝てないんじゃない？」

博士は心配そうに彼女をみた。ずっと追い詰めた顔をする彼女にどうしても言いたいことがあった。

「哀君？君が参ってしまつたら何にもならんぞ？ほれ、新一はちゃんと生きてる！悔やんでないで前に進むんじゃない。そんな顔のまま、新一に見せたら彼おこるぞ。」

博士の言葉に同意するかのように灰原はソファーに座り目を瞑った。

（次の日）

朝灰原が目をさましてもコナンは未だ寝たままだった。

朝の診察で主治医である井上先生からの今の状況が説明された。

「麻酔はもう切れてますから、後はこの子次第ですね。異状有りません」

「分かりました」

診察が終わり博士は一旦家に帰った。静かになった病室で灰原はコナンの手を確り握りしめ話しかけた。

「ね？工藤君。この前蘭さんにあつたの。とても、怒ってたわよ？でも、私お願いしたから『怒らないで』ってだから、蘭さん怒ったりしないから、目を開けて？私達には貴方が必要なの。生きて帰ってきて！天国行く前にお姉ちゃんが引き留めて此方だよって誘導してくれるはずよ。だって私昨日願ったものお姉ちゃんに……だから、きつと帰ってくるよね？ただ休憩してるだけだよね？」

その時、握られていたコナンの手が少しだけ動いた気がした。しかし、目を覚ます事は無かった。

（もしかして、私の声届いてるの？必死に戦ってるの？）

心の中で灰原はコナンに語りかけた。

だが、反応は無かった。

博士が病室から居なくなつて約一時間経つたころ窓の方から風がにわかに吹いてきた。

「居るんでしょ？怪盗キッドさん？」

灰原は不適な笑いを見せ窓の方に向いた。

「気付いてましたか。探偵君の具合はいかがかな？」

キッドは躊躇いもなく姿を現した。

「重傷：さあ用件話してくれる？」

「見るからに痛々しい傷ですね。」

「その事は今はいいから用件なに？」

「用件でしたね。此ですよ」

キッドが拳を握ってマジック風に取り出した。キッドの手のひらからボンッと、煙が上がりその中にフロツピーが四枚程置いてあつた。「早い方が宜しいかと思ひまして。これが薬に関係ある全てのフロツピーです」

「あら、優しいのね」

灰原は渡されたフロツピーを受けとった。

「協力するといいましたから。それに、キッドである私の目的も終わりました。」

「目的？」

「それに対しては教える事はできません。企業秘密です。ではお嬢さん幸運祈ってますよ。」

キッドは窓から飛び去っていった。

灰原は少し睨んだ目付きでキッドが見えなくなるまで見つめた。

第二十四話、目覚めぬコナン・星（あね）に願いを 神に願いを（後書き）

遅くなってすみません。次の進行は27日以降になります。

コナンの生死はどうなるのでしょうか…

灰原の願いちゃんとコナンに届いてるのでしょうか？

そして、遂にキッドが良いものをもってきてくれました。流石○  
^-^）○！

これで灰原にデータが入ったので後は灰原次第！

次は服部が来ます！

後書きまで読んで下りありがとうございました。

## 第二十五話　目覚め

キッドが立ち去ってから数時間後、博士と共に服部が入ってきた。もう空は茜色に染まっていた。

「工藤!？」

慌てた雰囲気では服部はコナンに近づいた。

「無駄よ。まだ目を覚ます気配ないわ。分かったでしょ？組織が絡むと危険なこと。」

「おう。だからもし次、狙われたりしたら俺がコイツを守ったる！」  
服部の目は来た時とは比べ物にならないくらい力強い目が変わっていた。

その目付きを灰原は確かめ笑みをみせた。

「その顔なら大丈夫そうね。まあ、組織の幹部はほぼ警察だから、残党がもし、工藤君を狙ってたら宜しく頼むわよ？」

「ああ任しとき。命掛けて守ったるわ！ついでにちっこい姉ちゃんも守ったるか？」

服部はニコニコした顔で灰原を眺めた。

「結構よ。私もう守られてるから。」

穏やかな笑いを見せ付けられ服部はガクンと肩を落とした。

「二人共家にかえるぞ。もう新一、一人にしても大丈夫じゃろ。また明日来たらいいんじゃないな」

「ええ、そうするわ。着替えもいるしね」

「おう。まだ居たかったけど、まあええわ」

「コナンが病院に来てから五日目の朝」

未だ目を覚ます気配は一向に無かった。

「ど、どうするんじゃない？また目覚めんのに危険じゃ。早く新一目を

覚ましてくれ！」

博士に焦りの表情が見え始めた。何度も何度も服部が大丈夫だと言  
い聞かせた。

（お願い工藤君。目を覚まして…）

灰原はコナンの手を握りしめ祈った。

握りしめられたコナンの手が灰原の手を握り返した。

「え？」

「どうしたんや？そないびつくりした顔して？」

驚いた顔の灰原に服部が不思議そうに声をかけた。

「く、工藤君が私の手を握り返したわ…」

「う…」

灰原が驚いた直後コナンの声が耳に届いた。

「工藤君？ 工藤君！」

「灰…原？ 痛っ…」

呆然とした顔を灰原に見せた

「服部くん！先生呼んできて！」

「おう！」

服部は部屋を飛び出し走っていった。

「新一。良かった。」

博士は涙を流しコナンをみた。コナンは少し睨んだ素振りを見せつ  
つ、灰原に気になる事を問いかけた。

「なあ灰原？あいつら…どうなったんだ…？」

最後の方は少し息切れしながらも灰原をじつと見た。

「幹部は大体警察に連行されたわ。ジンもね…ごめんなさい。辛い  
目に合わせて本当にごめんなさい。」

灰原の目は涙で潤んでいた。涙を流すまいと必死になりながら謝っ

た。

「いいよ。自分責めるなって言っただろ」

次の灰原の言葉を遮るように服部が入ってきた。

「先生連れてきたで！」

服部の後ろで息を切らしている先生が目に入った。服部に走らされたのだと三人は思った。

息を整えた先生がコナンの容態を説明した。

「うん。もう異状有りません。後は怪我を直すだけです。それと、リハビリかな。」

「有り難う御座います」

コナンが挨拶すると、笑顔で病室から出ていった。

「毛利家」

「一週間以上どこいつてるのよ。電話もメールも来ない。コナン君になにかあったのかな…」

蘭は心配になり博士の家に電話をかけた。しかし、一向に出る様子は無かった。

「一体どこ行つたのよ」

少し震えた声で電話の前で立ち尽くした。そのままの姿勢で数分か動けずにいた。

ホケットに入っていた携帯が鳴つたのに気づき我にかつた。

（メール？）

少し驚いた顔で液晶画面をみた。

「コナン君からだ！！」

思わず大きな声を張り上げ、メールを睨むかのようにコナンからの

メッセージを見た。

『今まで電話もメールも出来なくてごめんね。山の奥に自然観察に行つてて圏外になつてたの。後、数カ月帰つて来ないけど、心配しないでね。絶対帰ってくるから！　コナン』

こんなメールに少し呆れいたがホツとした様子でコナンを信じ『分かりました』と返信した。

〈コナンの病室〉

「来たわよ返事。『分かりました』だつて。」

「サンキュー灰原」

蘭に送つたメールはコナンが考え、灰原が打つて送信した。蘭にこれ以上心配かけたくない、つと言うコナンの要望を仕方なく許可をだし蘭に嘘のメールを送つた。大袈裟に数カ月と書いたのは、怪我の事も有るが残党が居るかもしれないと言う灰原の助言で、渋々書いたもの。コナンにしては早く戻りたい気持ちで一杯だつた。

「そう言えば、意識が無くなってから、誰かの声が聞こえたんだ。微かだつたけど」

コナンの言葉に驚いた灰原は目が丸くなつていた。それに気付いたコナンが苦笑しながら続きを話した。

「そこまで驚かなくてもいいだろ？　それに真つ暗な世界に光が見えた。その光と共に誰かの願いが聞こえたんだ。その光に手を伸ばした。それ以上の事は覚えてねえけど、今思えばあの声お前だったのかも知れねえな。」

灰原は五日前コナンに話しかけたとき指が少し動いていた事を思い出した。

「なるほど……」

コナンに聞こえるか聞こえないかの声で納得した。

「で、俺これからどうなるんだよ？」

突然の声に下を向いてた灰原が一気に顔を上げた。

「ごめんなさい。まだ待って。三年以内に薬は完成させるわ。解毒剤はもうすぐ完成する。」

「焦らなくて、いいからな。でも薬のデータは？」

「悔しいけど怪盗キッドが盗ってきてくれた」

灰原の手には四枚のフロッピーが置いてあった。

「ハハハ、キッドの奴…本当に盗むとは。借り作っちゃったぜ」

少しションボリしたコナンをみてクスリと笑った。

「じゃあ、灰原頼むぜ？」

「ええ。」

二人の会話が終わり灰原は博士を呼んで病室を後にした。ポケットの中に確りとフロッピーが有ることを確認しながら博士の車で博士の家に向かった。

## 第二十五話く目覚めく（後書き）

見てくれた方ありがとうございます。

長い間またせてすみません（<―>）

約束通り今日から進行します

休んでた理由は前期テストがあつたからです。しかし今日終わりましたので頑張つて進行していきますo（^-^）o

これからもよろしく願います。

## 第二十六話　未だ捕まっていない者

（次の日・朝）

診察が終わりベッドに移ったコナン。

少し、考え事をしていると、ノックの音がし、コナンが返事をする  
と、にぎやかにジヨディ先生とジェイムズが入ってきた。

「良かったわね。コナン君無事で。」

「ホントに。話を聞いて驚いたよ。私はアジトにいつてなかった  
からね。それで大丈夫かね？」

ジヨディ先生とジェイムズが口々に話してきた。

「はい。大丈夫です。まだ痛みは少々ありますが、こんな怪我すぐ  
に治りますよ。」

「そっか。ゆつくりでいいのよ。」

「ありがとうございます。」

コナンが丁寧に返事を返したあと、灰原達が入ってきた。灰原はジ  
ヨディ先生に一礼をして、コナンの横に椅子を置き腰かけた。

「哀ちゃんは大丈夫？」

「ええ。大丈夫です。心配かけてすみません。」

「それはいいのよ。二人とも無事だったんだから。じゃあ本題に入  
るわね。もしよかったらクールキッドが捕まった日から、話してく  
れる？」

「はい。あの日、キッドの予告していた日で、キッドと会った後、  
急いで博士の家に帰ろうと思っていたんですが、灰原に途中で会っ  
たんです。」

ジヨディ先生を見ていたコナンは灰原の方へと向き直した。

「え！？まさか私や貴方を襲った人と同じ？」

「ああ。アイツに『博士が誘拐された』と言われたんだ。それに  
俺はまんまと騙され、人気のない場所へ連れて行かれた。その時、  
灰原じゃない事を突き止めた。でも遅かったんだ、背後に居た仲間

に殴り倒されたんだ。そして、意識が失う前に探偵バッチのスイッチをいれた。気絶した後、俺はアジトへとつれていかれ監禁されたんだ。」

「どうして、疑おうとしなかったの？一回襲われたのに、どうして？」

ジョディ先生が驚いた顔をしながら問いかけた。灰原に向いた顔をジョディ先生に向け、少し暗い表情で目を下にそらした。

「疑え無かったんだ。灰原の焦りを見てたら、本人だと思ったんだ。アイツのコードネーム・スコッチだよ」

下を向けていた目をジョディ先生たちに向けた。

「そんな人捕まった人の中に居なかったぞ？」

ジエイムズが少し考えてた後に静かに伝えた。

「え？」

「何！？ほんとか！？」

ジョディ先生を省く皆が驚いた。驚きの声と共にコナンの激しい咳と呼吸困難に襲われた。

「工藤君！確りして！？」

「ご、ごめんな…灰原…俺がアイツを…」

激しくなる咳と一緒に血を吐きコナンの意識が限界へと近づく。他の皆はなにがおきているのか、想像がつかなかった。

「ちよつと！謝らなくていいから、お願いだから静かにしてて。」

灰原の怒鳴り声が廊下まで聞こえ、あわてて先生が入ってきた。

数分続く咳。先生はなすすべなく見守った。その後はコナンの荒い息が病室に響いた。

落ち着きを取り戻したコナンだが、起き上がる事さえ出来ずにいた。「おい！こいつに何が起きてんねん？」

先生が出ていった後に服部が怒鳴り散らした。

「オ、オレさ…アイツらに捕まった後…質問攻めにされたんだ。その後に何かを注射された…」

まだ息切れも治っていない状況で服部がぶつけた質問に必死で答えよ

うとした。

「もういいわよ！江戸川君。薬の説明は私がするから！貴方は黙ってて。でなきゃ、三年以内に死ぬわよ。」

その言葉に服部、博士、ジエイムズが驚く。それぞれが驚いた顔を灰原は確かめた後、話し出した。

「彼の体、もって三年なの。ジン達を作った薬が原因。その間に体が蝕まれていく。それが今の症状。三年間苦しみなから死ねっというジンからのメッセージなのよ。」

「じゃが、解毒剤はつくれるんじゃない？」

「ええ、でもアポトキシン以上に難しいし、薬作って効くかも分からない。でも私は貴方を見す殺すことは出来ない。だから出来る限り…いえ、絶対成功させるわ。だからお願い、もう少し待って？」

強い眼差しでコナンをみた。コナンはきえかった小さな声で、

「ああ」と返事を返した。

「さあ、今日のところはお開きにしましょ」

ジョディ先生の言葉でジエイムズが頷き一礼をして、病室を出ていった。「さあ、私達もかえるわよ？」

灰原が博士に目を向けたが博士はコナンを見て、心配な顔を見せた。「心配されるほど、柔じゃねえから…」

コナンは博士の顔を見ずに一言だけ言い反対を向いた。まるで、避けているみたいに。

「ほら、帰るわよ！」灰原が博士を説得してる最中に服部が立ち上がり声を上げた。

「よっしゃ！俺がここに残るわ」

しかしその言葉を強い口調でコナンが即答した。

「帰れ。」

「な、なんてやー！」

「いいから、帰ってくれ！」コナンはいつの間にか服部の方を睨み付けていた。

「ほら、服部君？ 帰るわよ！」

二人からの痛い視線を受け、服部はしぶしぶ病室を出ていった。

一人になった病室でコナンはただ考え事を纏めようと必死だった。

「後三年か… 蘭にどう伝えたらいいんだよ。三年以内に新一に戻ったら蘭にどう話せばいいんだよ！！余計悲しませるだけじゃねえか」  
奥歯を強く噛み締めたその時、病院の入り口から声がした。

第二十六話、未だ捕まっていない者（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！

（ ）

最後に出てきた人誰だか分かりましたか？

答えは二十七話で分かります（笑）

まだまだコナンも灰原も安心する事は出来ませんm（ ）（ ）m

では、後書きまで読んで下さってありがとうございます！

## 第二十七話　黒き訪問者

「お前さえ、居なくなれば、彼女は一回悲しむだけだよ」

不適な笑みを見せる同い年くらいの小さな子供。コナンは驚いて子供の方をみた。

「お前。まさか…」

「気付いたようね。そう私はスコッチ。」

そう言いながらコナンの方へと歩み寄る。コナンはまだ動ける状態じゃないため、スコッチを睨み付けることしかできなかった。

「どうして、君がここに？」

「私は彼処にはいつもいないのよ！まあそれで助かったんだけどね！それよりお前が居なければ、組織は潰れなかった！！今でもちゃんと薬は開発してたのに」

スコッチはコナンの前まできて怒鳴った。

「あんな悪党を見逃せるわけねえだろうが！犯罪者だぞ！人を次々に殺した組織だぞ。つぶさなぎや世界中が血みどろだよ」

怒鳴るまではいかなかったが強い口調で言いきった。

「人の気もしらないで！」

「残党の気持ちなんてー」

次の言葉をいう前にスコッチがコナンの首を締め付けた。

「うっ」

「お前さえ居なければ！！」

その手に力が入る。

睨み合いをしながらも、寂しい顔を見せた。

「お前とシェリーを見たときに笑みを浮かべて話すシェリーを見た。組織にいた頃、あんな笑顔はなかった。私はシェリーと一番の親友だった。なのに…！なお前が彼女を取ったんだ。

私にすら、あんな笑顔はなかった！組織が潰れたら薬のデータがな

くなり、シェリーも私も元に戻れなくなったのよ！お前のせいだ！」  
心の中で『成る程』と理解した。この人も『ただの子供』じゃないと気付いた。しかし気付いたところで風向きが替わるわけがなかった。コナンは力を振り絞って声を出した。

「組織にいたから…アイツは笑顔をだせなかったんだ…」

「何解かりきった事言ってるのよ！何も知らないくせに！たった、半年のくせに…！」

泣きながらコナンの首を締めていく。しかし、一瞬の間を見てコナンは首から手を離す事に成功した。間一髪で逃れたものの、締め付けられていたお陰で発作が始まった。それでも尚、彼女に強く言い切る。

「ど、どっちが解ってねえんだよ！アイツの気持ち」

咳き込みながらも、訴えた。意識が朦朧としていくが必死で堪える。ここで負けるわけにはいかなかった。

「解ってないのは貴方じゃない！私達は五年以上一緒にいたのよ！貴方よりずっと長いわ！」

「それで、アイツの何を知った？」

「うるさいわね！目障りなのよ！」

その瞬間、コナンのお腹に激痛が走った。スコッチがコナンのお腹を殴ったのだ。

「ゲホ、ゲホ…ゲホ」

たちまちベッドを赤く染めた。

「貴方は知らないわ！彼女に起きた悲劇を！」

「し、知ってる…よ…」

弱々しい声でコナンは答えた。聞こえるか聞こえないかの小さな声を出そうとするが、コナンの視界はだんだん真っ暗になり、意識を失った。

「くたばったわけ、ないか。妙に運がいいから、確実に仕留めない  
と。」

ベッドに気絶させたコナンにロープを結び、窓から下ろした。

下には数名の部下がいた。

「そこにいて！私が降りる間にガキを確り縛っておくのよ！」

その言葉をいい残し病室を出た。病室を出た瞬間、誰かとぶつかり  
尻餅をついた。

「大丈夫か！？　こんな時間に何してんねん」

そこにいたのは服部だった。胸騒ぎがしていたため慌てて、引き換  
えして来たところ、スコッチと鉢合わせになったのだ。

「見舞いにきてただけよ。」

「見舞い？　誰のや？」

「この人」

彼女が指を指した場所はコナンの病室だった。

「さよか…って騙されるわけあらんやろ！く、やのうてコナンに何  
をしたんや？」

「フツ。工藤新一。でしょ？この病室で寝ていた人。そうそうシ  
エリーに伝えてくれるかしら？」

「伝えてなくても、居るわよ。スコッチ。」

灰原が少し離れたところで手を組んで立っていた。

「あら、手間が省けたわ。シェリーまた一緒に新しい組織作ろう？」

「いやよ。もう、私はそつちの世界には戻らないわ。」

灰原はゆっくりとスコッチの方へと歩き出した。

「言うと思った。じゃあ、此处で取り引き。ここにいた彼を返して  
欲しいなら、彼処にきて？そして返す代わりに私と手を組んで？」

「待って！彼つてまさか！？また貴方達は工藤君を傷つけるの？」

彼が何したった言うの？　まだ万全とは言えない体で、五日も生死  
をさまよったのよ！もう彼を傷つけないで！今度こそ彼が居なくな  
ったら…したら私どうすればいいのよ！」

取り乱し飛びかかろうとする灰原を服部が押さえた。

「へえ。貴方、工藤君の事すきなっんでしょ？」

「ええそうよ！好きよ！彼の事。」

衝撃的な言葉に服部が驚いた。

「だったらあの場所に来て？その際、返事を教えてもらえる？」

「だから、私は――」

灰原が言おうとした言葉をからかうように遮りスコッチは答えた。

「来なかったら工藤君死ぬよ。フッフ、後四日間よ。貴方がちゃんと来てくれれば彼の命助けてあげる。無傷とはいえないけどね」

「彼に手をださないで！！」

灰原の声を無視をして彼女は立ち去った。

数分後、コナンを乗せたで有ろう車が病院から走り去った。

## 第二十七話、黒き訪問者（後書き）

読んで下さいありがとうございます

またコナンを拉致してすみませんm（　　）m  
前に予告していたようにスコッチさん登場です。

10月になり肌寒くなって来ました。  
でも、10月はコナン祭りなので盛り上がって下さいね！  
では！

## 第二十八話　信じる気持ち

「おい、どうするねん!？」

「黙ってて!それより、主治医とジョーディ先生に知らせて。後、博士にも。私病室にいるから」

「お、おうわかった。」

灰原はコナンの居ない病室へと入っていた。

荒れた形跡はなかったがベッドの上には血が付いていた。

（ここで何がおきてたのよ。まともに動かせない体で工藤君はなにしてたの? 廊下からは怒鳴り声は聞こえなかったってことは、塞がれてたか、もしくは首を…締め付けられてた? そんな分けないわよね…）

否定するもののなかなか頭から離れなかった。もし、みんなでここにいたら、こんなことにならなかったと後悔した。

「車の中」

「上手い事行くもんですね。」

「ええ。後はシェリーが来るだけだわ。」

気を失ってるコナンをみて軽く笑った。

「さあ、彼処に向かってくれるかしら。」

「はい、研究所ですね」

一台の乗用車が暗闇をすいすいと走り抜けた。　「病院」

「おい、ねえちゃん!つれてきたぞ!!!ってなんじゃこりゃ!血まみれやんけ!!」

服部が飛び込み驚いた。想像以上の現場では博士や主治医が啞然としていた。

「ねえ、先生? 江戸川君の事でききたいんだけど」

冷静さを取り戻した灰原は先生に問いかけた。しかし、先生は固ま  
ったまんまだった。

「先生？ 先生！？ 確りしてください！」

灰原は先生を呼び戻した。

「え、な、なんですかこれ？」

「説明は後！ それより江戸川の容態は？」

「えっと、肩や腕の傷は大丈夫ですが、お腹と足がまだだと思いま  
す。まともに歩けないでしょう。後、お腹は激しく動くと思う恐れ  
があります。」

「ええ！ じゃあ、危険なんじゃないですか！ 先生。」

「危険と言えば危険です。しかし、彼が何もしなければ助かると思  
いますよ？」

その言葉に違和感を覚えた服部と灰原。先生の口元が笑ってるよう  
に見えたのである。

「そう…彼なら抵抗するでしょうね…」

「あ、哀くん…」

博士が心配そうに駆け寄った。

「では、此方も上の方に伝えてきます。」

「それは駄目！！今は内緒にしてて、絶対彼を連れて個々に帰って  
くるから！ 行きましょ。服部君、博士」

灰原はスタスタと病院をでていった。

その後を早足で服部と博士が追った。

（研究所）

「で、このガキどうするのですか？」

「その部屋にきつく縛り付け私が来るまで鍵かけといてくれる？」

「へい！！！」

部屋に来てから部下は黙々と作業を続けた。手を後ろにきつく縛っ  
て、足も縛りつた。最後に丸腰かを調べ鍵を閉めていった。

「…う…」

コナンが起きたのは其から数十分経った後だった。

（一体何が起きたんだ！？）

自分が縛られ監禁されてる事がわかり考えた。そして、スコッチに気絶させられた事を思い出した。

「やっと目覚めたのね。ノロマな探偵さん？」

扉の向こうにスコッチが立っていた

「俺をどうするつもりだ？」

「シェリーを誘き寄せる餌よ？」

薄笑いしながら近づいてくる彼女にコナンは睨み付けた。

「俺はどうでもいい！灰原には手を出すな！」

「フフフ、あなた達同じ事いうのね！」

薄笑いが大笑いになりコナンを見下げた。その顔は驚いた顔をしていた。

「驚かなくていいじゃない？ 彼女貴方が好きとも、言ってたわよ」

「アイツが！？」

コナンが驚いているうちに床に穴があいた。

「ほら、警戒しとかなきゃ死ぬわよ？」

笑いながらコナンの周りを三発撃ち付けた。まるでコナンを玩具にしたようにからかう。全てを避けギリギリの場所を通過した。

「シェリーには私の仲間になれば貴方を返すと伝えたわ。」

「なるわけ…ねえだろ」

小さな声に聞こえないわよつと言う素振りで耳に手をあて

「何？」つと聞き直す。

その行動に腹を立てながらも堪えた。今怒鳴るば自分自身の体がヤバイ事に気付いた。

「苦しんでるようなら楽にしてあげようか」

怒りを堪えるコナンに彼女は笑いながら額へと銃口を向けた。

「ヘッ！誰が楽になるかよ。おまえら潰してから楽に生きるよ」

「何、生意気な事言ってるのよ！潰す？出来るものならやってみなさいよ！」

額に向けていた銃口を頬へと移し乾いた銃声とともに頬に血が流れた。

「なんでもぶつぶたしいもんじゃねえだろうが！！殺したいんならサッサと殺せよ！」

コナンの声が研究所内に響き渡った。部下数名がコナンに向かって銃口を向けた。

「フッフ、取り乱す貴方の声ゾクゾクさせるわね。簡単に殺したら面白くないわ。殺すならシェリーの前で殺らないとね。だって愛する人が自分の前で死ねば、取り乱し私を殺しに来るかもしれないじゃない？ そしたらシェリーも一緒に監獄にいけるわ。一緒にね」

「そこまで、一緒にいたいのかよ！生憎、監獄に入れられても一緒にはなれないぜ？ それにアイツはもう、罪を重ねたりしねえよ！」

自信満々な顔でスコッチを見た。コナンが灰原を信用している様子にスコッチは腹立たしく睨みつけ一発打ち付けた。その弾はコナンの腕へと命中した。

「…痛っ」

顔を歪めたコナンを見て、部下と共に笑い会った。

第二十八話ゝ信じる気持ちゝ（後書き）

読んで下さいありがとうございます！

更新遅くなつてすみません。

此れからも宜しくお願いします

## 第二十九話 無茶

二日目・阿笠低

「おい、どうするねん？ 工藤のどこにいくんやる？」

服部が灰原に問いかけた。

今博士の家にはジヨディ先生と珍しく、ジェームズが来ていた。

「ええ。行くわ。鳥矢町にある秘密の研究所。多分そこにいるわ」

「まさか、一人で研究所に入るつもり？」

ジヨディ先生が驚いた顔をしながら灰原を見た。

「そうしたいけど、彼と一緒に来てくれるんじゃない？」

灰原はジヨディ先生から服部へと視線を移した。

「おう！ 付いてつたるさかい安心し！」

服部は灰原を真っ直ぐ見つめた。その瞳は確りした力が備わっていた。

「わかったわ。私達は外で待ってるわ。いいですよね？」

「ああ。」

ジヨディ先生はジェームズに確認をした後ジェームズの車に乗り込もうとした。

「哀ちゃん！！」

後ろから見覚えのある声がした。振り向き灰原は驚いた。

「蘭：さん？ どうして？」

「胸騒ぎがするの。だからここに来たら何か分かんと思ってきたの。

ねえ？ コナン君は？」

「……」

灰原は黙り込んでしまった。

「ねえ？ 答えて？ 今何がおきてるの？ コナン君の身に何が起きてるの？」

灰原は迷った後少しだけ教える事にした。

「ごめんなさい。私のせいで、江戸川君は…誘拐された。本当にごめんなさい。でも、絶対連れて帰ってくるから信じて！」

少し潤んだ瞳で蘭を見た。蘭はそれ以上に涙を流していた。

「バカね私。何泣いてるんだろう。哀ちゃん？ 約束して、絶対帰ってきて！この町に絶対帰ってきて！待ってるから。私待ってるからね！」

未だ、蘭の瞳から涙が溢れていた。

「ええ、約束する」

灰原の瞳に力が宿った。これから危険な事をしようとしている事は蘭にはわかっていたのかもしれない。だから、真面目にここに帰って来たと伝えてたのかもしれない。これから行こうとするメンバーがそう思った。

そして、灰原達を乗せた車は走り去った。

「待ってるから新一…絶対帰って来ること待ってるからね。」

蘭は新一の家の前で小さな声で語った。

〈研究所〉

「後三日の命だね？ 助けに来るかしらね。見捨てるんじゃない？」

「アイツは大丈夫だ。アンタが心配するほど、弱いやつじゃない…」

「まだ、口聞けるだけの体力あるのね！ほんと無駄にしぶどいね。」

「探偵はこう言うもんだよ。」

未だ腕から出る血は止まる気配はなかった。しかし、気を失うほどでも無いため、余裕の笑みを浮かべる。

「ギーギー」

向こうのほうで、扉が開く音がした。

「おい！何処におんねん？」

服部が叫ぶ声は地下まで聞こえてきた。

（服部！？）

「あら、意外に早くきたわね。」

服部の声にコナンが驚いた。

「あの関西弁の人もいたから可笑しくないわよ？」

「お前関係なえ奴まで巻き込んだのかよ？」

「あら、良いじゃない。その方が楽しいじゃない？」

「ふざけんな！！ 全く関係ない奴まで巻き込んで何が楽しんー」  
最後の語尾が出る前に咳込み言えなくなった。

「あらあら、自分の体先に考えたら？ さあ彼を上まで運んで！」  
スコッチの指示で部下の一人がコナンを抱いた。

階段から足音が聞こえ灰原達は警戒した。

「フッフ。ちゃんと来てくれたのね。」

「工藤君はどこ！？」

灰原は当たりを見渡すようにスコッチを見た。

「彼はここよ」

階段から部下が上がって来た。そこには抱えられナイフを突き付けられたコナンが居た。

「さあ！答えを聞きましようか？ 彼ならいつでも、殺せるんだから」

「私は貴方の仲間にはならない。それが答えよ」

「ふーん。彼がどうなってもいいんだ。」

コナンの首からは一筋の血が流れた。

「灰原！俺はいいから、スコッチから目をそらせるな！」

その言葉でコナンに向きかけた目をスコッチに向き直した。

その時、コナンの腕から血が出てるのが見えた

（バカ！なにやってるのよ！！）

灰原はスコッチを鋭い目付きで睨み返した。

「あら、何よ強がつて！仲間になれば助けてあげるっていったでしよ？」

灰原が真剣な中スコッチは、不敵な笑みを浮かべ灰原の近くを発泡した。

その行動に、頭に來た服部が怒鳴った。

「あんた！いい加減にしいや！！自分一人でなんにも出来んのか！？　そこまで、この姉ちゃんさそう理由ないやろ！！」

服部の言葉に頭に來たのか、服部目掛けて発泡した。その弾は服部の頬をかすった。

「あんたに関係ないのよ。引っ込んでなさい。」

その後も、服部に向かって打ち付けた。

その騒ぎにFBIが駆け付けた。

「どうしてあなた達がいるのよ！」

スコッチはジョディ先生に目掛けて発泡した。その弾をギリギリでかわした。

「そんな事どうでもいいのよ！　早く銃を捨てなさい。」

ジョディ先生はスコッチに銃口をむけた。

「あらあら、そんな事していいの？　この子死ぬよ」

その言葉で、ジョディ先生はハッとした。

その光景は、さっきより遙かに多くの血が首から流れ額には銃口を向けられたコナンの姿だった。

「せ、先生。俺の事はいいから早く！彼女を！！」

「うるさいわね！黙らせなさい！」

「はい！」

スコッチはジョディ先生から目をそらすことなく、部下に命令した。部下はコナンの口に手を当てた。しかし、コナンはこの動作が狙いだった。

「痛！！」

部下が叫んだ。コナンは、部下に口を塞がれたとき思いっきり、手を咬んだのだ。コナンは部下の手から解放され、地面へと、崩れ落ちた。

「このガキ！！」

部下はコナンに向かって思いっきりナイフを降り下ろした。

「工藤くーーーーん！！」

「工藤ーーーー！！」

## 第二十九話 無茶 (後書き)

続きやっとかけましたよ。連休は祭りに参加していて評価感想見  
て『漆黒のスナイパー』を仕上げてダウンしてましたm(\_\_\_\_\_)m

この秋コナンだらけですね(\_\_\_\_\_)!!  
楽しみでたまりません!!!1

**第三十話　未来は変えられる（前書き）**

お待たせしました！三十話です（　　　）

### 第三十話　未来は変えられる

灰原の叫ぶ声も意味無くナイフは勢いよくコナンへと向かった。

コナンは間一髪のところまで避け素早く麻酔銃を撃ち込んだ。  
その針はギリギリ首に刺さり、部下は眠りに落ちた。

コナンは手首を動かし、無理矢理に縄をほどいた。痛みなど関係ないといった素早さで足をもほどいていった。その早さに皆が驚いた。  
「ちっ！」

スコッチはジョディ先生に向けていた銃を灰原に向けて撃ち付けた。  
「灰原避ける……！」

その言葉と共に、コナンが灰原の上へと被さり、弾は背中から腹部へと入った。

スコッチはジョディ先生から灰原へと銃を放った時、ジョディが撃った弾が足へと貫通し、確保されていた。

「工藤君。工藤君！」

「クールキッド！」

「工藤！」

皆は灰原の声でコナンの周りに集まった。

その隙に部下達が、走りだした。しかし、服部によって阻止され、見事全員を気絶させた。

「ろくでもないやつちゃ！もし、工藤が死んだらー」

「は、服部：人を勝手に殺すな……」

その声にコナンへと視線が向いた。

「工藤君！なんで庇ったりしたのよ！そんな体で！」

「守るって言っただろ……」

コナンはFBIが呼んだ救急車に載せられた。

「工藤君聞いて？アポトキシンの解毒剤できたの。後はもう一つの解毒剤作るだけよ。」

「そっか」

そう一言だけ返し、気を失った。

「工藤君！！」

「工藤！」

「落ち着いて下さい！彼は大丈夫ですから！命には別状ないですから！」

救急隊員は二人に言い聞かせた。

## 鳥矢病院

手術中の赤いランプが何時間も輝く。灰原にとって、トラウマになりそうな光景を服部と二人で待つ。ジョディ先生はスコッチの事で警察に呼ばれている。

「アホやなアイツ。見事に姉ちゃんの事守ったわ。」

服部がぼそりと呟いた。

「ええ。ほんと馬鹿。私みたいな人助けるんだもの。馬鹿よ……」

灰原もまた小さな声で呟いた。二人の会話をしながら待つ。大切な人を一生懸命願った。無事であるようにと。

あれから何時間が経っただろう。やっと赤いランプが消え中から大勢の人が出てきた。

「あの、江戸川君は大丈夫でしょうか？」

「ええ。弾は見事摘出されました。大丈夫です。」

二人はホッとした。しかし、コナンの姿を見て絶句した。

まるでミイラの様になってしまったコナンをみてしまったからである。顔から下、首・肩・胴・手・右足にと包帯が巻き付けてあった。

～～～病室～～～

「ねえ、私てどうして守ってくれるの？　そこまでして、どうして？　私生きてる価値ないのよ？」

目を覚まさないコナンに真剣に問いかける。その質問に答えたのは服部だった。

「なあ、姉ちゃん？　あんたにも、生きる価値あると思うんやわ。」

灰原と服部はコナンを挟むように会話をかわした。

「どうして！？　私は多くの人を殺したのよ！？」

「そやから、生きて工藤を助けんかい！！　過去の思いは捨てられへん。けど、未来は変えられるやろ？　さっきやて、スコッチの仲間にならんってちゃんとスコッチにいったやん！」

「でも……」

「でもも、なんもあらん！　命助けてもらたんやろ！　お祖母ちゃんになるまで、生き！　せやないとあんた死んだら工藤は、どれほど、苦しみながら生きるんや？　こいつがお人好しって事知ってるやろ？　あんた死んだら工藤は工藤自身を責めるで！」

服部の言葉に言い返しが出来ず、下を向く。

「あんたは精一杯生きたらええねん。」

服部はコナンを見た後、灰原に視線を向けた。

二人の会話から二時間が経った。

「う……」

コナンの微かな声三人が一気にコナンの周りに集まった。

そして、コナンはうつすら目を開けた。

「おお、新一！」

博士は涙を流しながら言った。コナンは少しの間周りをみて、今自

分がどこに居るのが確かめた。

「助かったんだな…」

一言呟いて、みんなから目を反らし窓の景色を見た。

「工藤！助かったで！怪我大丈夫か？」

「ああ。」

「何むちやいつてんのよ！ミイラみたいな格好になって、なにが『ああ』よ！」

「それより、おまえは大丈夫か？ 前みたいに怪我してねえか…？」

「大丈夫よ。どこもなんともないわ。でもー」

「そっか。良かった」

灰原の言葉を断ち切ってコナンは笑いかけた。

「んで、服部お前は？」

「心配せんでもええ！頼だけや！工藤に比べたらなんともあらへん。」

「そっか…」

「なんや？ その残念そうな顔は？ 姉ちゃん時みたいに笑えや！」

「ハハハ…」

「顔思いつきりつつてるやん！」

「まあまあ服部君。漫才は其処までにして。先生に診てもらうつんじやから。」

博士の後ろには先生が立っていた。

「無事だったのですね。また、怪我を増やしたようですけど。」

先生が苦笑いしながらコナンに近づいた。

「うん。大丈夫！後は、君次第！お大事に。」

先生が出ていく姿に灰原は睨み付けた。

「ねえ、あの人から何か感じない？」

「ああ。感じると言うより殺気があったんだ…あいつも組織の一員かもしれねえな。」

「そっね、そしたら、スコッチが此処に来たのも不思議じゃないわ。」

二人の会話を聞いていた服部が立ち上がった。「よっしゃ！じゃあ、姉ちゃん確かめに行きますか！」

服部の声に二人が驚いた。

「お、おまえ突然すぎんだよ！！」

「すまんすまん。じゃあ！じいさん、工藤の事宜しく頼むわな。」

阿笠博士の返事を聞く前に服部は灰原を引っ張りながらも廊下にてた。

病室が一気に、静まりかえった。静寂をやぶったのはコナンだった。

「なあ、博士！聞いていいか？」

「なんじゃ？」

真剣な顔でコナンは博士を見た。

### 第三十話　未来は変えられる（後書き）

コンニチハ（o^ ^o）

遂に三十話（31話）にきました。この話しも、もうすぐ、終わりがもしれません。ながくてダラダラですみませんm（――）m

さて、今回のタイトル『未来は変えられる』

平次が哀ちゃんに言っていた言葉

コナンが言うか、平次が言うかで迷いましたが平次に言ってもらいました。コナンはたくさん美味しい（？）ところありましたから（これからもかな）なので、平次を活躍させてみました。

哀ちゃん薬作り頑張って下さいね（笑）後は貴女次第でコナンの運命かわるのだから！！

（^―^；）『作者もがんばります』

では読んで下さってありがとうございます

### 第三十一話　もう一つの真実

「正直に話してくれ博士…宮野夫妻と面識があったのか？」

「なぜ、それを…」

「答えてくれ！お願いだから」

博士の言葉を断ち切って願うような目で必死に博士を見た。

「ああ、同じ研究仲間じゃった。」

「そっか…」

コナンの目は悲しそうな目になり博士から視線をそらした。

「でも、聞いてくれ新一。一緒に研究はしていたが組織に入るか入らないかはちゃんと断った」

「それ、信じていいんだな」

「良いに決まってるじゃろ！しかし、なぜ知っておるんじゃ？」

博士はコナンの顔をジッと見た。

「それは宮野博士が直々に教えてくれたから。」

少しの空白の時間。博士は驚きを隠せずに居た。

「すまない。黙ってて。危ない目に会わせてすまなかった」

博士は深々と頭を下げた。

「いいよ。別に。ただ真実を知りたかったただだから。博士が悪いんじゃないよ。頭あげてくれねえか？」

その言葉で博士はゆっくりと頭をあげた。その目からは涙が溢れていた。

～～～同時刻～～～

「なあ、ほんまにあの先生組織の人なん？」

歩きながら灰原に質問をした。灰原は服部を見向きもせずには答えた。

「貴方もみたでしょ？ 工藤君がこの病院から誘拐された時あの人笑っていたのよ？ あの人絶対何か知ってるわ」

そのまま、灰原はナースステーションまで黙り込んだ。

「すみません。江戸川コナンの主治医の井上先生いますか？」

「井上先生ですね。少々お待ちください」

数分すると、井上先生が灰原のところに小走りでやってきた。

「お待たせしました。どうしたのですか？」

「先生とお話したいと思い呼びしたのです。」

灰原の丁寧な言葉に先生は、茫然とした。

そのまま、屋上につれて行き、ベンチに三人は腰を掛けた。

「で、お話しとは？」

「単刀直入にいます。あなたは、組織の人ですか？」

「え、まさか。冗談やめて下さいよ！」

灰原は先生の目が泳いでいるのに気付いた。

「隠しても無駄よ。あの現状でスコッチに江戸川君の場所教えられるのは絞られてくるわ。それに、あなた江戸川君が誘拐された後笑ってたようだし、さつき、『組織』と言ってあなた即答したわよね？普通なら即答に肯定も否定もできない。わからないと言った顔をするわ」

「へー。よく見てたね。」

認めた瞬間二人はよりいっそう睨み付けた。

「そんなに睨まなくても話してあげてもいいよ？」

木村は睨む二人と違い余裕の笑みを浮かべた。

「どうして？」

何を企んでいるのか検討もつかず質問した。

「もう、終わりなんだよ。この組織。私は何もしてない。ただ、スコッチに居場所を教えただけ。私は組織の下っぱだからね…情報を流すことしかしていない」

「本当？」

灰原の鋭い目は尚も木村に向ける。

「本当だ。私は組織にいながらコードネームもない人だ。」

「じゃあ、おまえはあのボウスを殺すきはないんやな」

今まで黙っていた服部が声をだした。

「別にあの人ボウヤを殺すつもりはない。それに、殺すチャンスならいくらでもあった。でも、殺していない。これで、私を信じるかな？」

無言の空気が数分続いた後、

灰原が

「そう」とたげいい、階段をおりていった。

「お、おい。姉ちゃんほつといていいんか？」

「ええ。大丈夫よ」

その一言をいい病室へ向かった。

コナンの部屋に灰原と服部が入って来た。

「んで、どうだった？」

「ええ。あの人、黒だったわ。」

「そっか」

「あら、満足そうね」

コナンの口元が緩んだのを見てシニカルな笑みを見せた。

「ああ、終わったんだなって思ってたよ」

「そうね」

灰原短く答えた。その手は握られ小刻みに震えていた。

それに気付いたコナンが声を掛けた。

「オメーが悪いんじゃないぞ。俺の体も怪我もな。こんな物すぐ治るし、死ぬのも、もっと先。解毒剤はもう一つの薬ができれば、のむよ。それまで『コナン』でいるよ」

「ねえ、なぜ其処までしてくれるの？ 私貴方を――」

「それ以上言うな！」

「え？」

灰原の言葉を遮り、コナンは叫んだ。その声に皆が驚いた。

「また、くだらねえこと考えてるんだろ？ 憎んだって何も始まらねえだろ？ まだ三年あるんだ。頑張れ。オメーなら出来るだろ。」

いや、オメーしかできねえんだよ！」

「…言われなくても解ってるわよ…」

その返事を聞き、コナンはフツと笑った。

その横で服部が然り気無く呟いた

「三年って短いか長いかわからへんなあ。」

「バロー。短いか長いかなんて、その人次第だよ。その人がどれだけ『三年』を有効につかうかだ」

「そらそうやわな」

コナンは服部に目を合わせ話し、服部も満足そうな顔でコナンを見た。その言葉は灰原にも深く胸に刻み込まれた。

### 第三十一話 もう一つの真実（後書き）

読んで下さいありがとうございます！

私の氣に入った言葉。『バロ！。短いか長いかなんて、その人次第だよ。その人がどれだけ『三年』を有効につかうかだ』  
ですね。言葉氣に入ってしまった！

電子辞書の電池切れてしまった（ノ　丁）

誤字があるかもです

申し訳れございません。

### 第三十二話　絶対、諦めない

（一週間後）

大分落ち着いたため、米花総合病室へと移された。

「また病室生活かよ。もう完治してるっての」

「何言ってるのよ。ミイラが少し回復しただけで完治なんて全くしてないじゃない！しかもまだ車椅子」

灰原が呆れたような目をした。服部はもう大阪へかえり、今は博士と三人である。

「なあ…人をミイラ扱いすんの辞めてくれねえか？」

「あら、見た目ミイラだと思うけど？」

二人の会話を見守っていた博士が話を割って入った。

「新一君、こっちに帰ってきたこと蘭君達に話すのか？」

「いや、まだだ。」

「そうよ、こんなミイラ見たいな人みたら蘭さんが可哀想だわ」

「おい！」

なるほどつと納得した博士とは違いコナンは不機嫌になっていた。

「まあ、まだまだ病院生活続けることね」

無言の空気が続く。何もない灰原はフツファツヨン雑誌に目をとらし、博士は毎日の疲れがたまっていたのかソファでグッスリ眠っていた。

しかし、そんな無言の空気も束の間。

小さな咳をしていたコナンが今では激しい咳えへとかわっていった。

その姿をみて灰原が医者と呼ばうとナースボタンを掴もうとしたが、その手をコナンが遮った。

苦しそうな顔をしながらも、必死に首を左右に振った。

「すぐ…おさま…から」

途切れ途切れな言葉を必死に伝えた。

「な、何言ってるのよ！早く呼ばなきゃ…貴方がヤバイじゃない」  
少し怒鳴り気味の声をだが、コナンはナースボタンを一向に押そうとしなかった。

「こんなんでも呼んだりしたら…迷惑…だろうが」

「わかったわよ」

何も出来ない事に灰原は苛立ちを感じた。

その後、数分間が発作が続いた。灰原はコナンの背中を擦る事しか出来なかった。

「もういいよ。大分落ち着いたから…」

「なら、いいけど、当分探偵できないわね。ごめんなさい」

灰原は深々と礼をした。

「だーから。謝るなって言ってるだろ。丁度いい休憩になるよ」  
コナンは灰原に言い聞かせた。

「そうね、いい休暇になるわね。無茶ばかりしてる貴方には丁度いい機会よね」

「あのな、おまえ一言多いんだよ」

「フフフ、さあ博士帰るわよ。ミイラさんも今日は相当疲れてるだろうし…」

灰原は博士をひっぱりながら廊下へと向かった。

「おい！」

コナンの声もむなしく二人はでていった。

（たく…一日に何回ミイラって呼ばれなきゃいけないんだよ…）  
呆れ果てたコナンは二人が出ていったドアを眺めていた。

（ばか…本当は怖いくせに。三年なんて怖いくせに、一回くらい弱音吐いてもいいじゃない。）

灰原は車の窓から暗い風景を睨み付けながら、心の中で呟いた。  
阿笠邸につくやいなや、一直線に地下へ足早に行った。

「あ、哀くん！夕飯は？」

「今日はいいわ。博士一人で食べといて。」

「哀くん！」

最後の博士の声も無視して地下へと姿を消した。

（やらなきゃ、いけないのよ。あの人の人生三年で終わらしたくない。絶対に！）

灰原はパソコンと睨み合いながら夜中を過ごした。

（もう四時なのね…ついこの間まで時間が経つの遅かったのに…今は早いものね…）

灰原はパソコンから目を離そうとしたが、一気に釘付けになった。  
最後のフロッピーにはこう書いてあった。

《この薬を作るには投与された人の血液が必要となる。投与された日から一年以内に解毒剤を作らなければ、効き目はない。》

この文に灰原は目を大きく見開いた。

残酷だけど、まだ諦めたくない思いでパソコンを睨んだ。

面会の時間になるやいなや、コナンへと駆け寄った。

「工藤君話があるの！少し時間もらえるかしら？」

血相をかえた灰原をコナンは驚きながら、頷いた。

「隠せないから伝えるわね：まず、貴方の血液を分けて欲しいの！  
そこで一呼吸おきコナンの反応をまつた。

「別に良いけど。『まず』ってことは他にもなにかあんのか？」

聞き返えされ灰原は戸惑った。今ここで話していいのか、彼をただ苦しめるだけな気がしてなかなか言い出せなかった。

「灰原？ 大丈夫か？ 言いたくないなら言わなくていいぞ？」二回目の問いかけに灰原は決心したように口を開いた。

「工藤君：一回しかいわないから聞いて。

貴方が投与された薬、投与された日から一年以内に解毒剤を作らなきゃ、効き目がなくなるように作られてるの」

早口に言った言葉でもコナンに衝撃を与えた。それでも、コナンは不適な笑みとともに、返事を返した。

「一年あるなら出来るはずだよ。今のおまえなら精一杯な。でも焦るなよ。俺、何も出来ねえから偉そうな事いえねえけど、これだけは言える。諦めるな、諦めたらそこで終わりだ。何があっても諦めないかぎり前進するよ」

二ツと笑いかけるコナンに目を合わせる事が出来ずに下を向いた。  
「絶対。助けるから…すべての事から諦めないから。」

そついい、顔を上げコナンに向いた。

「ああ、信じるから。でも無茶はするなよ？」

「その言葉貴方に言われたくないわ。散々無茶した貴方にね。」  
笑いながらドアへと向かった。

「可愛くねえやつ…」ポツリと吐いた言葉は灰原に聞こえたらしく、  
「何か言った？」と言わんばかりの目でコナンを睨んだ。

コナンは冷や汗をかきながら

「いや、何も」と手だけを振って布団の中に隠れた。  
隠れたコナンに灰原は不適な声で返した。

「血液タツプリ退院したらもううから。覚悟しておきなさい」  
その後スタスタと病院を後にした。

「まじ…怖え」

コナンは出ていった灰原に視線を移した。

### 第三十二話、絶対、諦めない（後書き）

読んで下さいありがとうございます

二人の言い合い書いてて、楽しかったです（笑）

まだ平和じゃないけれど、もう残党が誰かを拉致することはありません！

これから、哀ちゃん薬に向けて頑張っていきますので、温かく見守って下さい！

後「すべての事に諦めない」と言ってた哀ちゃんですが、コナンを助ける以外にも、深々い意味がー！。

考えて下さいね！

それでは読んで下さいありがとうございました！

第三十三話、許可（前書き）

短いです

### 第三十三話　許可

米花病院にきてから、十日が経った。

「あら、見ないうちにミイラから解放されてるのね」  
今はお腹と首、足に包帯が巻かれていた。

「お陰さまで。 んで、おまえ最近来てなかったけど順調なのか？」

「ええ、まだまだ時間かかるかもしれないけど」

「自分のペースでやればいいよ。 それより、蘭呼んでもいいか？」

「そんなに会いたいなのねあの人に…」

「え？ ああ…」

灰原の言葉で、一気にコナンの顔は赤くなった。

「貴方って分かりやすい人ね」

今も尚赤くなってるコナンに灰原はクスクス笑った。

「まあ、良いんじゃない。 外見から見ると足と首だけだし…」

「サンキュー灰原！」

にこにこするコナンに灰原はふわっと笑った。

「じゃあ、わしが早速蘭君に知らせて来るよ」

博士は笑顔で病院を出ていった。

「で、蘭に何て話すんだ？」

「あ、その話ね。 彼女もう知ってるわ。 貴方が誘拐された事」

「え…どうしてだよ？」

驚くコナンに満更でもない顔で灰原はコナンを見た。

「私が言ったのよ。偶然あつてね。『私のせいで誘拐された』って伝えたの。ごめんなさいね」

「謝んなくて。そっか、あいつ知ってるのか。でも『私のせい』ってまたおまえー」

「大丈夫よ。自分を責めたりしてないから」

コナンの言葉がわかったようにコナンより先に気持ちを伝えた。

「おまえ、変わったな。前向きになったよ」

コナンは真面目な顔で言いきった。その言葉に灰原の顔は真っ赤になって下を向いた。

「お、お世辞は結構よ」

「お世辞じゃねえよ。」

コナンはムスツとした顔で言い返した。

「そう言う事は彼女にいいなさい」

灰原はそう言いながら病室を早歩きで出ていった。

「あいつ、前向きになったけど、素直じゃねえな」

呟きながら、ベッドに潜った。

### 第三十三話く許可く（後書き）

長い間お待たせしましたm（――）m  
なのに短くてすみません（<――>）

10月27、28日に文化祭があつたので、日があきましたが、これから学校行事あまり有りませんので少しは早めに投稿できと思っています（多分ですが…）  
あやふやですみません。

次の話は蘭がでてきます！

### 第三十四話　蘭からの感謝・コナンの悪化

　　次の朝

小さな物音でコナンは目を覚ました。

「あ、ごめんコナン君起こしちゃったね」

目の前には、花瓶の花を取りかえる蘭の姿が目に入った。

「蘭姉ちゃん？」

寝起きの為、驚いた顔を見せず、我にか帰った。

「昨日博士から電話もらって今日丁度日曜日だから、慌て来ちゃった。大丈夫？　怪我の具合？」

「大丈夫だよ！こんな傷」

コナンは笑いながら大丈夫そうに振る舞った。

「そう、でも、絶対無茶しないで。コナン君」

その目は子供見る目ではなく、同年代そう新一を見るような目をしていた。

「う、うん。大丈夫！もう無茶はしないから」

コナンは笑顔で蘭を見た。

（蘭まさか、気付いてるのか？）

少しだけ沈黙が続いた。それを崩したのは博士であった。

「おお！蘭君きておったのか」

突然後ろから声がして、蘭はブルっと身体を振るわせた。

「は、博士。びっくりするじゃない！」

「すまんすまん。脅かすつもりはなかったんじゃ」

博士は、ペコペコ頭を下げながら謝った。

「それより、二人の会話邪魔してすまんのう」

「いいのよ。気にしないで」

博士と蘭の会話を灰原は少し離れたところで聞いていた。その目は蘭を少し睨む感じで見た。

「あら、哀ちゃん？」

「え？」

突然話をこちらに向けられ驚きながら睨む目を普通に戻した。

「哀ちゃん、今から一緒に散歩しない？ 少し話したいの」

「ええ、いいわよ」

何を話すか少しわかった灰原は即答に近い返事を返した。

「じゃあ、博士！コナン君をよろしくね」

「わかった」っと博士が答えると二人は病室から出ていった。

「なあ、蘭が灰原に何を話すと思う？」

「うーん。この前、病室から新一が誘拐された時のお礼じゃないかな？」

「お礼？」

「そうじゃ哀君、蘭君と何か約束してたみたいじゃから」

「そつか。あいつ蘭との約束守ったみてえだな」

コナンは涼しげな顔で二人が出ていったドアを見た。

「哀ちゃんありがとう。コナン君取り戻してくれて」

「いえ、私なにもできなかったわ。ただ、江戸川君を傷つけたただけだから」

「そんな事ないよ。皆で力合わせたからコナン君助けられたんでしょ？ それに私との約束守ってくれた。哀ちゃんもコナン君もこの米花町に戻って来てくれた。コナン君を傷つける傷つけない問題じゃない。みんな……みんな帰って来てくれた事は私との約束を守ってくれた事。だから哀ちゃんや他のみんなには感謝してるありがとう」

灰原は下を向いたまま何も喋らなかった。

「話しはそれだけ。さあ、コナン君の病室にかえろう？ これから、コナン君をよろしくね」

「え、ええ」

灰原は少し赤らめた頬を隠しながら病室へと向かった。

〈病室〉

病室の中から聞こえてくる咳き込む音が二人に届いた。

「ちよつ江戸川君また無茶したんじゃないでしょうね!？」

灰原は勢いよく、ドアを開けコナンに近寄った。

「また、怒鳴ったりしたの？　ねえ、博士!」

「違うんじゃない。しん……じゃなくて、コナン君さっきまで寝ていたんじゃが急に咳き込みだして……それで、背中さはすってはいるものの全く治まらんのだ」

博士は今も一生懸命コナンの背中をさすっていた。

「そう……蘭さん？　悪いけど帰ってくれる?」

「え？　でも……」

「いいから帰って」

灰原は蘭をきつく睨み付けた。この状況を蘭には見せたくなかったのだ。

「わ、わかったわ」

そう言つとドアの方へと歩きだした。

「ごめんなさい。」

灰原は小さな声で蘭に謝った。

「謝らなくていいよ。じゃあね……」

蘭はそのまま病室から出ていった。

「工藤君？　確りして!？」

灰原は必死にコナンの手を握りしめた。

数十分後には治まり、眠りについた。

「工藤君。あの日より悪化してるわ。」

「な、なんじゃって!」

灰原の発言に博士は動揺を隠せなかった。

「多分だけど、小さな身体に負担がかかり過ぎてるのよ。三年もつか、わからないわ」

「そんな!」

「博士! 帰るわよ。一刻もはやく、薬作らなきゃ危ないわ!」  
「わかった」

博士は深呼吸をして心を落ち着かせつから病室を出ていった。

(死なないで…工藤君。)

灰原は心の中で願いつづけた。

「コナン君の身体に何が起きてるの?」

ロビーでは蘭が待っていた。

「ら、蘭さん?」

「ねえ、答えて哀ちゃん!」

「ごめんなさい。今は何も話せないわ……」

他の質問を無視するかのようにスタスタ博士の車に乗り込んだ。

「ねえ? 博士は何か知ってるんでしょ?」

「すまん……ワシの口からは何も話せんのだ」

博士は申し訳なさそうに玄関を出ていった。

( どうして……誰も答えてくれないの？ )  
蘭は一人ロビーで立ち尽くした。

第三十四話、蘭からの感謝・コナンの悪化（後書き）

11月初の投稿です（ ）

読んでくださいますありがとうございます！！

いかがでしたか？ 病室に蘭が訪れ少し進行しましたでしょうか？

次は一気に日がとびすm（――）m多分コナンが退院するでしょ

う！でなきゃ前に進めないのです。すみません…

### 第三十五話　一步前進

二ヶ月後

朝からコナンはベッドの周りの固唾けを始めた。一ヶ月半前から足のリハビリをやっていた為、少しぎこちなさが残るが歩けるようにはなっていた。

「あら、固唾け中？ 無茶しないでよね？」

固唾けに参加するため灰原が病室に入ってきた。

「此だけでどう無茶するんだよ」

クスクス笑う灰原に少しムスっとした顔で言い返した。

「あら、貴方なら些細な事でも無茶するじゃない？」

まだ笑う灰原にハアとため息を漏らすコナンを無視して灰原は固唾けを開始した。

「貴方……小説有りすぎよ」

「良いじゃねえか。此がなきゃ、退屈すぎてまじ死にそうだったぜ」

「あら、そう」

灰原は興味なしに答えた。

二人は黙々と固唾けをした。

「此で全部ね」

「みたいだな」

荷物の殆んどが小説に呆れながら灰原は博士の車に荷物を積んだ。  
病院の先生達が笑顔で出迎えて花束などを渡してくれた。

「おめでとう。コナン君。退院しても無茶は駄目だよ」

次々に祝いの言葉を貰うコナンは照れながら

「ありがとうございます」

と言い返し、車に乗り込んだ。

「退院ってこんな大袈裟に祝うか！？普通」

「貴方がまれなのよ」

「まれってなんだよ」

「だから子供が彼処まで普通怪我しないわよ」

「ハハハ……それもそうだな」

乾いた笑いをするコナンに灰原は真剣な眼差しでコナンを見た。

「ねえ、工藤君？」

「な、なんだよ。改まって」

笑っていた顔が一気に真面目な顔になった。

「帰ったらすぐにでも、血液とるから覚悟しといてね」

ふふつと笑う灰原にコナンはゾクつと身体を震わせた。

「オメーの発言こえーよ」

「あら、工藤君にも怖いものあるのね」

相変わらずシニカルな笑いを見せコナンを見た。

「ああ。オメーの脅しは犯人に脅されるよりこえーよ」

「二リットル分のベツトボトルに貴方の血液注ぎ込むわよ？」

怒った表情を見せる灰原と違ってコナンは

「すみません」と謝る表情を見せた。

（やっぱり逆らえねえなこいつには……）

心の中でため息をつくコナンであった。

「博士の家」

「さあて、工藤君？ たつぷり血液採らせて頂くわよ？」

「は、はい……」

素直に返事をするしかないコナンは車の中での話しを後悔した。

そのまま、荷物は博士に任せて二人は地下へと向かった。

「んで？ 本当に二リットルもとらねえよな？」

結果はわかっているが顔を引きずりながら灰原を見た。

「安心して、そんなに採らないから。そんなに採ったら私殺人者になっちゃダメ」

灰原の言葉にコナンは胸を撫で下ろした。

「あ、そうそう。明日あの子達が退院パーティーを博士の家でするみたいよ」

「ハハハ……好きだねえあいつら……」

「良いじゃない。あの子建ちにしたら二・三ヶ月はあつてなかったんだら」

「そついや、あれからそんなに経つのか……」

灰原は作業をしながら、コナンは椅子に座って話した。

「手伝う事あるか？」

「あら、薬品知識に欠ける探偵さんに、手伝わされたら早死にする薬が出来てしまうわ」

「灰原おまえな……」

呆れた顔を見せる灰原にコナン少し怒った顔を見せた。

「それに、貴方はもう悩まなくていい。今まで、組織だの、正体がばれるだの、彼女を泣かせまいと悩んだりしてた貴方にこれ以上悩ませたくない。苦労させたくない。これは私の償いの一つ。誰にも手伝わせない。例え博士がいてもね。貴方の役割は血液を採集するだけ……」

灰原の言葉に少し驚くものの、直ぐにいつもの自信満々で無邪気な顔戻った。

「そつか。おまえ、そこまで考えてくれてたんだ。ありがとうな。でも、俺を楽しさせてくれるかわりに一つ条件がある」

「え？」

注射の準備をしていた灰原の手が一瞬止まりコナンを見た。

「睡眠はしっかりとれ。おまえ、ずっと睡眠不足だろ？ どんなに博学な医者でも睡眠とらねえと、手術ミスを起こしかねない。それ

と、一緒だよ」

灰原は、止まっていた手を動かしながら答えた。

「そうね……最近あまり薬が進展しなかったから夜中も試行錯誤だったから三時間程度しか寝てなかったわ」

「今日から絶対六時間はとれよ。それでも、少なえくらいだ」

「わかったわよ。じゃあ、準備出来たから此処に座ってくれるかしら？」

そっくり、一人分の丸い椅子を指で示した。コナンはソファからそっちに移った。

「腕捲つてこっちに出して？」

言われるがままに、腕を出した。その後、灰原は素早く脈を探し消毒液を塗り、注射針を其処にさした。

「っ……」

コナンの顔が歪みそれと同時に赤い血がドンドン注射器の中へと吸われていく。

「はい、終わったわ」

少しの目眩、少し前まで毎日のように咳き込んでいたせいか、病院暮らしが長かった為身体的に体力が付ききっていないのか、身体がだるく茫然となる。其を見た灰原は心配しつつも次の指示を出した。

「大事をとって、今日はここにいなさい」

「あ、ああ」

そのままふらつくコナンを支えながらソファに寝かせた。疲れていたのかコナンはすぐ寝入ってしまった。

「これで一歩前進、貴方の役割も終わり、後は私次第だね。絶対治すから」

眠るコナンの手を両手で握り願う体制で寂しく話しかけた。

その後、灰原は言われた通り、午前一時に眠りに着いた。明日からまた薬の研究が前進するようお願いながら。

### 第三十五話　一步前進（後書き）

読んでくれてありがとうございます

前の後書きで書いたように月日がとても飛びました。ずっと病院にいたら前に進みませんから退院させました！！

また灰原とコナンとの雑談！灰原が勝手しました（笑）

人間二リットル分血、採られたらどうなるのでしょうか……（＾|＾；）

人間は、三分の一血をぬかれたら危険な状態で死に至るらしいです

……

すみません暗い話になってしまいました……m（|—|）m

次は、少年探偵団が出てきます！退院祝いのパーティーです！

ではありがとうございました。

## 第三十六話　パーティー

　次の日

朝七時にコナンが目覚めた。見渡すと普通の部屋で地下室で無いことに気付いた。それにベッドの上で寝かされていた。

「あれ、俺確か地下にいた……よな？」

少し考えながら、リビングへと向かった。

「おお！　新一君。大丈夫か？」

元気よくコナンに向かって来る博士に、少し驚きほんの少し後退りをした。

「ああ、大丈夫だ」

コナンは苦笑しながら答えた。

「それじゃあみんなで朝食にするかのう」博士はコナンを椅子に座らせて挨拶を済ませ食べ始めた。

三人は何も話す事なく朝食を食べ終えた。

「工藤君。昼ならパーティーするから、貴方昼まで出ていってこない？」

「え？　なんでだよ」

コナンはキョトンとした顔で灰原を見た。

「貴方子供の夢壊す気？　大体検討つくでしょ？　昼からパーティーするってことは――」

灰原が最後まで言う前にコナンはフツと笑い玄関に向かった。

「わあったよ。おっちゃん家<sup>ち</sup>に帰るよ！」  
そう言い門を出ていった。

（それにしても、久々だな。ここ歩くのも）  
考えているうちにあつという間に家へと着いた。

「ただいま」

カチャッとドアを開けると、蘭が泣いていた。

「ど、どうしたの？ 蘭姉ちゃん？」

必死に涙を拭う蘭に心配そうに話し掛けた。

「わからかい……でも、コナン君の声聞くと急に……急に涙が止まらない……嬉しいの……」

途切れ途切れに伝わる蘭からの気持ちにコナンの心が締め付けられた。

「ごめんね。蘭姉ちゃんにいっぱい心配掛けて……でも、もう大丈夫だから」

未だすすり泣きだけが聞こえる事務所で、コナンの気持ちに決意が強まった。“絶対に死なずに帰る”と言う決意を心に刻んだ。

（午後一時）

事務所に電話が鳴った。その電話に蘭が出た。内容は今すぐ博士の家に来てつと言う歩美からのもの。それをコナンに伝えるとコナンは“わかった”と答え付け加える用に“蘭姉ちゃんも来る”と尋ねた。

「いいよ。今日は一人になりたいから。ほらいつておいで皆待ってるよ」

「うん。じゃあいつて来るね」

子供っぽい笑顔で勢いよく玄関を飛び出した。しかし、蘭が少し寂しい表情を見せたのをコナンは見逃さなかった。

「俺達に幸せなんてくるのだろうか……」

事務所をでて蘭の顔を思い浮かべながらボソリと吐いた。

「出来るなら……幸せにしてやらねえとな！ さっき誓ったんだ。最後まで諦めねえ絶対にな！」

拳に力を入れ博士の家にと向かった。

く博士邸玄関く

「あ、コナン君！ 早く早く！！」

博士に近づいた時、歩美の嬉しそうな声が響いた。その声に小走りでコナンは近寄った。

「遅いよ。待ちくたびれちゃった！」

「悪い悪い」

コナンは、ばつの悪そうな顔を浮かべながら謝った。

「来てくれたから許してあげる！」

歩美は満面の笑みを浮かべた。

その後、二人でリビングへと向かった。

リビングへと入った瞬間クラッカーの音が鳴り響いた。

そのクラッカーに驚いた様子を見せたコナン。まわりから、“退院おめでとう”の音が響いた。博士のリビングは華やかに飾りが飾られており、テーブルにはとても豪華な昼御飯やお菓子が置いてあった。

「これ、哀ちゃんと私が生地を作って、皆で飾りつけしたの！」

其処には大きなフルーツが沢山のったデコレーションケーキが置いてあった。

「良くできてるじゃねえか」

コナンは感心しながら満面の笑みを見せた。

「だろ！俺達が飾ったんだぜ！」

「元気君はほとんど食べてたじゃないですか！」

自信満々にいっばった元太に光彦が突っ込みをいれリビングに笑い声が響いた。

「ほれ、冷めんうちに昼御飯すまさんと、美味しくなくなるぞ」

博士の言葉にみんな一斉に返事をした。

「良かったわね。こんな盛大に祝って貰えて」

灰原はコナンに小声でフッと笑い歩美の隣に座った。

（ハハハ……どうみても大袈裟だって）

心の中で苦笑しつつも席に座った。

その後、心配していた事、学校での出来事、仮面ヤイバーの話などど皆は盛り上がり忽ち夕方になった。

「じゃあね！コナン君また学校でね」

「明日来てくださいよ！」

「待ってるぞー！」

三人は口々に別れの挨拶をした。

コナンは一言“おう！ またな”といい三人と別れた。

「結構美味しかったぜケーキ！」

コナンは灰原にそう伝え、事務所へと向かった。

（当たり前じゃない……貴方の事思って一生懸命つくったもの……）

灰原はリビングへと入った。

ガランとしたリビングがとても、寂しく感じた。

（いつも見るリビングがこんなに寂しく感じるなんて……また、賑やかになるわよね）

灰原は少しだけ笑い地下へと足を進めた。

### 第三十六話「パーティー」(後書き)

読んで下さいありがとうございます。

第にパーティーと書きながら凄い短いパーティーでしたね(苦笑)  
でも、三人出てくると和みます。

因みに( )

朝コナンが起きる前まで少しパーティー用の料理の本とにらめっこ  
していた哀ちゃんがいたとかなんとか(笑)

では、次回またコナン灰原、蘭話しかな(多分)

### 第三十七話　三人……・二人の口から

（朝七時）

「また、いつものような日が始まるのか」

いつもの部屋でいつもの躰。コナンは一つアクビをして居間に行った。

「あ、おはよう！コナン君」

「おはよう蘭姉ちゃん！」

いつもの挨拶をし、いつもの用に蘭は小五郎を起こしに行った。

（いろんな事あったけど、この生活も後少しなんだよな）

少しだけ見渡して自分の席につこうとした。

「ケホッ……ゴホゴホゴホ」

コナン自身驚いた。ただ普通に言葉を交わしただけの朝に咳が止まらない。そのまましゃがむ体制で咳き込んだ。

（悪化してるよな……俺情けねえ……）

異変に気付いた蘭が居間に入ってきた。

「コ、コナン君？　大丈夫？　ねえちよつと！！」

蘭はコナンを抱え込んだ。

「だ、大丈夫……だよ」

今にも消えてしまいそうな声を出した。

「何が大丈夫なのよ！　こんなに咳き込んでそれで大丈夫って言えないわよ」

蘭の瞳から涙が溢れ出した。そんな光景を薄れていく意識の中で見た。

「泣くな……蘭……」

コナンが気を失う前に蘭にいった言葉コナン自身は心中で言った言葉だったが口に出していた。コナンの言葉に幾分驚いた蘭だったが我に帰りコナンをみた。既にコナンの意識は其処になく、蘭の胸の中で固く目を閉じていた。

「ねえコナン君？　コナン君！？」

呼んでも反応がかえって来ない。蘭はパニックになっていた。蘭の声を聞いて寝ぼけていた小五郎が慌てて、蘭に近寄った。

「お、おい！　どうしたんだよ！」

「コ、コナン君急に咳き込んでそれで……それでそのまま倒れたの……」

涙で言葉が途切れ途切れになりながらも小五郎に話した。

「わ、わかった。落ち着け蘭。先にベッドに寝かせろ」

「朝七時四十分」

「コナンくん！遅いから迎えに来ましたよ！」

その声が三階に居る蘭に聞こえた。咄嗟に“彼処に哀ちゃんが居る”と思い彼女を呼んだ。灰原は蘭の様子にいつもとちがう事を感じ、三人を先に行かせ三階へと急いだ。

「あ、哀ちゃん。どうしたらいいの？ コナン君が……」

蘭の涙は止まっていたがまだそわそわした感じに灰原に話しかけた。

「大丈夫だから。ただの発作よ」

灰原は素っ気なく答えた。灰原にも少しの動揺はあったものの、蘭には気付かれないようにした。あれから何時間たったのかは分からないがコナンの呼吸は落ち着いていた。

「ねえ？ 一つ聞いていい？」

「何？」

蘭はコナンの額にある、タオルを取り替えなら質問をした。

「コナン君は……病気なの……？」

その言葉に灰原の胸酷く締め付けられた。下を向いたまま拳にありつただけの力をいれ握った。

その時、コナンの呻き声がして、二人は一気にコナンを見た。コナンはソツと目を開けた。

「コナン君！ 大丈夫！？」

周りを見渡すコナンに蘭は少し大きめの声をだした。

「俺……どうしてここに？」

「居間で倒れたのよ。覚えてないの？」

「え？ あ……そつか……悪い」

少し咳の残る状態でコナンが起き上がろうとすると、蘭にひき止められそのまま寝た状態になった。

「ねえ？ 哀ちゃんさっきの質問に答えて？」

蘭の問いにコナンの目が丸くなった。

「蘭姉ちゃん？ 質問ってなに……？」

コナンの胸で嫌な予感がしていた。しかしその予感は灰原を見てわかった。

「コナン君は病気なのって言う質問」

“合って欲しくない” と言う顔付きでコナンを見た。

（やっぱり。あんな姿見たら誰でも思うよな）

コナンは心で呟いた。その複雑な顔を見た蘭は灰原の方に向き直した。今にも泣きそうな顔で灰原を見た。

（これは隠せねえな……）

コナンは諦め気味に口を開いた。

「あのね……蘭姉ちゃん？」

その声を聞いて、疑問が確証になっていく気がして、コナンの方に向けなかった。コナンもたま、布団を握り締めながら布団を睨み付けた。

「病気じゃないんだ。僕の体はー」

「えー!!」

次の言葉を言おうとしたら蘭がコナンの方に勢いよく、向き直った。その顔はさつきと違い少し明るくなっていた。そんな顔を見せる蘭に思わずコナンは言うのを躊躇った。

（次の言葉をいったら蘭はどうなる？ 後三年っていったら蘭は、おまえは受け入れられるのか？）

布団を握る手に力が入る。どう話せば良いのかわからない。焦りが見え始めたコナンに代わって灰原が話始めた。

「江戸川君は……後、二年半しか生きられない体なの。犯人に薬を投与されたの」  
ストレートな言葉に蘭は困惑した。

「おい!! 灰原！何もそこまで言わなくてもいいだろ!？」

コナンの怒鳴り声と共に再発。それでも、灰原を食い入るように見る。

「躊躇ってた貴方の代わりに言っただけだよ？ 感謝しなさいよ！」

「テ、テメー！」

「隠しきれないじゃない！」

「それでも……少しでも傷付けない方法はあった……だろ」

「わかってるわよ。でも……でも、そんな事したら、余計に傷付けるだけよ。それに貴方はもう黙ってて、死んでも知らないわよ！」

有無を言わせぬ口調で怒鳴りコナンを静めた後、灰原は蘭の方に向いた。

「でもね、蘭さん。聞いて？ 今解毒剤を作ってるの。助かるかはわからないでも、完成させて、江戸川君に投与するから……まだ助かる可能性はあるの」

「ほ、ほんと？ 哀ちゃん」

「ええ……」

少しだけ蘭に笑顔が戻った。

「それより、コナン君！ 大丈夫！？」

自業自得と言うのだろうか、怒鳴っていたコナンは黙った後もずっと咳をしていた。蘭は慌てて、背中をさすった。

「ごめんね……心配ばかりかけて……」

「謝らなくていいよ。心配だろうが迷惑だろうがかけてくれたらいい。隠すよりずっといい。コナン君はもう家族の一員なんだから！

迷惑なんておもわないで。私の側からいなくなるしないで！」

「ありがとう」

その後、一時間くらいで咳は治まった。

「じゃあ私かえるから」

灰原は毛利家をでていった。

### 第三十七話　三人……・二人の口から（後書き）

お待たせしました。読んで下さい有り難うございます。

ついに寿命のこと蘭にいつちやいました（――）

蘭ショック！でも大丈夫！哀ちゃんがなんとかしてくれる！

悪化してるよコナン……（　させてるのは私。ごめんなさい）

日常生活にもどれるの！？

だ、大丈夫です……落ち着いたら学校行かせます。

今はまだソツとさせてあげましょう！

三人複雑な心境。死ぬなよ！コナン！死んだら今の二人立ち直れないぞ！

それにハッピーにするんだから！

よし！！頑張ります！

次、ヤッパリ三人……かな？

### 第三十八話　下校での出来事

　　一週間後

朝・登校時間

「貴方もう、大丈夫なの？」

いつもの三人から少し離れて灰原は話かけた。

「え？　ああ。大丈夫だ。それにこれ以上学校休めねえよ」

「そう。」

「哀ちゃん！　コナン君！　早く遅刻するよ」

「ええ（おう）」

二人は話を辞め、三人がいるとこまで小走りで行った。

　　下校

「もう、風邪大丈夫なのかよ？」

不意に元太が振り向きコナンに話かけた。

「ああ、もう何ともねえよ」

「でも、今日昼頃咳してたよ？」

歩美が心配そうな顔でコナンに話かけた。

「ただ噎せたただだよ」

「そつか！　じゃあ体気をつけてね」

「おう」

三人と別れ灰原と二人になり、コナンはサッカーボールを操りながら歩いて行く。

「ねえ？」

「あん？」

コナンは操っていたボールを辞め手に持ち灰原を見た。

「貴方、噎せたわけじゃないんでしょ？」

確認するかのようにコナンを見た。

「ああ」

コナンは正直に答えた。灰原に嘘は通用しないのは明白だったからだ。

「大丈夫だったの？」

「ああ、なんとかな」

「今日は悪くならなかったから良いものの、今度からは、朝本当に

調子悪かったら学校休むのよ?」

「ヘイヘイ……親みたいだな……」

コナンは小さく呟いた。その言葉は微かに灰原に届いたようでコナンを睨んだ。

「何か言った?」

「いえ……なにも」

その後無言で道を歩いた。

「キヤーーーーー!! 引ったくりよ!!!!」

少し離れた所で、女性の悲鳴が上がった。

コナンは探偵モードが入り透かさず引ったくりした人を追いかけて行く。

「ちよっ! 工藤君!! ダメ!!」

そんな灰原の言葉すらコナンの耳には聞こえていなかった。

（くそ! どこいった!?!）

荒い息を静めながら必死に探す。

（いた!）

コナンは自分の限界をおし殺してまで尚も走った。

「ハア……ハア……ねえ……おじさん？」

コナンは息も絶え絶えに話かけた。

「なんだい？　ボウヤ」

「返してくれない……？　引ったくったもの」

肩を上下に揺らしながら一対一に向き合った。

「な、なんの話しだい？」

「惚けんな。さっき女性の鞆引ったくっただろ？　鞆はねえみたい  
だけど、そのコートの中に財布はいつてんだろ？」

「何か見ていたような口振りだね？」

「ああ……ケホ……ゴホゴホ」

「フン、バレてんなら死んでもらおうか！！」

（やべ……こんな時に咳かよ……）

コナンはサッカーボールを蹴るつもりだったが力なく、地面に膝をついた。引ったくり犯はコナンに向かって歩む。右手には、ナイフを持って。

直ぐにコナンの目の前まで来た。

「偉い口を聞いたわりには、弱いな」

男はコナンの首を掴み、壁に押し付けた。

「うう……！」

「馬鹿が！追っかけてこなけりやもつと長生き出来たのによ……！」

コナンは抵抗するものの何の意味も無く、ただ今以上の力で壁に押し付けられたまま、男はナイフを振り上げた。

### 第三十八話 下校での出来事 (後書き)

読んでくれてありがとうございます

ハハハ (^ | ^ ; ) ……ごめんなさい。またコナンを傷つけてます  
ね……

次はこの続きです。

### 第三十九話、高熱、（前書き）

三連休でしたので今日も投稿します。

### 第三十九話　高熱

（今だ！）

そう思った瞬間、コナンは男の急所を蹴り上げる。降り下ろしたナイフは腕を掠めただけだった。男の怒りは頂点を達しコナンを投げ飛ばした。コナンの体は地面に叩きつけられた。

「うっ」

男はよろけながらもう一度コナンに近づき、首を締め付ける。

「目障りだ！　早く死ねよ！」

それと同時に少女の声と共に警察が現れた。

「江戸川君！」

その声は灰原だった。灰原は目暮警部を始め数人の警官を連れてきた。

「直ちに武器を捨てて子供を離さない！」

目暮警部は説得を始めた。しかし、男はコナンの首にナイフを近づけ立ち上がり笑った。

「フンッこのガキがどうなってもいいのか？　サツさと道を開けて頂こうか？」

挑発するような目で目暮警部を見た。

コナンはその間も咳が止まらず先ほどの事もあり、意識が朦朧としていた。

しかしコナンは力をふりしぼった。

「ガキ……扱いしたお返し……だ……お前は……おわりだよ」

「何!？」

その言葉と共にコナンは時計型麻醉銃を男の額に差し込んだ。

男はコナンを覆い被さるように、たおれこんだ。その光景を目暮警部達は目を丸くして驚いていた。ただ一人灰原はうつすら笑っていたが直ぐコナンに近づき話かけた。が、コナンの意識は既になかった。目だった外傷は腕のかすり傷だけだと思い少しだけホッとしたがコナンの体に触れ非常に危険な状態だとわかった。その体は、とても熱かった。

「バカ、急に走って追いかけるからよ! 今の貴方じゃこんな事出来ない事わかってるじゃない!!」

気を失っているコナンにきつく睨む。

「なんで後少しなのに、貴方はいつも、こんな目に会うの? 後一週間か二週間で解毒剤つくれるのよ? なんにどうして? ねえ!」  
グッタリしたコナンに周りに聞こえないように小声で話した。

「あの? すみません」

後ろから高木刑事が話かけた。

「コナン君どうしたんですか？」

「え？ あ……ちょっと、犯人が覆い被さった時に頭うつたらしく、気を失ってるだけです」

「え？ じゃあ危険じゃないですか！」

「いえ、あと三十分ほど目をさましますから、それに博士がもうすぐきます」

「ホントに大丈夫なんだね？」

「はい」

「目が覚めたら、『警察まで来て下さい』って伝えといってくれるかな」

「分かりました」

高木刑事は、心配そうな顔を見せながら、現場へと走った。

（三十分……目が覚めるわけじゃないじゃない……）

額に手を当てると、体温計が無くて、三十九度は越えてるような感じだった。高熱は初めてだった。今まで咳で治まっていたのだから。しかし今回は急な運動と男とのやり合いの為、最も危険な状態にさらされていた。

――止められない探偵のスイッチ、まるで本能のように走ってい

く。

わかってた、そんな日がいつか来ること、それを止めるのが仕事の  
一つだった。

しかし止められなかった。――

灰原の心にその言葉がグルグル回った。

体が治るまでは怪我などおわしたくなかった。どんなに小さな怪我  
でも負わしたくなかったのに、今のコナンは怪我もしており、おま  
けに危険状態まで陥っている。

博士の家に車でもうスピードで行き、コナンをベッドに寝かせた。  
うでの治療を施しその後直ぐに体温計で体温を計った。

四十・二度

体温計を見て博士はパニックになっている。

「博士！落ちて着いて、水とタオルをもってきて」

博士はドタバタしながらも、水とタオルをもってきた。

そのタオルを水につけ、額に当てた。一通りの作業を終え蘭に連絡  
をいれた。隠して起きたい気持ちもあったが、二・三日で治まらな  
いような気がして、少し事情をいった蘭に連絡をいれた。

蘭は息を切らしながら、博士の家へと入っていった。

「哀ちゃん！」

そのまま博士に誘導されて、コナンが寝ているであろう寝室に入った。その光景に蘭は佇むしか無かった。時々起こす呻き声に咳、最も最悪な光景だった。

「ごめんなさい。蘭さん……私何も出来なかった。事件が起きたとき、無理矢理にでも止めておけば、こんな事にはならなかった……本当にごめんなさい」

深々と蘭にお辞儀をした。

「哀ちゃんは謝らなくていいよ。だって、ここまで運んで、治療や看病してくれてるんだから逆に感謝しなきゃ」

「でも!!」

「どんな事件かしらないけど、勝手に首突っ込んだのは、コナン君ちゃんと哀ちゃんがコナン君を止めたのなら哀ちゃんは悪くない」

蘭の言葉は灰原の心を中和していくかのように、穏やかになった。

「ほら、看病しよ？ 目が覚めたら、『事件に首突っ込むな』って言うってあげなきゃ。ね？」

灰原は小さく頷いた。

しかし、コナンの容態は一向に危険との隣合わせだった。

### 第三十九話〈高熱〉（後書き）

ありがとうございます!!

『今日も』って書きながら今日、もう終わりですね（苦笑）

なにはともあれコナンは無事でした。危険状態ですが……

後は

看病・回復　薬投与　アポトキシン解毒剤投与　ハッピーエンド

みたいな流れかな（多分）

その前にコナンが回復しなきゃ意味ないよね……

がんばります

今日はホントにありがとうございます

## 第四十話　突然の告白

（三日後）

コナンの熱は下がったものの、まだ目は覚めずに時間だけが刻々と過ぎていった。蘭は毎日の様に博士の家に立ち寄り看病する日が続いた。灰原は灰原で、学校を休んでコナンの看病と研究する日が続いた。

「あーいちゃん！連絡帳もってきたよ！コナン君大丈夫？」

歩美達は毎日学校が終わると博士の家へ寄り連絡帳を届けてくれた。

「ええ、ただの風邪よ。ぶり返したただけだから」

「そつか。でも三日も学校きてないんだよ？　風邪以外に何かあるの？　哀ちゃんは何か知ってるの？　何か隠してない？」

寂しそうにする歩美。灰原もまた歩美に隠す様に寂しい顔をする。

（言えるわけじゃない。彼の容態の事）

「何も知らないわ。ただ『風邪』って事しか。でも大丈夫よ。私が治すから。」

もう一度自分に言い聞かせた。

「絶対だよ！絶対絶対治してよ！」

「ええ、わかったわ」

「じゃあね！」

「またな」

「お大事に」

三人は博士の家から出ていき、灰原はコナンのいる部屋へと行った。

「あいつらに、心配かけちゃったな……」

少し苦しそうで、でも確りしたコナンの声が聞こえた。

「工藤……君？」

涙が出そうな感情を抑え、恐る恐るコナンを見る。間違いなくコナンが起きてる事を確認した。

「何が心配かけたよ！　そう思ってるなら、初めっから無茶しないでよ！」

怒りながらも、安心した顔になる。危険状態からの脱出。まだ体温をはかると、三十八度を越えていたが、灰原は胸を撫で下ろした。

「哀ちゃん！？　コナン君は！？」

扉を慌てて開け入ってきたのは蘭だった。コナンは目を真ん丸にし

て、蘭を見た。

「良かった」

蘭はその場にへニヤへニヤっと座り込んだ。その瞳から大粒の涙が流れた。

「江戸川君？　少しは周りの事考えて行動しなさい。私……リビングにいるから」

灰原はそう言い残し、リビングに姿を消した。

「良かった。本当に良かった。このまま、意識もどらないかと思った。コナン君三日も眠り続けてたから。熱出すの初めてって哀ちゃんから言われてたから……」

未だに涙す蘭。

「ごめんなさい。」

その言葉しか今のコナンには言えなかった。

（翌日）

朝から蘭が粥を作ってコナンの居る部屋へと入ってきた。

「前哀ちゃんも食べたお粥！　これ食べて、元気になって早く探偵事務所にきてね！　じゃあ学校行ってくるね」

「あ、ありがとう」

コナンは照れながら返事をし、ゆっくりベッドから起き上がった。  
「照れてたら余計熱上がるわよ」

ドキツとして、扉の方を見ると、灰原が腕をくんで立っていた。

「食べる前に体温、計ってくれない？」

へいへいっと言った感じの顔をしながら、ベッドの横においてある  
体温計で体温を計った。

「三十八・三度。まだまだ絶対安静ね……以外と貴方回復力ないの  
ねそれともこの三度は照れて熱くなつた温度かしら？」

「お前に言われたかねえよ。それに照れて熱上がったもねえよ」

「まあ、反抗できる様子からみて、大丈夫そうね。私地下にいるか  
ら、用があつても、そんな体で、ノコノコ来ないでね。時々くるか  
ら。お茶其処においてあるから」

全てをいい終えコナン有無も聞かずにでていった。フツとお茶の方  
をみると推理小説の本も二冊ほど置いてあり一言つつ“頑張つて”  
と“推理バカ”と書いてあつた紙が置いてった。字から見ると、  
頑張つては蘭の字で、もう一方は灰原の字だった。フツと笑いお粥  
に手を伸ばして一口、二口と食べた。

（流石蘭だ）

美味であるお粥を黙々と食べ始めた。その後眠くもない為置いてあ  
った推理小説を読むことにした。

気付くと、先ほどまであった土鍋などの食器がない事に気付いた。その代わり、お握りが二個あった。

「あいつ……何時の間に」

コナンは時計を見ると昼過ぎだった。

「ハハハ……俺、没頭してたのかよ」

「あら、読み終わったのね？」

その声の先を見ると灰原が無表情で立っていた。

「うわ！ 居たのかよ」

思いつきり驚いたコナンに灰原はきつくにらんで、スタスタと歩いた。

「何が『うわ』よ。声掛けるまで気付かないなんて、探偵失格よ」  
「オメーの気配何時になっても読み取れねーんだよ」

「まあいいわ。 今日彼ら達来ると思うけど、どうする？」

「どうするって、入れりゃあいいだろ？」

「入れりゃあって貴方まだ熱あるのよ？ 完全には治ってないのよ」  
「わあってるよ。 何もしなきゃいいんだろ！ ただ話すだけだよ」

絶えず睨むのを辞めずに部屋を出ていった。

く夕方く

三人がコナンの部屋に入った。

「十分だよ」

そう伝え灰原は出ていった。出ていたのを確認した歩美が急に声を出した。

「ねえ！ コナン君？ 良かったね……」

歩美はコナンを見るなり、泣き出した。コナンは驚いて慰めようとした。

「ねえ……？ コナン君は誰……なの？」

「え……？」

突然の質問にコナンは戸惑った。

「コナン君。三ヶ月間何処に行ってたの？ 何処で大怪我したの？  
なんで、そんなに病弱になったの？」

一気に話す歩美。涙を流していたが、その目はコナンを見ていた。  
コナンは歩美から目をそらした。

「僕達……僕達なりに考えたんです。僕達の推理聞いて頂けませんか？」

「あ、ああ」

そうコナンが承諾するなり光彦はコナンを少し睨む感じで話し始めた。

「コナン君はあの潰れた工場と何か関係あるんですよね？ 新聞に載ってました。『小学生救出』ってあれコナン君ですよ！ コナン君は……コナン君はあの薬会社と何か接点があるんじゃないですか？ その前にコナン君は普通の小学生じゃないてますよね？ それに灰原さんも」

「おいおい。なんでそんな話しになってんだよ」

熱のある為かムカムカ

する心を抑えた。それでもまだ苛立ちは残る。コナン自身もう隠せないことはわかっていた。でも、“その話し”はまだ先でしてほしかったと心で思った。

「私どんなコナンでもいい。コナン君のことが好き。でも今のコナン君何か隠してる」

突然告白され驚いているのに、“何か隠してる”って言われたらコナンも流石に“いや”とは言えなかった。歩美から目をそらしたまま黙っている。それでもまだ真実を言うか言わないかコナンは悩み続けた。コナンは三人から徐々に攻められていく。

「コナン君だけじゃないです。灰原さんもです。二人とも年誤魔化してませんか？そんな馬鹿な話し有るわけないかも知れませんが、

でもコナン君や灰原さんの言動・推理力はただの小学生じゃないて  
ますよ。明らかに何か隠してます」

言い切った直後灰原の声が聞こえた。

「貴方達何か忘れてない？ 江戸川君熱あるのよ？ 今日はそんな  
話するために来たの？ そんな話し何時でもできるじゃない？！  
貴方帰って！早く！」

だんだんきつくなる口調であつたが、最終的に怒鳴る形で三人を追  
い返し、其のままコナン居る部屋に向かった。

「貴方なに考えてるの！？ 何必死に堪えてるのよ！」

灰原は素早く体温を計った。その体温は先ほどより、三度近く上が  
っていた。

「ごめんな……灰原」

そう言うや否やコナンは眠りに就いた。正確には灰原が麻酔針を打  
ち付けたのだ。

（バカ……これじゃあの時と一緒にじゃない）

灰原は、コナンが誘拐され大怪我を負った時も探偵団に向かって怒  
鳴っていた日の事を思い出した。その後、コナンに毛布をかけて部  
屋を出た。

#### 第四十話ゝ突然の告白ゝ（後書き）

こんにちは！！

先ほど灰原さんが思っていた事は第九話を参考に！！

コナン君目覚めました。元気ではありませんが、大丈夫危険状態は脱出しました！

次回一週間ほどとびますm（――）m

本日は有難う御座います

## 第四十一話『仲間』

あの事件の事を聞きにコナンが目覚めてから二日後に高木刑事と佐藤刑事が博士の家に訪れあの日、何があったのかを話した。

（一週間後）

教室

「薬出来たわよ」

ひっそりと話して来た内容にコナンの目が点になった。

「まじで？」

「ええ……でも」

「良かったじゃねえか！後は、俺次第か。体調がいい日に博士の家に行くよ」

点だった目はなくなり満面の笑みを浮かべコナンは灰原を見た。

「でも、もし効き目なかったら……」

「大丈夫。お前が作ったんだ。お前を信じるよ」

話しが終わえたのと同時にコナンの席に歩美達がやってきた。まるで二人の会話が終わるのを待っていたかのように……。

「元気になって良かった。ねえ放課後米花公園に行こ？」

真面目な顔をして歩美がコナンを誘った。

「え？ ああ」

コナンは曖昧な返事をかえした。

「哀ちゃんもね」

「ええ」

二人に告げたあと授業開始のチャイムがなった。

（米花公園）

五人は二つあるベンチに腰をおろした。少しの沈黙……初めに口を開けたのは光彦だった。

「改めて、言います。コナン君と灰原さんは何者なんですか？ あの日以来大怪我をしたのですか？ 答えてください」

「……わあったよ」

コナンも灰原も決意を決めた。

「結論から行くと俺は『江戸川コナン』じゃねえ『工藤新一』だ。そして灰原は『灰原哀』じゃなくて『宮野志保』だ」

三人は啞然とした。思いもよらなかったのだ。あの日本の救世主といわれてた工藤新一は今日の前で江戸川コナンとして半年以上つきあっていた。

「歩美ちゃん？」

「え？」

突然声を掛けられた歩美は少し放心状態になった。コナンはそのまま口を開いた。

「俺が工藤新一だと知って、歩美ちゃんはそのまま好きな気持ちでいれるか？」

「……うん」

少しだけ時間を開け弱い返事をかえした。

「私姿が変わってしまっても、コナン君の事好き！　だって中身はコナン君だもん！　十歳離れても結婚はできるもん！」

歩美の目はキラキラ輝いていた。そんなストレートな言葉を言うからコナンの顔がほんわり赤くなる。その告白ムードに光彦と元太は頭から煙が目から炎が出ていた。

「コーナーン（君！）！」

「抜け駆けは許しませんよ！」

「ちょ、まてよ！　お前ら！　何のため此処にきたんだよ」

コナンの言葉を聞き光彦は冷静になり元太を止めた。

「そうでした。この話しは後にしますよ。元太君」

「お、おう」

三人はまたベンチに座った。

「んで、俺たちの事を知ったお前らはこれからどうしたい？」

「え……それは、これからもずっと少年探偵団の仲間です。高校生も少年ですから！」

「そうだせ！年が違ったって、俺たち仲間だぜ！その代わり、高校生にもどつたら鰻重おごってもらうぜ！」

「おい！ 高校生が、んな金持ってねえよ！でも、ありがとうな」

「はい（おう）」

「良かった。何かのスパイじゃなくて」

歩美の言葉で皆は笑いあった。寂しくなるかもしれないけれど今を確り楽しもうと三人は誓った。

「でもなんで小さくなったんですか？」

疑問に思っていた事を光彦はストレートに問うた。

「いや……其処は聞かねえでくれないか？」

「じゃあ、何故三ヶ月もいなかったんですか？ 大怪我するほど何

「があつたんですか？」

「それは『工藤新一』を救う為、かな」

「救うため？」

三人はキョトンとした顔でコナンをみた。三人の声は見事にそろった。

「ああ、俺自身を救う為にしなきゃいけないことがあつたんだ。危険だとわかっていても、救いたかつたんだ。」

「それで、救えたの？」

歩美が心配そうにコナンをみた。コナンは自信満々な顔を見せた。

「ああ、だから今、こうして生きてお前らに話せる」

「そつか。じゃあ残りの時間遊ぼうぜ！」

「私かくれんぼしたい」

歩美が嬉しそうにはしゃいでた。

「これで……良かつんだよな」

コナンが小声で灰原に話しかけた。

「何言ってるのよ。今さら。いいんじゃない？ 転校した事にして

も、あの子達には嘘を付きたくない。『仲間』にはもう嘘つきたくないんでしょ？　それがどんな結果になっても」

「ああ、サンキュー灰原！」

歩美に呼ばれ二人は三人の中に入った。

「それはそうと、抜け駆けは許しませんよ」  
光彦はコナンを睨んだ。

「て、まだ覚えてたのかよ」

「忘れませんよ！」

「そうだぜ！」

二人に攻められてコナンがどんどん小さくなる。その時歩美が三人の真ん中に割って入った。

「コナン君をいじめる人私、嫌いになるよ」

そのきつい言葉に、二人は素直に“ごめんなさい”と謝り、かくれんぼを開始した。

〳〵二日後〳〵

「良いわよね？」

「ああ、お前を信じるよ」

いよいよ、薬を投与する事になった。アポトキシン4869の解毒の投与はもう少し、先に延ばす事に二人は決めた。

「じゃあ言葉に甘えて……」

コナンの腕を消毒して、注射を打った。

「……っ」

注射をうち終え其処で、コナンの視界は暗闇へと落ちた。

「後は、目が覚めてから……ね」

コナンをベットに寝かせた。

#### 第四十一話『仲間』（後書き）

ありがとうございます

12月初の投稿!!

薬が投与されました!一歩前進ですね  
後はコナンが目覚めて、学校を転校して解毒を飲む。めっちゃコナンにははつかれますね……

次回、コナン、灰原、蘭（探偵団）かな  
それではありがとうございます!

## 第四十二話　蘭と灰原

「昼過ぎ」

「……う」

小さなうめき声を上げてコナンは目覚めた。体を動かしてみたけど前みたいには麻痺はしていなかった。

（あの時みたいにな、すぐ気を失ったから症状が一緒かと思っていたぜ）

コナンは少し笑ってベットから起き上がった。

「あら、起きたのね」

起きて顔をあげたら、扉にもたれかかっている灰原がいた。

「あれから何時間たった？」

「十時十二分だったから約三時間ね」

「そっか」

時計に目をやると一時五分を少し回っていた。

「多分だけど、一週間なにもなかったら大丈夫だと思うわ」

「サンキューな、灰原」

「喜ぶのはまだ早いわよ。貴方が工藤新一に戻れて、何もなかったら、喜んでくれる!？」

その目は睨んでるような目でなくホツとしたようなやさしい目だった。コナンも強く深く頷いた。

「じゃあもう事務所に帰っていいわよ」

灰原の言葉にコナンは詰まった。その顔は驚いた顔をしていた。

「何驚いてるのよ。ここにいてもしょうがないでしょ?」

「ああ……」

躊躇うコナンに灰原はコナンの背中を押した。コナンはそれとは違う違和感を感じた。

「彼女が待つてるわよ! 私は大丈夫だから……」

コナンを追い出すような形で玄関をしめた。その時扉の向こうで倒れる音がコナンの耳に聞こえた。

コナンはおもいつきドアを開けた。その倒れた音は紛れもなく灰原だった。コナンが感じた違和感は灰原の体調だと確信した。

「無茶すんなって言ったじゃねえか! そこまでやっても俺自身嬉しかねえよ! 自分自身が優先だろ!？」

コナンは灰原を抱えて自室へと運んだ。博士が学会の発表で居ない

事をリビングに置いてあった手紙でした。

「こう言う時に限って居ねえのかよ」

コナンはタオルに水を浸して灰原の額においた。  
熱は三十八・二度だった。

「ごめな。灰原……無理させたの俺の為なんだよな。ただただ一生懸命だったんだよな……俺を助ける為に……自分自身を償う為に。でも、ちつとま休んでいいぜ？ 無理しなくていいからな。もう少し『コナン』でいるからよ」

「……ありがとう……」

コナンの言葉は一部始終灰原に届いていた。コナンはばつの悪そうな顔をして一言あつと答えた。

夕方蘭が博士の家へと訪れた。呼び鈴をならすとコナンが出てきた事に少し驚いた。

「コ、コナン君？ もう大丈夫なの？」

「僕の方は大丈夫。灰原のお陰で、治ったから！」

「そう。『僕の方は』ってまさか哀ちゃん！？」

「ごめんね。蘭ねえちゃん……僕のせいで灰原風邪ひかしたみたい」

コナンは下を向き拳に力を入れた。

「コナン君のせいじゃないよ！　ただホツとしたのよ。コナン君が元気になってくれたから！　ほら、元気だして！　でないと哀ちゃんの元気が戻らないよ！」

下を向いてるコナンに目線を合わせ蘭はニコッと笑った。コナンの手を引っ張り博士の家に入り台所へと向かった。

「な、何かつくるの？」

一緒に連れてこられたところが台所だったので驚いた。

「玉子粥よ。野菜も揃ってるしね。風邪には此が一番！」

コナンにウインクをして支度を始めた。

「あーいちゃん。大丈夫？」

蘭は晩御飯として、お粥を運んで来てくれた。灰原は少し驚いた顔をし小सान返事をかえした。

そのムードを壊さぬようにコナンはリビングへと行った。

「ねえ哀ちゃんってコナン君の事好き？」

突然の言葉に戸惑い顔が赤くなってしまった。

「やっぱり」

「でも……どうして？」

やっとの思いで声を出した。自分がここまで彼が好きだった事に今更ながら気付いたと灰原は思った。

「だって……哀ちゃんコナン君を必死に治そうとしてくれたじゃない」

「そ、それは……」

「今も顔赤いよ哀ちゃん？」

もう言い逃れできないと灰原は思った。

「凄いわね……」

その言葉しか見つからなかった。

「ちゃんとコナン君に言うのよ。多分あの子そう言うのに鈍いから」

笑顔に蘭は部屋から出ていった。

く次の日く

灰原の体調は平常に戻っていた。大事をとって一日休む事にした。

「あ、そうだ灰原。俺昨日お前に怒鳴ったけど、体に異変なかったぜ！」

コナンは笑いながら報告した。

「あらそう。あの時はうるさかったわ」

「オメーがぶつ倒れるからだろ？ 今度から気を付けるんだせ？」

「はいはい。貴方から言われたくないけどね」

そのまま地下へと向かった。

コナンは少し微笑み地下に行く灰原を見送った。

## 第四十二話　蘭と灰原（後書き）

読んで下さいありがとうございます

灰原の気持ちを書くためにこの話しつくりしました。

哀ちゃん頑張りましたね。コナン無事に三年以上生きられます!!

コナンの人生にもうすぐ終止符が!!

次回一ヶ月ほど月日が流れるかな。

ありがとうございます

## 第四十三話　またね

一ヶ月後

「皆に報告がありまーす。明日江戸川君と灰原さんが転校することになりました。」

一年B組の担任・小林先生が朝のホームルームで皆に知らせた。

「短い間だったけどありがとな。親の都合でイギリスに住むことになりました」

コナン少し丁寧な言葉で皆に話した。灰原も一言お礼をいった。

「少しの間だったけれどありがとう。会えて嬉しかったわ」

行き先は隠した。皆はそんな事気にせずに泣いていた。

余程二人の存在感が大きかったのだろう。歩美も元太も光彦も泣いた。コナンとしてではなく新一として会える事はこの三人だけは知っている。それでも新一とはまた違うコナンの存在に会えなくなることに悲しくなる。灰原も三人にとっては今でさえお姉さん感があったのに、ほんとお姉さんになってしまうことは寂しいものだった。

「では、一時間目始めるわよ」

先生の声がして皆は姿勢をただした。それでもすすり泣きは止まることはなかった。

帰り道

「すごかったな。一時間目終わるまで全員泣いてたぜ」

元太が振り返り二人に話しかけた。

「だな。一年も過ごしてねえやつらに彼処まで泣かれるとは驚いたよ」

「そうね」

「でも、寂しいな。二人ともいなくなっちゃうなんて……」

少し涙目になる歩美。コナンも、灰原も返す言葉がなかった。それをフォローするかのように、光彦が会話に加わった。

「みんな、寂しいですけど、これからもあえるじゃないですか。ただ先に大きくなるだけです。きっとこれからも米花町に二人共いますよ！ ね？ コナン君！ 灰原さん」

「ああ（ええ）」

二人の声がピツタリ揃った。

「哀ちゃんは今から何処に住むの？」

歩美は心配そうに灰原を見た。

「大丈夫。博士の家にいるわ」

歩美は一気に元気になった。もちろん光彦や元太も満面の笑みを見

せた。

「じゃあ、大人の哀ちゃんがいつでも見れるね」

無邪気になる歩美はいつもの明るい歩美に戻っていた。

「じゃあな！」

「バイバイ」

「それじゃ」

三人とはいつもの場所でいつも通り別れをつけた。

「あの子達とはもう良いのかしら？」

皆と別れてから程なくして灰原から質問にコナンは“ああ”とただ答えた。

〳〵次の日〳〵

「今日は江戸川君と灰原さんのお別れ会をします」

「はいー!!」

先生の言葉と皆の返事に二人して驚いた。まさかお別れ会を一日潰してすることなど思ってもいなかったからだ。

「さあ、江戸川君と灰原さんは図書室に行ってください」

小林先生はコナンと灰原を教室から追い出した。

「まさかクラス全員で“別れの会”をするとはな」

廊下を歩きながら灰原に話しかけた。

「いいんじゃない。それだけ貴方あの子たちに気に入られてるのよ」

フフッと笑う灰原にコナンが言葉を直した。

「“貴方”だけじゃねえだろ？」

その顔は満足そうな顔だった。灰原は“そうね”と答えたまま図書室まで無言で歩いた。灰原の顔はにわかに微笑んでいた。図書室に入り何分か経った時灰原から話しかけた。

「ねえ」

「あん？」

本に集中していたコナンが顔を上げた。

「貴方、ほんとに体大丈夫なの？」

疑うような目をコナンに向けた。

「大丈夫だ。体育でもサッカーで走り回ったけど何にも起こらなかった。お前だつて見てただろ？」

疑いの目で見える灰原を自信満々の瞳で返した。

「なら、いいけど」

「それに、あれからもう一ヶ月経ってるし、この前犯人追い掛けた

けど何ともなかったぜ？」

得意気に話すコナンに灰原目が余計に鋭くなった。

「貴方また無茶して犯人追い掛けたの!？」

コナンはまるで、“しまった” と言うような顔を見せた。

「む、無茶なんかしてねえよ」

言い返してみただけれど丸つきり説得力がなかった。

「哀ちゃん！コナン君。準備できたよ」

ドアの方から三人が覗いていた事に二人は少し驚いた。そのまま話しは中断し教室に向かった。ドアを開けると教室は折り紙などでたくさん飾られ黒板には“哀ちゃんコナン君ありがとう。また会おうね”と書かれていた。“さよなら”の言葉は一切書いてはいなかった。“さよなら”とは最も言いたくない別れの言葉、少し前に灰原が言っていた事。それを聞いていた三人が言葉を考えたのだらうと二人は納得した。その後はワイワイはしゃいで校歌を歌い一日に終わりを告げた。小五郎や蘭には一週間前から、事務所を去る事を伝えてあった。

「今日なんだね」

晩御飯中に蘭がふと声を出した。

「うん。今までありがとうね。おじさんもありがとう」

蘭の瞳は涙ぐんでいた。小五郎は無言のまま、ご飯を食べ続けた。  
「ご飯も終わり一段落ついた頃呼び鈴がなった。其処には江戸川文代が立っていた。」

「長い間、この子を引き取って下さりありがとうございます」

文代は一礼をしてコナンを見た。

事務所の下には車が一台止まっており、コナンは助手席へと誘導された。

「蘭ねえちゃん。またね。おじさんもありがとう」

「うん。コナン君もまたね」

「元気だな。また居候なんかで来ても許さんからな」

小五郎は素っ気なくコナンに言い事務所へと入っていった。

「それでは」

また文代は一礼して、運転席に乗り去っていった。

「バイバイコナン君。次会うときは新一だったらいいな……」

蘭はコナン達が去っていったほうをもう一度見つめ、事務所に帰った。

#### 第四十三話ゝまたねゝ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

コナンも哀ちゃんも無事転校する事が出来ました！！

目標は今年中に完結させたいと思っています。なので冬休み入りしましたらいつもより投稿早くなるかもしれません。頑張ります。

何だかんだでズルズルもうすぐ終わると書きながら長くなってしまい申し訳ございません。

展開が急に早くなっていましたらすみません。

これから応援宜しくお願いします！

評価感想待ってます！

次回博士の家です

#### 第四十四話　命の大切さ

文代は変装を解いて有希子になった。

「もうすぐ、新ちゃんの本当の姿がみれるわね」

ワクワクしながら自分の家の鍵を開けた。

「さあて。コナンちゃん一緒に寝ましようね」

有希子は嬉しそうにコナンを抱き上げた。

「ちよっ！待てっ！おい！！」

コナンの声を無視をしてそのままニコニコ顔で家に入った。

何時だったか初めてコナンに会った時と同様コナンはジタバタ足をばたつかせた。

「良いじゃない。最後なんだから」

そんな声がコナンに届くわけもなく必死で抵抗した。しかし、全く有希子には無意味だった。

　　次の日

コナンは博士の家の呼び鈴を鳴らし、灰原が顔を出した。コナンを招き入れリビングに誘導した。博士は、あの時買ってきたコーヒ―

をコナンの前に出した。

「サンキュー博士」

そのコーヒーを一口飲んだ。

「美味しいじゃねえか」

思わずコナンは声に出した。

その言葉を聞き灰原はフワッと笑った。

「良かつのお哀君。新一！それ哀君が作ったんじゃ」

「へー。灰原がね……」

マジマジとコナンが灰原を見るから灰原はコナンに“文句ある？”といった目付きを送った。

「それで？ 今日来た理由薬のためでしょ？」

「あ、ああ」

「さっさと地下にいくわよ？」

灰原はスタスタ地下へと向かった。

「なんだよ。あいつ」

「うれしんじやよ」

博士はニコニコしながらコーヒーカップを台所に持って行った。

（地下室）

「はい、これ……」

灰原の掌には今まで嚴重に保管されてた小さな箱がありその中には解毒剤が二個入っていた。

「ありがとうな。灰原」

「私、礼を言われる筋合いがないわ。だって私がこの薬作らなきゃ、あなたはこんな事にはならなかったもの」

渡しかけた解毒剤の箱を握って自分の胸へと引き寄せた。

コナンはフツと笑い優しい目で灰原を見た。

「俺さあお前に感謝してんだぜ？　こんな経験他の誰にもできねえ。蘭には心配かけまくってるけど、大切なダチ作れたし……それに、  
“命の大切さ”を改めて知ったんだ」

「命の……大切さ？」

座り込んでた灰原が顔を上げた。コナンはしゃがみ灰原と視線を合わせた。

「ああ、俺今まで好奇心だけで、事件に首突っ込んで危ねえ事してた。周り見ずにいろんな人に心配も迷惑もかけてた。

そんな事に気付いたのコナンになってからだ。

コナンになつてなきゃこのまま後先考えずに首突っ込んで死んでいたかもしれない。

組織と戦ってあいつらに命操られて余命三年って聞かされたとき正

直ショックだった。三年しかいきれねえなら殺してくれっておもった。でも、解毒剤が出来るなら“これから命あるかぎり生きたい”って思えるようになった。それにお前が必死だったから解毒剤の望みは確信になったんだ。だからお前には感謝してる。まだ三年経ってねえけどお前を信じるよ」

「バカ……」

聞こえているのかいないのかコナンは手を差し伸べ、灰原は掴み立ち上がった。

「ほら、博士のとこ行くぞ」

コナンは灰原の手を握ったまま、リビングへと向かった。

「待って」

灰原はコナンを呼び止めた。リビングへ続く薄暗い階段で二人は足を止めた。

「何も言わないで聞いて……私……貴方を追いかける。負けない。高校生に戻って互角に蘭さんと戦うわ」

コナンはキョトンとした顔で灰原を見た。

「呼び止めた話しはこれで終わり……」

灰原は先にリビングへと向かった。コナンも何やら考えながら階段を上りリビングに入った。

そこには博士はてもちろん有希子と歩美、光彦、元太そして服部

までもが居た。

「なんでオメーがいんだよ!？」

コナンの驚いた顔に服部は笑った。

「ええリアクションやで工藤。昨日電話があってん」

「電話!？ まさか!！」

「ああ、そうや」

一同は有希子の方に視線をむけた。

「そう。私よ。電話しちゃった」

笑いながら答える有希子にコナンは溜め息を漏らした。コナン以外の皆は笑い合っていた。

「じゃあ、そろそろ戻りますか」

その声で笑い合っていた空気から静かな空気へと変わった。緊張だけが残った。

「コナン君バイバイありがとう。哀ちゃんバイバイありがとう」

歩美の消えそうな声は二人に確りと伝わった。

二人はほぼ同時に薬を飲んだ。

数分も経たないうちに二人は苦しみ出した。

その苦しそうな姿を見て探偵団はお祈りをするかのように手を合わせお経のように“大丈夫”と繰り返した。

二人が気を失った後、江戸川コナンは工藤新一に灰原哀は宮野志保に戻った。

その後、志保は有希子が抱き上げ新一は服部に抱かれる形で博士達が使ってた寝室に運んだ。皆ベットの周りから一方も離れず二人が起きるのを待ち続けた。

## 第四十四話「命の大切さ」(後書き)

本文お読み、後書きまでありがとうございます！

初めのほうの有気子の仕草が気になったかた単行本14カンを参照。  
今回コナンが少しイメージ違がったかも……違っていたらごめんな  
さい!!

m ( \_ \_ ) m

哀ちゃん遠めだけど告白！コナン鈍感でわかってません(苦笑)  
いよいよ工藤新一&amp;宮野志保登場

次回博士の家。(それから蘭と新一かな 未定)

最新情報

三枝夕夏 I N d b

「雪どけのあの川の流れのように」

が、2008年1月14日からの名探偵コナン・エンディングにな  
ります!!

読んでくださいありがとう

では

#### 第四十五話　元の体・志保の思い

先に目を覚ましたのは宮野志保だった。

「あ、哀ちゃん目覚めたんだね！！」

歩美は嬉しそうな声をだし、寝てしまっていた元太を起こした。

「工藤君は？」

“まだや”と遠くの方で声がした。その声は紛れもなく服部だった。

「あら、貴方いたのね。それで、何時間位だったの？」

「五時間くらいやったけな」

少し考えながら答えたが志保は疑いの目で服部をみた。

「大丈夫。合ってるわよ」

服部の後ろから有希子が笑いながらやってきた。

「体は大丈夫？」

「ええ」

「良かったわ。後は新ちゃんね」

有希子は心配そうに新一の姿を見た。

（工藤君……）

志保は心の中で願いつづけた。

（一時間後）

新一はゆっくりと目を開けた。そして真つ先に自分自身の手を見た。自分の体に戻っていること心の底から喜んだ。

「工藤大丈夫か？」

服部の心配そうな顔が新一を見た。

「ああ、大丈夫だ」

答えながらキョロキョロ周りを見渡した。

「わたしはここよ……」

新一が志保を捉え安心した顔になった。

「新ちゃん良かった……」

有希子は嬉し涙を流し新一に抱きついた。

「ちよっ、母さん！」

嫌がる新一に容赦なく、力をいれる。

「良かったね！コナン君」

新一や志保だと解つていても探偵団は偽りの名前を呼ぶ。自分達が親しんだ名前を忘れないようにしてほしいと目で訴える。新一や志保も大丈夫つと目で語った。

「じゃあ二人助かったことだし、パーティーやろうぜ！！」

元太がはしゃいで博士に言った。二人も賛成と博士のところに寄った。

「じゃ、二人の記念日としてパーティーの準備じゃ！」

元太の提案に皆が賛成した。

「俺、蘭のとこいくよ」

盛り上がっていた空気が一気に静まった。

「そんな体で大丈夫なんか？」

皆が思っていたことを代表して服部が問いかけた。

「大丈夫だ。それにコナンとして離れたのは昨日の晩。多分今ごろ泣いてるかもしれねえ」

苦笑気味に言う新一の頬は林檎のように赤くなっていた。

「行つてこれば？　まだ準備に時間かかると思つしね」  
志保の言葉は皆が驚いた。

「ありがとう。宮野」

新一は起き上がり、早々と博士の家を出た。

（やっぱり背中を押してしまふのね……告白はしたけど気付いてない。もし気付いてくれていたら蘭さんに本気で立ち向かう気でいた。だって工藤君が好きなのは確か……でも工藤君の幸せを祈っているのも確か……二人の仲を裂いてまで、工藤君をとる気はないわ……私の初恋は片想いで幕をとじた……のね。でも感謝してる。ありがとう工藤君）

志保は新一が出ていった玄関を複雑な表情で追った。

（探偵事務所）

蘭の携帯の着信が鳴り響いた。液晶画面には“新一”とかいてあった。

慌てて蘭は電話をとった。

「新一！？　新一でしょ！！　ね！　答えて！！」

蘭は何度も新一の名をよんだ。その勢いに圧倒されながら答えた。

「ああ……今から下に降りてきてくれねえか？」

蘭は慌てて事務所の階段をかけ降りる。その途中で足が絡まり転けそうになった。しかし、蘭は地面に叩きつけられず、無傷であった。蘭は恐る恐る目をあけた。其処はガツチリした体の中だった。

「オイオイ……足絡まるほどー」

最後まで言う前に新一は蘭をそのまま抱き締めた。

「…………ごめんな蘭。今までほんとにごめん」

力一杯抱き締めた。

「バカ！ バカ。会いたかった……会いたかったよ新一」

蘭は確り、新一を抱き締めた。

「蘭？ いまから公園に付き合ってくれねえか？」

蘭だけに聞こえるよう囁いた。蘭はコクリと頷いた。

第四十五話　元の体・志保の思い（後書き）

メリークリスマス

この日に間に合った！二人の出会い！！

志保は志保なりに諦めがついたみたい……。

志保ごめんなさい……気付いてあげれない工藤君を許してあげてく

ださいm（――）m

by 作者

次回公園で新一が全てを話す。

では！メリークリスマス！！

菜花

## 第四十六話　告白

（公園）

空はもう茜色の世界。向かい合うように設置されたベンチの片方に二人は座った。

「それで、話してなに？」

初めに切り出したのは蘭だった。

「俺が今まで居なかった訳」

蘭は“ やっぱり ” と言った顔で下を向いた。

「ずっと黙ってた事あんだ」

新一も下を向き加減に話しかける。

「私が当ててあげる。私なりに推理したの。新一は……コナン君でしょ？」

下を向いてた蘭が新一を見た。新一は心底驚いていた。

「ずっと側にいてくれてたんだね。ずっと私を守っていてくれてたんだね。コナン君として。ありがとう。でもどうして？」

蘭は涙を流しながら新一から目を離さなかった。

「知ってたんだな。俺が“コナン”だって。俺さ、蘭とトロピカルランドに行った時黒ずくめの男達を追った日あっただろ？」

蘭は真剣に頷く。

「あの日黒ずくめの男たちの怪しげな取引を目撃したんだ。んで、背後からその仲間が現れて、一殴り」

新一はハハッと力なく笑った。

「その後薬を飲まされ、幼児化しんだ」

蘭は見る見るうちに驚いた顔になった。その後組織を潰そうとしていた事や灰原の事、そして組織を潰した事を話した。灰原について蘭は今まで以上の驚いた顔をした。

「じゃあ、今こうして、新一がいられるのは哀ちゃんのお陰って事？」

「ああ……そうなるな」

「じゃあ哀ちゃんにお礼いわなきゃ。新一の勝手な行動に振り回されたお詫びと、戻してくれたお礼を！」

蘭は笑いながらさりりといった。

「まるで俺が悪いみたない言い方——」

言いかけ蘭が遮る。

「へー、新一“悪い”って思っていないんだ」

「いや、そんなわけないだろ！」

「じゃあ哀ちゃんにお礼言いに行こ？」

そう言い蘭はベンチから立ち上がり背伸びをした。

「なあ、蘭？　俺を怒ったりしねえのか？　自分勝手なことした俺を」

「怒ってどおするの？　そりゃ、今まで黙ってた事頭にきたけど、でもこうして帰って来てくれた。長い長い時間掛けたけど約束ちゃんと守ってくれた。それで十分だよ。それに私を必死で守ってくれてたんでしょ？　小さな体で一生懸命。それに慰めてくれた。それだけで私嬉しいよ。でも、もう無茶だけはしないでね」

ニツコリ微笑む蘭の手を新一は握った。

「ありがとう蘭。お、俺……この日がきたら絶対言いたかった事があるんだ……俺、蘭を愛してる。お前がいたからコナンになつてからも諦めることしなかった。元に戻る日を信じて生きていけた。もう離れたくない。二十歳になったら結婚したい」

新一の言葉に蘭は即答した。

「私も……私も新一のこと愛してます」

二人はもう一度抱き締めあった。

「新一だ。ちゃんと此処に新一がいる。ありがとう」

抱き締めあいなが蘭は何度も何度も同じ言葉をいった。

先ほどまで茜色だった空は夜空へと変わっており、月が照らされる中、二人はキスを交わした。月は一人を祝うかのように綺麗な満月であった。

#### 第四十六話ゝ告白ゝ（後書き）

遂に告白！（＾o＾）／

誓いのキスしちゃいました（-＾o＾-）

でも、蘭受け入れはやかたったかな……！？

怒ってる気持ちより、感謝の気持ちの方が蘭には合ってる気がする。  
このようになりました。

次またパーティーです（笑）

菜花

## 第四十七話　絶対幸せになりなさい

「博士の家」

玄関で新一達はチャイムを鳴らしいつも通り志保が出てきた。

「あら名探偵さんの話しは終わったのかしら？」

少し蘭はびくつき、新一の腕を掴んだ。

「ああ、終わったよ」

「そう」

志保は短く答え、でも少しだけ笑って二人をいれた。蘭は未だに新一の腕を掴んだままだである。

「蘭？　大丈夫か？」

「うん……いざ志保さん見るとちよつとビックリしたの」

「まあしゃあねえよ。あいつがあんなオーラをだしてんだから」

囁いた筈なのに志保振り向き“何かいった”つとばかりの顔で新一をにらんだ。が、新一は気付いておらず蘭とまだ話していた。

「早く入らないと風邪ひくわよ？」

その声に次は新一がびくついた。あまりにも低いトーンに先ほどの声が聞こえていたことに気付いた。

そのまま文句言わずに博士の家に入った。

「志保さん？ 新一を戻してくれてありがとう」

蘭は深々とお礼をした後、新一をみる。新一は頭を下げなかったため、蘭が無理矢理下げさせた。

「いいのよ。工藤君には沢山助けてもらってたし、彼が居なかったら私とつくにいない運命。工藤君には感謝してるの」

それにつと付けたし蘭だけを呼び地下である研究所に招き入れた。

「それに、工藤君を貴方の側にかえしてあげたかったから。工藤君、博士の家ではずつと蘭さんの話しばかり……“薬”という魔物に縛られた彼を救いたかった。私も工藤君好き“だった”から」

志保は蘭から目をそらした。

「“だった”って今でも好きじゃないのですか？」

蘭は少し前、まだ志保になる前の哀ちゃんを思い出しながら頭に疑問符を浮かべた。

「今は違うわ。安心して。私ね、工藤君に遠回しだけど告白したの。でも工藤君は気付かなかったわ。それで、分かったの彼は私のことそう言う対象で見えていないって。分かったからもう踏ん切りついたわ。それに貴方たちの幸せこれ以上こわしたくない。私は彼の“相棒”そういつてくれただけで嬉しかった。こんな私を頼ってくれるだけで今は嬉しい」

一気に言う志保の目には涙が輝いていた。

「泣いていいですよ」

蘭の優しい声に涙を止めることが出来ずに、泣き崩れた。

「志保さん。本当にありがとうございます。私絶対新一を幸せにします」

泣き崩れていた志保に軽く抱き締めた。

「絶対幸せになりなさいよ!!」

志保のキツイ言葉でも蘭は頷いた。いつも彼女から距離を置かれて  
いる感じがして寂しかったが、今こうして自分を頼ってくれること  
にとても嬉しかった。彼女の今までの仕草が恋のライバル心だった  
とわかり安心した。

「志保さんは今度から私達と同じ学校に通うのよね？」

蘭の質問に志保は頷いた。

「じゃあ改めて私毛利蘭といいます。よろしくね」

蘭は右手を差し出した。志保は驚きながら自分の右手を重ねた。

「私は宮野志保」

蘭はニッコリもう一度笑った。

「私達もう親友だよ」

志保は“親友”っという言葉にとても嬉しいかった。

「ありがとう蘭さん」

志保は今までににない笑顔をみせた。

「ほら皆のところに行こ。“志保”」

呼び捨てにされ更に姉・宮野明美と重ね合わせてしまい苦笑をした。

リビングにいくともうパーティーは始まっていた。新一は不機嫌な顔で二人を見る。

「宮野！」

突然呼ばれ新一の方を向いた。

「明日暇か？」

「ええ」

「じゃあ明日俺と一日付き合え」

急な誘いに困惑し蘭のほうを向いた。蘭はちいさく“行っておい”でと囁いた。

「分かったわ」

新一はニツツと笑った。

〔夜中〕

「お母さんお姉ちゃん、私、初恋片想いで終わっちゃった。

でも私蘭さんなら工藤君を幸せに出来ると思う。だって二人お互いを思いあつて通じ合ってるもの。それと蘭さんから“親友”って“志保”っていつてくれたの。とても嬉しかった。お母さん産んでくれてありがとう。お姉ちゃん私お姉ちゃんの為にも幸せに生きます。今の暮らしは工藤君や博士、探偵団や米花町のみんなに囲まれて幸せです」

志保は家族に報告したのち眠りについた。

#### 第四十七話　絶対幸せになさう（後書き）

蘭と志保親友になりました！

これは絶対にしたかった事。孤独なんてかわいそうだもん。

それに

“ 助手じゃなくて相棒 ”

コナンが灰原にいったセリフ（ここのセリフ好きです。『紺碧の』  
を見てくださればあります）

灰原こと志保はもうすでに孤独な人じゃない。相棒も親友も友達も  
家族みたいな博士もみんなみなそばにいる。

最終的にこれがいいだったのかも…（わかりずら（^| ^ ;）  
お母さんやお姉ちゃんにもつたえました（笑）

では

菜花

## 第四十八話　約束

「次の日」

新一は博士の家の前でチャイムをならした。返事をして、出てきたのは志保で、新一は啞然として、少し顔が赤くなった。

「お、お前その格好……」

「あら、変かしら……昨日博士が買って来てくれたのよ」

そう、志保は新一が想像していた以上に美人だった。志保は涼しげな水色のワンピースをきて上から白いカーディガンを羽織りパンプスをはいた格好である。春に近い今は少し肌寒い格好かもしれない。

「いや、似合ってるよ」

赤くなった顔をかくして、行くぞつとスタスタ歩き始めた。

「ねえ！何処にいくの？」

先にいく新一に小走りで追いかける。

「ついてこりゃ分かる」

またいつもの悪ガキな笑顔で振り返り志保に一瞬ウインクをした。そのままわけわからず新一にひたすらついていった。

「晴れて良かったな！　お前を外に連れていくにはいい天気だ！　久々だろ？　その姿で空の下歩くの？　組織にいたころも地下とかいて、あんま外でてねえんだろ。それに約束お前としたしな」

「そうね。でもこの体で久々なのはお互い様よ」

相変わらずな志保に新一は苦笑をした。

家から歩いて電車に乗って着いたところ、それは志保の父・宮野厚司のいる刑務所だった。

「ほら会いにいけよ。たった一人の肉親だろ？」

新一は志保の背中を押した。そのまま志保は警備員と共に刑務所へはいった。

（刑務所）

「面会時間三十分」

そう告げられ狭い個室へと入った。  
数分後宮野厚司が入って来た。

「志保……すまなかった」

厚司はいきなり謝罪した。志保は目を大きく丸くさせた。

「お前を酷い目にあわせて」

そこまでのいい顔を上げた。

「ありがとう。お父さん。私ね、お父さんのこと恨んでないわ……」

志保は少しだけ笑った。

「それに、私いまの町で、精一杯生きてみようって思ってるの。友達もいるから幸せ」

志保の言葉は厚司は喜びの顔を見せた。

「志保……工藤新一君は？」

心配そうに厚司は志保を見た。

「大丈夫。二つの解毒剤は多分成功。私達は元に戻れたから。心配しないで」

厚司は“良くやった”と数滴涙を流し拭った。

「それで、刑務所からできたら、米花町にきてほしいの……一緒に……住みたい」

今度は厚司が驚いた。思いがけない志保の発言にとまり掛けた涙が溢れた。厚司は強く頷いた。

（四十分後）

志保は刑務所から出てきた。少し涙目の顔を隠すような格好で新一の方へ向かった。

「思い伝えたか？」

新一の言葉は“ええ”と答えた。

「それじゃあ、散歩でもしながら帰るか」

新一は志保の手を引き歩き出した。志保の顔は少し赤くなっていた。

く米花公園く

「んで、何話してきたんだよ？」

二人はブランコに座りコーヒーを飲んでいた。

「さあ。自分で考えたら？ 名探偵さん？」

“んだよ”と文句を言いながらブランコをこぎたした。

「ヒントあげるわ。“幸せ”それがヒント」

志保は飲みかけのコーヒーを柔らかい目で見つめた。新一はフツと笑い“良かったな”小さなめに答えた。

「あゝ新一お兄さんと志保お姉さんだ！！」

聞き覚えのある声をきき二人は声のする方へと向いた。そこには歩美・光彦・元太がいた。

「オメー蘭姉ちゃんいるのに何浮気してんだよ！」

元太は新一に近づき、凄い目で見てきた。

「ちげーよ！ 誰が浮気なんかすつかよ」

新一は怒鳴った。しかしそこは笑いの場になっていた。

「冗談ですよ！」

志保を含め皆が笑った。

「さて、帰りましょうか」

みんなは公園を出ていった。少し前のように前に歩美・光彦・元太後ろに志保・新一と自然に二列になった。

「今日はありがとう。約束守ってくれて。おまけにお父さんに合わせてくれて」

「約束は守る主義だからよ！」

ニカツと笑う新一を本当に心から感謝をしる志保。三人はバイバイいつもの道でわかれた。

「おれ二十歳に蘭と結婚するんだ。まだお前に伝えてなかったから伝えとく」

「あら、嫌みかしら」

志保は無表情で新一を見た。

「ちげーよ。ただの報告と目標だよ」

本日二度目のウインクをした。

「じゃあな」

「まあ精々頑張りなさい」

興味なさげにスタスタ博士の家に入っていった。しかし、志保の顔には自然と笑みが溢れていた

「ちえ、見た目がいいのに中身かわいくねえ奴」

新一も自分の家に入った。

#### 第四十八話〈約束〉（後書き）

ずっと前にしていた約束果たせました！！

そして父と会えておまけに一緒に住もうだなんて志保じゃないみたい……。でも出来るなら一緒に住んだ方が幸せかなって思っんです。たった一人の肉親ですから！今は博士の家ですよ！

しかし、私ってファッションセンスゼロですね（T|T）  
ファッションわからないよ（<|>）（作者の叫び

皆様此処で読んでくれてありがとうございます！

次回は……内緒です

菜花

## 最終話　結婚

「あれから五年」

五月四日、新一達は二十二歳に探偵団は十二歳。今日は新一と蘭の結婚式である。

高校卒業後と同時に新一と蘭は毛利小五郎と妃英理結婚することを伝えた。小五郎は初めは断固として許そうとしなかった。しかし、新一の熱意・真剣さに“大学卒業後にしろ”という条件で二人を許した。

工藤優作工藤有希子は喜んで許してもらい、現在新郎新婦の誓いのキスをしブーケを投げる最中である。

「らーん！　ここよ！　私に！！！」

園子が大声で、蘭に手をふる。蘭は苦笑しながらブーケを投げた。そのブーケは歩美の手にふわりと着地した。歩美は隣に一緒にいる志保に話しかけた。

「わあ。見て志保おねえさん！綺麗！」

「そうね。良かったじゃない。将来あの二人のようにいい人に巡り会えるわ」

志保はフワツと笑った。歩美は満面の笑みで笑い蘭に向かって“ありがとうございます”と礼をした。その数歩離れたところで園子が叫んでいた。相当ショックだったのであろう。皆は笑いあった。

くその夜く

工藤の家

二人はソファーにすわり蘭は新一にもたれかかるように体を預けた。

「良かったね。今日の結婚式」

「ああ。みんな変わってなかったしな」

二人は静かな部屋で今日の事を振り返りながら笑いあっていた。

「そうね。あ！ ブーケ歩美ちゃんのところにいったね」笑いながら新一を見上げる。

「ああ、相当喜んでたな。それに光彦と元太“俺が歩美と結婚するんだ”って言い合ってたな」

「そうね。あの二人ずっと歩美ちゃんの事すきだもんね。でも、歩美ちゃんが好きなのはコナン君だよな？ 浮気しないでね」

蘭は声は楽しそうにでも顔は真剣だった。新一は焦りながら否定した。静かな部屋がとても賑やかになりその笑いは自然に消えた。

「コナン君か……。懐かしいな……。もう、いないのよね。新一だもんね」

蘭の寂しい声に新一はフツと笑った。

「蘭！コナンは居ないけど俺の中に居る。俺がコナンなんだからいつでもコナンになってやる！でもそれ以上に新一としてお前を幸せにする！」

二人向き合う形で見つめあった。

「新一ありがとう。そだね、コナン君はちゃんといるんだよね。私のすぐ近くに！」

「ああ！」

「いつでも“蘭姉ちゃん”っていつてやるよ」

その瞬間蘭は啞然な顔をし、動作も一瞬とまった後苦笑をする。

「ちょっとそれはコナン君の綺麗な姿台無しになる」

「んだよ。その言い方」

その後二人で笑いあった。

「今まで支えてくれてありがとう新一。此れからもずっと宜しくね」

「ああ、今まで心配かけたぶんこれからは側で守ってやる俺も宜しくな！」

「新一誕生日おめでとう」

二人は寄り添う形で眠りに就いた。

この先に起こるかなんてわからないけれど二人で力をあわせれば絶対乗り越えられると蘭の寝顔を見ながら新一は蘭の頬にキス

をした。

）完）

2007年12月31日

## 最終話〜結婚〜（後書き）

皆様ありがとうございます。無事ハッピーエンドに終わることができなりよりです。新人の私の長い作品を読んで下さいありがとうございます。評価感想アドレスを書いていただいた読者様先生方ありがとうございます。

皆様の支えのお陰でここまでこれたこと感謝しております。

読みづらい箇所が沢山ある作品でした。なのでこれから直していきます。

作者になってみて、読んでくださる方、作品にとっても関心を持つてくださった方に支えられ作品が成り立つことを実感しました。読者がいてくださるから私も此処にいられる作品が作れるのですね。とても勉強になりました。

読んでくださった方、評価感想アドレスをくださった読者様先生方ホントにありがとうございます。

それでは

A H A P P Y   N E W   Y E A R !

皆様にとってよいお年を！幸ありますように

2007年12月31日

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4258c/>

---

コナン対組織

2010年10月10日02時44分発行